

第二編 先史時代

第一章 先史時代概説

第一節 人類のあけぼの

一 地球の歴史と人類の出現

地球が誕生したのは、今から五〇億年前とも六〇億年前ともいわれているが、地球が形成されてから現在に至るまでの時代を地質時代とよび、主として地質とその地層から発見される化石をもとに生物進化の系統をたて、次のように分類区分している。

- I 始生代 無生物時代
- II 原生代 原始的生物の時代
- III 古生代 無脊椎動物と魚類の時代
- IV 中生代 爬虫類の時代
- V 新生代 哺乳類の時代

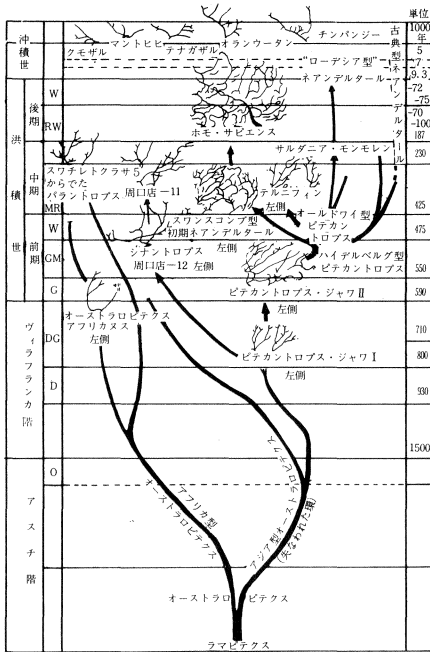
最後の新生代は、さらに第三紀と第四紀に二分され、第四紀はさらに更新世と完新世に分けられる。

人類がこの地球上にあらわれたのは、現在の研究成果では今から約二〇〇万年前更新世の初期で、東アフリカ地方

に棲息していたオーストラロピテクスの仲間が最古とされている。

しかし中生代の終わりに発生した哺乳類の仲間は第三紀に入り非常に発達を遂げ、第三紀の終末には、すでに人類と他の猿類との進化は、分化していたようである。

直立歩行し、自然の河原石の一端を二、三度打ち欠いたような原始的な石の道具を製作したり、火や言語を使用するようになった人類は、猿人と呼ばれるオーストラロピテクスの仲間が最初であるが、原人とよばれる中国の北京原人（シナントロプス・ペキネンシス）ジャワ原人（ピテカントロプス・エレクトウス）と進化し、その分布もアフリカからヨーロッパ、アジアへと拡大されていくのである。また、彼らの使用した道具は大きく打ち欠いた剝片の部分を使用した剝片石器や残りの核を利用した石核石器であった。



人類発達系統樹 ユ、ゲ、レツエトフ
『人類の起源』（昭和43年）

更新世は別名氷河時代ともいわれ、地球の極を中心に地球全体が厚い氷におおわれていた時代でもあった。現在までに知られている氷期は、ヨーロッパを中心にして、研究され、ギンツ、ミンデル、リス、ウルムと四回の大水河期が確認され、その各氷河期の間にそれぞれの間氷期があり、人類や動植物の進化に影響を与えた。

今から一四〜一五万年前の第三氷期ころになると人類は原人段階から旧人段階へと

地質年代表			紀, 世	継続年数 単位 100 万年	動植物界のおもな特徴
新生代 Cenozoic	第四紀 Quaternary	完新生 Holocene		1.5 ↓ 2	ヒトの出現と発達。
		更新世 Pleistocene			
	第三紀 Tertiary	鮮新世 Pliocene		25	類人猿の出現。
		中新世 Miocene			
	古第三紀 * *	漸新世 Oligocene		40	鯨類と長鼻類の発達。有胎盤哺乳類——食虫類、齧歯類、有蹄類、霊長類の主要グループの発達。被子植物——高木類と草本類の広い分布。
		始新世 Eocene			
		暁新世 Paleocene			
中生代 Mesozoic	白亜紀 Cretaceous			70	白亜紀の終わりに恐竜類は全て絶滅。飛行性トカゲ、海生爬虫類の絶滅と鳥類の発達。鱉、角竜、カモノハシ竜の出現と発達。被子植物の出現。イクアノドン、剣竜の絶滅。
	ジュラ紀 Jurassic			60	鳥類の出現と哺乳類の発達。恐竜類——肉食恐竜、竜脚類、剣竜類の広い分布。飛行性トカゲの発達。海生竜——魚竜と長頭竜の繁栄。裸子植物の広い分布。
	三畳紀 Triassic			45	哺乳類の出現。海生爬虫類、カメ類、ワニ類の出現。古両生類——迷歯類などと古爬虫類の絶滅。
古生代 Paleozoic	ペルム紀 Permian			45	古爬虫類——杯竜類および獸形類の発達。裸子植物の発達。無脊椎動物のあるもの——三葉虫などの絶滅。
	石炭紀 Carbon			55 ↓ 75	爬虫類の出現。迷歯類の発達。シダ類——巨大なトクサ類、ヒカゲノカズラ、種子シダ類の繁栄。
	デボン紀 Devonian			70 ↓ 50	陸上脊椎動物——迷歯類の出現。昆虫類、シダ類、いろいろな魚類の出現。甲皮無類の絶滅。マツバランの衰微。
	シルル紀 Silurian			30	マツバラン類とシダ類の発達。最初の脊椎動物——無類の出現。無脊椎動物のいっそうの繁栄。
	オルドビス紀 Ordovician			60	
	カンブリア紀 Cambrian			70	海綿類、古杯類、棘皮類、軟体類、腕足類、三葉虫類の広い分布。最初の陸上植物——コケ類、トクサ類、シダ類の出現。
原生代 始生代	先カンブリア時代 Precambrian			2800	無脊椎動物の出現。バクテリアと水生藻類の広い分布。単細胞植物——バクテリアの出現。地上に生命が誕生した。

A. K. ロジェストウェンスキー『ユーラシアの古動物界』より

(昭和48年)

進化し、寒冷な氣候をのりこえるため、動物の毛皮から衣服を作ったり、そのための道具もかなり進み、軽量、複雑なものになってくる。その主なものは槍先や皮はぎ、キリなどであった。この時代の代表的な人類はドイツにおいて最初に発見されたネアンデルタール人の仲間である。ネアンデルタール人は広く旧大陸地方に分布し発展を遂げるが、その一部にはすでに原始的な宗教心が発生し、死体を意識的に埋葬したのもあった。

最後の氷河期が地球をおおった三、四万年前ころになると人類は、現世人と同じホモ・サピエンスⅡ新人の段階に入る。新人は旧人より知能が非常に発達し、道具もより小型化した石器や骨角器、槍投げ器（ウーメラ）、投げ玉（ボラー）などの道具を發明する。

また、フランスのラスゴーやスペインのアルタミラ洞穴に残されているようなすばらしい洞穴壁画、ビーナスとよばれる女人像やマンモス、毛犀、トナカイなどの浮彫りや彫刻作品などを残したのも彼ら新人であり、その代表的なのがクロマニヨン人である。また、ホモ・サピエンスの段階になりはじめて新大陸（南北アメリカ）にも人類が棲息するようになるのである。

二 文化の發展段階と先史時代区分

今から一万年前になると長かった氷河時代更新世も終り完新世に入る。人類は先に述べたごとく、この段階から現在見られるような黄色、白色、黒色、オーストラリア原住民などの人種分化が行われたといわれている。

氷河時代が終り、地球が現在のような温暖な氣候条件になりはじめるころ、人類は従来までの石の道具だけによりマンモス、野牛、オオツノジカなどの絶滅動物を狩猟する時代から小さな石（細石器）を組み合わせて道具をつくり、また弓矢を發明し、磨製石器を使用し始め、イヌの家畜化、土器の發明使用などの時代を迎えるが、更に前進して次の新

しい時代へと移行していくのである。

肥沃な三日月地帯とよばれるチグリス、ユーフラテス川の流域は人類文明発生の地とされているが、その北のメソポタミヤ地方は早くから農耕牧畜が発生し、石の道具とともに金属の道具をいち早く使った地方である。この地方では、紀元前四、五千年ごろには、すでに銅、青銅などの鑄造をはじめているし、近くのヒッタイト文明では鉄の使用もはじまっていたようである。

人類はこれらの銅や銅と錫の合金で銅よりも強い青銅を発明し、鉄を使用するようになると食料生産の中に一大革命を起こし、社会生活内においても原始共同体的性格から血族的集団へと変革し、放牧生活から定住村落生活へと変わり、やがてはエジプトのナイル川岸、メソポタミヤのチグリス、ユーフラテス河、インドのガンジス川流域、中国の黄河河岸に見られるような都市文明への時代とかわり、文字の発明、分業の開始、それに起因して貧富の差の増大、階級の分化などといった発展過程をへて歴史時代へと変わるのである。

人類はこのような進化の段階を経て現代にいたるのであるが、歴史は普通文字で書かれた記録を材料として研究されるのであるが、人類が文字を発明し、記録するようになったのは、人類の歴史からみれば、ほんの最近のことではない。そのため、それ以前の、おもに人類学や考古学が研究対象として明らかにされた遺跡や遺物、主として人類が使用した道具の材質によって、人類の歴史を調査研究し、それによって時代区分をしている。最初にこの時代区分を提唱したのは、デンマークの考古学者C・J・トムゼンで、彼は北欧の先史時代遺跡研究の成果から一八三六年、石器時代、青銅器時代、鉄器時代という三時代区分法を発表した。しかし、この石器時代をさらに旧石器時代、新石器時代に区分したのは一八六五年、イギリスのJ・ラポックであり、その矛盾を追求して、中石器時代を設置提案したのはJ・A・ブラウンであった。

ここでその時代区分をまとめて見るならば

1 石器時代

旧石器時代

中石器時代

新石器時代

2 青銅器時代

3 鉄器時代

となる。磨製石器や土器の存在のみによって新石器時代を特徴づけられないように、各時代は、それぞれ地域で、その文化に特色があるので一様なものではない。特に我国ではそのため

① 旧石器時代

② 縄文時代

③ 弥生時代

④ 古墳時代

⑤ 歴史時代

という時代区分を設定しているし、また、北海道は、同じ日本列島でありながら、その地理的条件と、文化の発展段階から本州と同じような時代区分にはならず

① 旧石器時代

② 縄文時代

③ 続縄文時代

④ 擦文時代

⑤ アイヌ時代

という時代区分を設定しているのである。

〈主要参考文献〉

A・K・ロジエストウエンスキー『ユーラシアの古生物界』昭和四十八年 学研
ユ・ゲ・レットフ『人類の起源』昭和四十三年 法政大学出版局

第二節 旧石器時代

日本における旧石器時代研究の歴史は、昭和二十一年、相沢忠洋氏が群馬県岩宿遺跡から、それまでは人間の生活の跡が残されていないといわれていた関東ローム層から発見した一片の石器が、その研究の端緒である。

それ以前には、平取町二風谷に永住していたN・G・マンロー博士が神奈川県酒匂川で採集した資料をその著「先史の日本」(明治四十一年)に発表したものの、大阪府国府遺跡出土の石器を喜田貞吉博士が発表したものの、直良信夫博士が北関東地方の石灰岩地帯で動物化石骨とともに発見したものなど、若干の報告が残されていたのみであった。

岩宿遺跡の発見後は、関東地方を中心に長野・東北・山陽・九州・北海道と全国各地に旧石器時代の遺物・遺跡が発見され、現在では一、〇〇〇カ所の多くを数えるようになったのである。

岩宿遺跡発見からの一〇年位は全国各地から発見される遺跡の相関関係に中心が置かれ、時代の名称も先土器、無土器などと研究者の間で統一された名称もなく、中には旧石器の存在そのものを否定する学者さえあった。

しかし最近の旧石器の研究は東北大学教授芹沢長介を中心に土器の存在を可能とする後期旧石器末期から北京原人と

の関連をも出てくる約三万年前以前の前期旧石器の研究へとさかのぼっている。特に下部旧石器の研究は進み、調査された遺跡も大分県早水台、栃木県星野遺跡など五指を越えるまでになったのである。

また、芹沢教授の区分する後期旧石器は、さらに三段階に区分され、全国各地から遺跡、遺物が発見されているし、次の晩期旧石器もしくは中石器とは土器の出現と縄文文化の発生との関連から、あくなき追求がなされている。

これら考古学的研究とは別に直良信夫博士や鈴木尚博士などを中心とする化石人類の追求も行われて、北関東地方や静岡県などから葛生人、三ヶ日人、牛川原人などと呼ばれる古人骨が発見され、ヨーロッパの旧、新人に対比されているが、今ところ化石人骨と石の道具とが伴って発見されたものはない。

北海道における旧石器の研究は昭和三十年、市立函館博物館による樽岸遺跡の発掘調査をまたなければならぬが、しかし戦前においても、すでに白滝遺跡出土の石器が名取武光助教授や故河野広道博士などの注目するところであったし、浦幌町吉野の石刃鏃遺跡は地元斉藤米太郎などによって調査研究され発表されている。

樽岸以降は、北海道大学助教授吉崎昌一を中心に研究がおし進められ、北海道でも後期旧石器の古いものが除々に発見されつつある現在である。今まで、ただ単に旧石器時代として我国の研究をふり返ってその現状を述べたが、さて旧石器時代とは、どういう時代であったのであろうか。前述のように人類が地球上に発生してから、このかた、土器や牧畜や織物を知らなかった約二〇〇万年の間を旧石器時代というのであるが、最近、英国で出版された考古学辞典では

旧石器時代とは、いまから約一七五万年前に、人類の出現と道具の製作をもって開始され、西暦紀元前（以下「前」と略す）約八、三〇〇年を最後に氷床がヨーロッパから後退するまでの氷河時代といわれる最近世の大部分を占める極めて長い時代のことをいう。旧石器時代はさらに最古型の人類—アウストラロピテクス及びホモ・サピエンスと礫器、握斧、チヨッパ—などの核石器の盛行によつ

て特色づけられる前期旧石器時代、ネアンデルタールとユーラシア大陸にひろく分布するに至った剥片石器—たとえばムスチエ文化—とを特徴とする中期旧石器時代、そしてホモ・サピエンスと石刃、彫刻刀の文化および西南ヨーロッパの洞穴美術とによって知られる後期旧石器時代に細分されている。前約三万八、〇〇〇年にはじまる後期旧石器時代になって、人類は初めて新大陸やオーストラリアへも住みつくようになった。

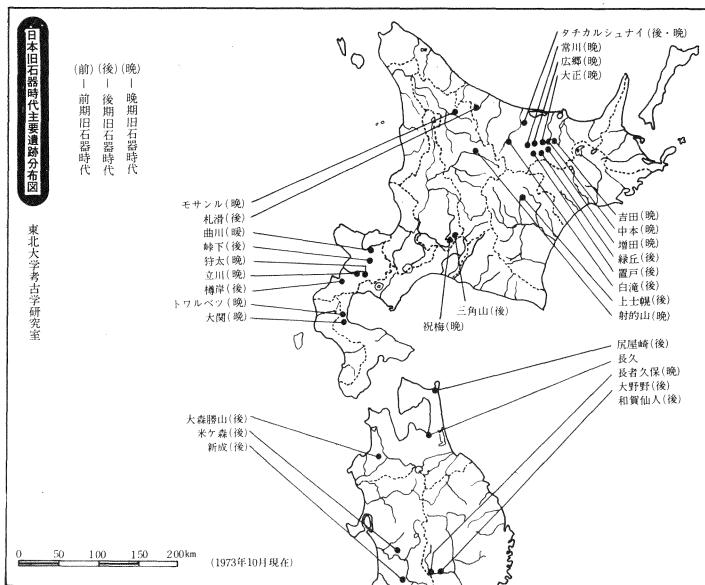
と述べている。

『古代史発掘Ⅰ』最古の狩人たち、旧石器時代 芹沢長介編 講談社 昭和四十九年

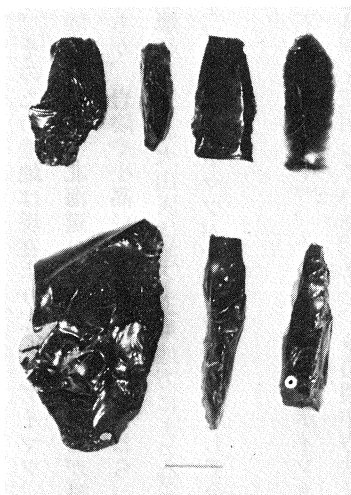
それでは次に北海道の旧石器時代の様子はどうかについて述べて見よう。

今から数万年前、日高山脈は最後の氷河期ヴェルム氷期のため、厚い氷雪におおわれ、各所に圈谷（カール）ができていた。北海道は陸橋によって、大陸とは陸続きであり、この陸橋を渡って、カラフトやシベリヤからマンモス、ナウマン象、ヘラジカ、野牛などの動物群が渡来して石狩低地帯や十勝平野に群がっていたのである。当時の気温は現在より五〜九℃ほど低く海面も一〇〇メートルほど低かった。そのため陸地は現在より広く、グイマツ、ヤチカンバ、ケシヨウヤナギなどの生育するツンドラ地帯のような所に、陸橋を越えて北海道に渡来した動物たちが群れをなし、また、その動物群を追って来た大陸からのマンモスハンターたちが、岩陰や小高い丘から動物たちをねらっていたことであろう。また、この時代は火山活動が激しく、支笏火山が爆発し、その火山灰は遠く道東地方にまで分布し、その跡は支笏湖となり、熱せられた火山灰によって蒸焼きにされたエゾマツやトドマツが、美々の化石林として今に残されているのである。

彼らは十勝石とよばれる黒曜石や頁岩などで作った石の道具、石刃（ブレード）、ナイフ、槍先（ポイント）をつけた投げ槍や手槍、彫器（グレーバー）で彫った骨角器などの道具類を使用していた。また、その製作方法は、涌別



北海道の旧石器時代遺跡 芹沢長介編
『最古の狩人たち』(昭和49年)を一部加筆



白滝遺跡出土の旧石器類
苦小牧市青少年センター蔵〔昭和49年〕

手法とよばれるような彫器の作り方に見られるようにシベリヤや北アメリカなど、後期旧石器時代の製作手法と同じであった。

現在、これらの石器類を出土する遺跡は、道内に二十カ所以上が知られ、道央の白滝、タチカルシュナイ、道南部の樽岸や立川遺跡が有名である。苦小牧市内からは、まだ発見されていないが、千歳市からは祝梅や三角山遺跡などが発見されているほか、広島町からは野牛の角、エリモ岬からは、マンモス象の臼歯が発見されている。

〔主要参考文献〕
芹沢長介編『古代史発掘Ⅰ』『最古の狩人たち』昭和四十九年 講談社

第三節 縄文時代

(一)

縄文時代とは、粘土で作った容器（土器）に縄目の文様を施した縄文式土器を製作、使用した時代のこと、この文化の研究の歴史は、すなわち日本考古学研究の歴史と言っても過言ではあるまい。

我国における近代考古学の開始は明治十一年九月、米人エドワード・モース博士による東京大森貝塚の発掘調査が最初であるが、それ以前にも、すでに奈良時代の「常陸国風土記」における貝塚の堆積と巨人伝説の記録、江戸時代における石の長者、木内石亭による石器の研究、新井白石の石器論、水戸光圀による古墳発掘の記録などが残されているのである。

明治から大正時代にかけての考古学研究は欧米風の新しい考古学研究法が導入され、それによって国内各地から遺物が発見され、報告された。発表の場合は主として明治十七年に創立され、十九年から刊行された人類学会の機関誌「人類学会報告」であった。

この時代を中心となったものは遺跡から発見される土器の製作、使用者の問題とそれを発展させた人類論の問題である。

坪井正五郎博士の「コロポックル説」と小金井良精博士の「アイヌ説」との対立であったが、縄文式土器の名称などでも斉一性がなく、各々の研究者によって種々な名称でよばれていたが、明治十九年臼井光太郎博士が縄文土器の名称を使いは

じめ全国的に一般化していったのである。大正時代に入ると人種論も一応の結着を見せ、次の科学的な研究に対する前段階として土器の使用者は「アイヌ説」が定説的になり、縄文式土器の名称も「アイヌ式土器」「アイヌ式縄文式土器」なる用語が使われた。後にはアイヌという言葉に対する反省があらわれ、縄文式土器、縄文土器などの名称で呼ばれていたが、縄文式土器の名称がもつとも一般化されていた。

更にこの時代は、従来までの関東地方中心の研究が、次第に地方にも波及し東北大学には長谷部言人、松本彦七郎博士、京都大学には浜田耕作博士、清野謙次博士、九州大学には中山平次郎博士などと全国的に強力にうごき始め、発掘調査に層位学の知識を取り入れた松本博士、海外で取得した新しい技術で大阪府国府遺跡を調査した浜田博士や縄文土器を厚手式、薄手式に区別した鳥居龍藏博士、清野謙次博士・長谷部言人博士等による古人骨の研究から新しい人種論へのアプローチなども行われ、その結果は清野博士の縄文時代に入り原日本人説となつて今日に至っているのである。

昭和初年から第二次大戦終了までの時期は全国各地において発掘調査を主体とする科学的な研究方法が押し進められ、その結果にもとづく縄文式土器の編年研究を助長した時代である。

古い歴史と伝統を持つ「人類学雑誌」や「考古学雑誌」に対して、新しく「史前学雑誌」や「考古学」が刊行され、山内清男、八幡一郎、甲野勇などの若い研究者が輩出し、研究成果が発表された。

特に山内清男博士による繊維土器の問題、縄文式土器編年研究の基礎とも言うべき縄文の施文技術変遷の研究などは特に注目すべきものであった。

さらに後年には、縄文文化終末期をめぐる「雑誌ミネルヴァ」でたたかわれた喜田貞吉博士とのミネルヴァ論争は、同博士の縄文式土器の編年の研究の成果が大きくもたらしたものである。また、博士は各地ごとの編年の基礎的体系



雑誌『ミネルヴァ』創刊号表紙
〔苫小牧市青少年センター蔵〕
(昭和11年)

として従来の大別から縄文式土器を早期、前期、中期、後期、晩期という五分法を発表し、研究者間によって使用されるようになった。

この時期を中心に土器編年の研究は、全国各地において発掘調査を主体に行われ、それに伴い縄文文化起源の問題も大きなテーマとして扱われるようになったのである。

それまでは三戸式や田戸式土器が一番古い土器群とされていたが、新しく廻転押捺文土器や稻荷台遺跡の研究報告がなされ、日本列島は北に「田戸住吉町系文化」南には「廻転押捺文文化、稻荷台文化」があり、対立しているらしいと考えられ、一時は南北二系統論が一部の人々に大きく支持されたが、その後の研究で欠点が指摘され、稻荷台式土器は捺系文土器とよばれ、次の時代の縄文文化起源論に大きな刺激を与えたのである。

昭和二十年から現代までは、前段階までの編年的研究は一応の成果を収め、その研究が地域研究の域にまで到達したことといえよう。

しかし、昭和二十一年、岩宿遺跡から旧石器時代の遺物が発見されるに及び、ただ単に縄文文化を一つの時代として研究するだけに止まらず、前時代からの関連において縄文時代を把握しなければならなくなってきたのである。

そのため撚糸文土器と新しく発見された隆起線文や爪型文との前後関係、ひいては旧石器的伝統の強い細石刃と土器との関連が提起され、長崎県の福井洞穴や愛媛県

の上黒岩洞穴などの遺跡が注目されるようになったのである。

縄文文化の起源の問題も、旧石器時代終末と縄文時代早期の研究が進むにつれ、従来の縄文文化の考え方からはずれる特殊な土器や石器などの遺物が全国各地から多く発見されるようになってきた。そのため、先に山内博士によって区分された五区分に、更に早期の前に草創期を入れようとする考え方もある。

この時代の重要な点として、放射性炭素による年代測定法が一般的に行われるようになり、縄文時代の絶対年代がかなり明らかになったことと、それが世界最古の土器であることである。

さらにまた、この期の特徴として、縄文文化の周辺である北海道や九州において、大陸との接触文化の研究がさかんになったことや縄文各期における大陸文化の影響への考慮、原始農耕の存在論、縄文文化終末から弥生文化にかけての人種論など重要な問題が数多く提起されている。

(二)

今から約一万年前、長かった氷河時代(更新世)は終り、日高地方の山々に見えていたカールも消え去り、マンモス、ナウマン象、オオツノジカ、野牛などの大型動物も絶滅してしまった。

北海道も今までは陸橋により、大陸と陸続きであったが、気温の上昇にともない、やがてそれも消え、津軽海峡、間宮海峡、宗谷海峡などができ、一つの島になってしまったのである。これからの時代を完新世といい、縄文時代を中心に現代まで続くのである。

一つの島となった北海道に丸木舟をあやつり最初に渡って来た人間は、環境の変化で新しく登場したシカ、キツネなど従来大型動物に比較して小型でスピードのある動物とそれを獲るための弓と矢を発見した人々であった。

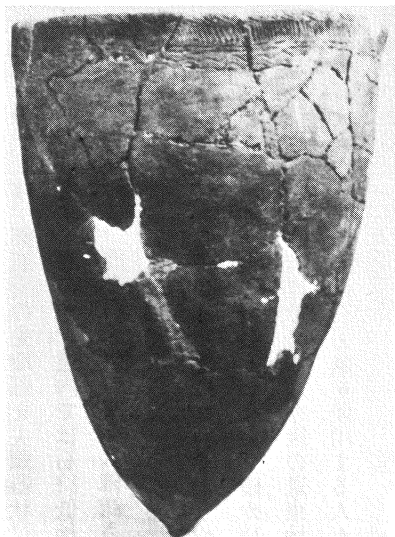


千歳市祝梅遺跡出土の旧石器
〔千歳市槌田節男氏蔵〕（昭和47年）

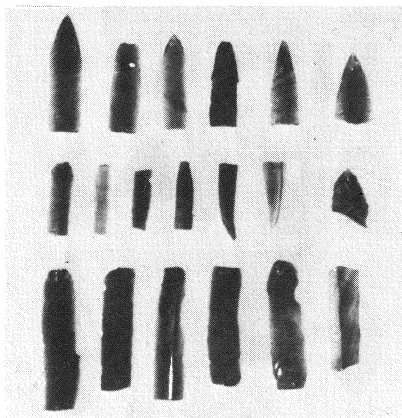
新しい弓矢とは、細石刃の先端部を尖頭器状に加工した石刃鏃とよばれるもので、大陸ではバイカル湖沿岸から沿海州にかけて分布するもので、道内では石狩低地帯より道東、道北地方に分布出土している。
苫小牧地方からは、今だ石刃鏃の文化は確認されていないが、日高地方や後志地方の一部などからは発見されている。

石刃鏃文化に対する研究は最近になってようやく全容が明らかにされつつあるが、石刃鏃に伴って土器が発見されるか否かと言うことは今だ判然としない。確かに伴っているものもあるし、また、同じ土器型式でありながら石刃鏃の伴わない遺跡もあるわけである。今後の道東地方における研究の成果を待たなければならない。しかし今から八九千年前大陸から北海道に石刃鏃を使用する人々が渡って来たころ、北海道でも土器が使用されるようになったことは確かである。

長い人類の歴史の中で、始めて化学変化を実生活に取り入れたと言われる土器の発明はアフリカや中近東地方にも、その発生の記録はあるが、目下の所、我国から発見される土器群が世界最古のものとされているのである。
北海道においては、道南地方を中心に太平洋岸に広い分布を持つ貝殻文土器群がある。貝殻文土器とは、サルボウとかアカガイなどアナダラ属の貝類の放射肋を施文用具として条痕文、圧痕文などを施文するものである。
しかし、同じ貝殻文を施す土器群ではありながら道南地



貝殻文尖底土器 函館博物館蔵
『日本原始美術Ⅰ』(昭和39年)



十勝浦幌遺跡出土の石刃鎌
〔苫小牧市青少年センター蔵〕(昭和47年)

方の函館市住吉町遺跡、根崎遺跡、七飯町鳴川遺跡に見られるような深鉢尖底土器群と道央から道東地方の白老町虎杖浜遺跡、大樹町大樹遺跡、釧路市沼尻遺跡などから発見される深鉢平底土器群との二通りがあるようである。

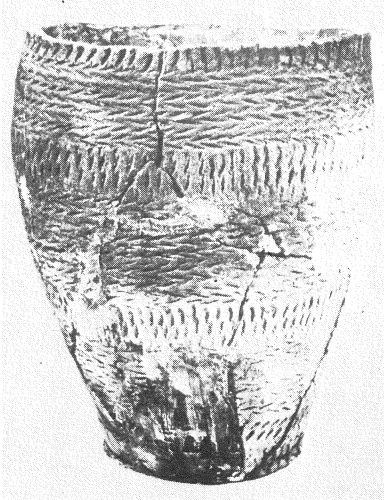
苫小牧市内からは、目下の所、貝殻文土器は発見されていないが、貝殻文土器の次に全道的に分布する土器群が数カ所の遺跡から発見確認されている。

この土器群は縄文を器面にころがしたり棒にまいてそれを押しつける絡条体圧痕文式土器と呼ばれるもので、発見地の名前をとってタンネトーE式(長沼町)、田原B式(静内町)、東釧路式(釧路市)などと言われている。

今から六、〇〇〇年前ころになると汎世界的な海進運動がおこり道内の各海岸平野部は入江状の内湾となり、魚介類の格好の生棲地となった。そのため、先住民はアサリやシジミなどの貝類を採取し大規模な貝塚を形成するとともに山野における狩猟ばかりではなく、内湾から外洋にまでも丸木舟を出し、大型海獣や魚類も捕獲するようになり、この時代から漁労も一層さかんになったのである。また、前の時期の放浪性



円筒下層D式土器 岩手大学蔵
『日本原始美術Ⅰ』（昭和39年）



東釧路式土器 釧路郷土博物館蔵
『日本原始美術Ⅰ』（昭和39年）

しかしこの時代全般を通して一番の影響力を持っていた土器文化は東北地方北部に発生し、南北に伝播していった円筒下層式土器文化である。円筒下層式土器は、東北地方北部の尖底土器文化の中から発生したもので、器形は単純な筒形を呈し、胎土には多量の植物繊維を含み撚糸文ないし縄文によって器面全体が施文されている。

道南地方では、函館市のサイベ沢遺跡を中心にかなりの分

に比べて定住性が強くなり、大集落も形成するようになった。土器は胎土の中に多量の植物繊維が混入し器壁が厚く、焼成の悪い静内中野式土器と呼ばれる土器群が道央地方を中心に栄える。静内中野式土器は古い段階では、早期の影響を受けて尖底ないし丸底状を呈しているが、荒い縄文を施した平底の土器が普通のものである。また、全道的には土器の文様に変化があり道南地方では木や竹の棒を使って文様を施した半截竹管文尖底土器（春日町式）、道央地方では棒に切目をつけ、それをこがしたり押しこがして施文した押型文土器（神居式）道東地方では太い縄文をこがして丸底の器型に文様を施した綱文式土器（大曲式）などがある。



東京大学蔵
（昭和39年）
『日本原始美術I』
円筒上層B式土器

布範圍を占めているが、石狩低地帯を境に前に述べた土器文化へと変化しているのである。

当地方では高丘遺跡を中心に比較的標高の低い丘陵部の末端から数カ所の遺跡が発見されている。さらに貝塚遺跡として植苗貝塚が注目されている。また、静内中野式系土器を出す遺跡としては静川・柳館遺跡があり、竪穴住居址群を伴う集落遺跡がある。

今から五、〇〇〇年前になると気候は温暖になり海岸や大きな河川に面した南向きの丘陵上に大きな集落が形成されるようになる。縄文時代の住居としては洞窟、岩陰、竪穴、平地住居など知られているが、大集落を形成する前期や中期の住居形態はほとんどが平地に円型ないし方型に三〇〜五〇センチメートルの掘込み、中央に炉を設け周囲に四本の柱を立てた竪穴式住居が普通である。

さて、これらの住居址群を残した当時の人々はどんな容器を使って生活していたのであろうか。

縄文文化の中期と区分されるこの時代は、石狩・苦小牧低地帯を境に前時代同様、道南部には東北地方的色彩の強い円筒下層式土器の流れをくむ円筒上層式土器が濃く分布しているし、道央や道東地方には常呂郡常呂町朝日トコロ遺跡を標準遺跡とする北筒式土器が分布している。

円筒上層式土器は器形が大型の円筒形を呈する深鉢型土器がほとんどで胎土に砂礫を含み、少量の繊維を含んだものも少なくない。器形は口縁に四個の外反する弁状突起を持つものが圧倒的で、口頸部には粘土紐による隆起帯が貼

りめぐらされている。隆起帯や文様帯の間には撚糸文や馬蹄形を呈した圧痕文などが施されているほか胴下半部には地文として羽状縄文が多く施文されている。

円筒上層式土器は函館市サイベ沢遺跡を中心に岩内町東山遺跡、室蘭市ボンナイ遺跡など、標式的なものを見ることが出来るが、その分布は浜益町川下、名寄市智東、石狩町高丘遺跡や、新冠町氷川神社遺跡などにまで広がっている。一方、道東地方を中心に分布している北筒式土器は胎土に繊維を含み口径の半分程の底径を持つ筒形の土器で、口縁部がやや外反するものもあるが、その断面は三角形を呈する肥厚帯となっているのが普通である。口縁には円筒上層式土器の弁状突起の退化したような四個の山形突起が附され、地文としては斜行縄文あるいは結節のある羽状縄文が多く見られる。また、北筒式土器の大きな特徴として口縁部肥厚帯の直下に外側から内側に向かって施した太い突瘤文が多く見られる。

円筒上層式土器は函館市見晴町遺跡出土の土器群を持ってやがて姿を消し、次いで一般的に余市式土器とよばれ口縁部に平行する幅の広い貼付帯によって代表される土器群が、道南地方から道央地方に盛行し、円筒式土器文化の時代は終りを告げるのである。

苫小牧地方は、その地理的環境から円筒上層式、北筒式、余市式などを共伴する遺跡が多く、各々の遺跡から発見されている。なお、最近本州各地では、縄文時代中期に農耕が存在していた事を裏付けるようなパン状やクッキー状の炭化物が発見され、縄文農耕問題が云々されているが、道内からは今のところこれらを肯定するような資料は確認されていない事を付記しておく。

雄大な把手（弁状突起）や粘土ひもを貼りつけ、重量感にあふれ最も縄文式土器の名にふさわしい円筒式土器文化の時代が終り、縄文文化もそろそろ下降線をたどる今から四、〇〇〇年から三、〇〇〇年前の約一、〇〇〇年間を、縄文時代後

期と区分している。

この時代も前時代と同じように、東北地方の文化との対比によって研究がなされているが、北海道特有の文化内容も少なくない。

前、中期には海岸段丘や河川段丘上に大集落が形成され、大型の貯蔵、煮沸用の深鉢型土器を使用していた人々もこの時代になるとなぜか大集落址も発見されず、大型土器も姿を消してしまふのである。

そして比較的低い丘陵の末端部や平野部などにかけて遺跡が検出され、発見される土器も小型化し、器型も甕、深鉢、浅鉢、皿、壺、片口、注口（急須）徳利形などバラエティーに富んだもので、文様もヘラがき沈線文、すり消し手法という特殊な技術が使用されるようになる。さらに日常生活で使用する貯蔵や煮沸用の深鉢や浅鉢には口縁部の裏から竹箬様の棒で外側に突き、小さな大豆状の突瘤が等間隔に並ぶ突瘤文を施した粗製土器、さらに香炉型や注口など日常生活というよりも祭祀的色彩の強い精製土器などと区分されて製作されるようになる。

その事は遺跡の面においても明らかで、住居址等の遺構は発見されず、もっぱら積石や配石等を伴った墳墓遺跡が多く確認されている事実からも伺い知ることができるし、それらの墳墓から石棒、石剣、土偶、ヒスイや蛇紋岩による玉類、装身具類などや、ベニガラと呼ばれる赤色の顔料などが発見され、呪術的な支配関係の発生を物語っている。

縄文時代後期の土器群としては、道央、道南地方を中心にほぼ斉一性を持ち、上磯郡知内町涌元遺跡を標式とし、沈線文、磨消文を主体とする涌元式土器、通常二―三本の沈線文を単位に蛇行、渦巻文など奔放に施文する蛇田町入江遺跡や室蘭市鷺別遺跡で代表される東北地方の大湯式土器に類似するもの。口縁と平行にかかれた多数の沈線文とそれを区切る短い縦の沈線が雲形文様の沈線でかこまれた磨消文を特徴とし、地文の縄文が多い札文島船舶上層式土器、さらに胸部をめぐってひかれた平行沈線がしばしば縦の沈線によって切られることを特徴の一つとする札幌郡手

稲町手稲遺跡を標式とする手稲式土器。

次に精製、粗製を問わず、注口土器や三叉文、突瘤文などが多くなり夕張郡長沼町堂林遺跡を標準遺跡とする堂林式土器が盛行し、最後には、磨消縄文と三叉文、突瘤文との構成による静内御殿山式土器が全道的に分布するようになる。代表的な遺跡としては、静内郡静内町目名御殿山遺跡を標準遺跡としながら、それ以前に調査研究されている上磯郡上磯町茂辺地遺跡、斜里郡斜里町朱円栗沢遺跡などが有名で、朱円の墳墓群からは織物、土版、ドングリなどが多数の副葬用土器とともに発見されているし、茂辺地遺跡からは人物、人面をモチーフにした土器が発見されている。

しかし、苫小牧市内からは前述したごとく墳墓群を中心とする大遺跡は今のところ発見されておらず、各時期の遺物とともに断片的な資料が発見されているにすぎない。

また、装身具類としてはタブコブ遺跡から玉、大島遺跡からは垂飾の未成品、耳栓（耳飾）の破片が出土している。全道的に御殿山式土器が横行し、突瘤文土器が消失するころより、道南地方を中心に、新しく東北地方に発生した亀ヶ岡式土器文化が北上してくる。この亀ヶ岡式土器とその影響を受けた北海道独自の土器群が製作、使用された今から三〇〇〇年―二〇〇〇年前までの約二〇〇〇年間を縄文時代晩期といい、縄文式土器文化の最後の時代なのである。亀ヶ岡式土器とは、青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡遺跡を標準遺跡とするもので壺、甕、深鉢、浅鉢、注口（急須）、皿、台付、香炉など多種多様な器形のうえに、三叉文、雲形文、羊歯縄文など単なる磨消しの技法から肉彫状のものまであり、その見事な工芸品的遺物は縄文時代の最後にさいた華ともいわれ中期の円筒上層式土器と好一對をなすものとされている。

また、亀ヶ岡式土器は施文後、朱などのうるしが塗られ、非常に色彩の豊かなものも少なくない。青森県、岩手県を中心に開花した亀ヶ岡文化は、その後、関東地方の安行文化を乗り越え、中部、東海、北陸、近畿地方にまでも及

び、北にあつては北海道の道南地方から、道東釧路地方にまで伝播されるのである。しかし、道南における分布範囲は円筒文化同様、石狩・苫小牧低地帯を越えることは出来なかつたようである。

亀ヶ岡式土器は、山内清男博士によつて岩手県大船渡市大洞貝塚を層位学的に調査研究され、大洞貝塚の地点において新旧の相違があるとのことから、氏によつて大洞B、BC、C₁、C₂、A、Aと六型式に細分され、器形、文様等による差違があるため、全国的にその基準が使用活用されている。

さて、道内における縄文時代晩期の様相であるが、現在のところ、東北地方に見られる純粋な大洞B、BC式土器を出土する遺跡は知られていない。しかし、断片的な資料やその器形、文様などの影響を受けたと思われる土器群が松山郡上ノ国町竹内屋敷遺跡から発見され、寿都郡寿都町寿都遺跡や石狩低地帯以南の遺跡から多く検出されている。

この上ノ国式土器とよばれる土器群は、幅の太い沈線文、爪形文、刺突文を主体に、器形の上半部に施文されるものも多く、下半部（胴部）はほとんどが斜行縄文のみの場合が多い。



日の浜式土器〔早來町教育委員会蔵〕
(昭和47年)

道南地方で大洞C₁式、C₂式からA式にかけける時期は上磯郡上磯町久根別遺跡、函館市女名沢遺跡、上磯郡上磯町添山遺跡、札苺町札苺遺跡、亀田郡尻岸内町日の浜遺跡などの純粋な亀ヶ岡式系遺物を出土する遺跡群が存在するが、石狩低地帯から北では、遺跡から出土する晩期土器群のうち、亀ヶ岡式系土器よりも、従来は前北式土器と呼ばれていた撚糸押圧文を主体とするタンネットール式土器が多くなる。

タンネトーL式土器は長沼町幌内タンネトー遺跡や、苫小牧市植苗タフコフ遺跡などを標準遺跡とするもので、前述した上ノ国式土器に続き、爪型文が消失し、変わって二―三条の撚糸条線文や半截竹管による沈線文刺突文などを中心に、口縁部内壁に撚糸の押圧文（線状ないし渦巻状）を押すものである。また、器形も従来のものに加え、舟型や双胴など特殊なものがあらわれている。

これらのグループは全道的に分布しているようであるが、その中心は石狩低地帯にあり、道南の日の浜遺跡などにおいても日の浜式土器に伴って数点出土しているようである。また、道東地方には、日の浜式土器を伴出しながら、縄文と貝殻条痕文を地文とし、沈線文を施したもの、タンネトーL式とおなじく口縁部内壁に撚糸押圧文、縄文、沈線文などを施し、舟型や双口、双胴など特殊な器型を呈するヌサマイ式土器が分布している。

苫小牧地方では先にも述べたごとく、上ノ国式、日の浜式土器の分布範囲に当り、また、タンネトーL式の文化圏内にもあるため、他の時期の遺跡数に比べ比較的多くの遺跡数が分布している。

以上、北海道に人が移り住み、縄文式土器を使用し、狩猟、漁撈の生活を送ってきた縄文時代の概略について述べてきた。

しかし、その文化は八、〇〇〇年前―二、〇〇〇年前までの間、約六、〇〇〇年間に渡って連綿と続いた縄文文化も晩期の大洞A'式土器を持って終末を告げる。この間、石斧、石鏃、石槍、石錐、石小刀など縄文文化の基本的石器の組成は変わらず、生活の基盤は狩猟、漁撈の採集経済にあったのである。現在のところ、当地方からは大洞A'式の正確な資料は確認されていないし、縄文文化終末の様相も他地方と同様に定かでない。

しかし、タンネトーL式土器や日の浜式土器の使用が終了したところから、確実に弥生式土器文化の影響を受けていた続縄文時代恵山期の土器文化が、縄文文化の立地した丘陵地帯に再び営まれるのである。そして縄文時代晩期と同様

の生活を送りながら、北海道独自の新しい文化を形成し、発展させていくのである。

〈主要参考文献〉

鎌木義昌 『縄文文化の概観』 『日本の考古学Ⅱ』 昭和四十年 河出書房新社

古崎昌一 『縄文文化の発展と地域性 北海道』 『日本の考古学Ⅱ』 昭和四十年 河出書房新社

大場利夫 『縄文中期文化―北海道』 『新版考古学講座3』 昭和四十四年 雄山閣

名取武光 松下巨 『縄文後期文化―北海道』 『新版考古学講座3』 昭和四十四年 雄山閣

竹田輝雄 『縄文晚期文化―北海道』 『新版考古学講座3』 昭和四十四年 雄山閣

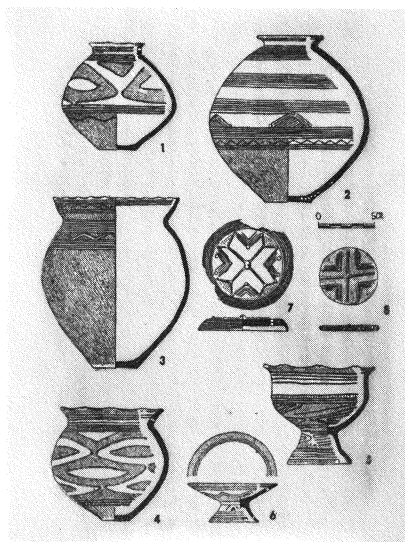
江坂輝弥 『縄文土器と貝塚―縄文時代』 『古代史発掘』 昭和四十八年 講談社

第四節 続縄文時代

長かった縄文時代も今から約二、〇〇〇年前後には全国的に終りを告げ、新しく大陸からの影響による稲作農耕と金属器を利器として使用する新しい文化が紀元前三〇〇〇年ころ、北九州の遠賀川流域に発生した。

この文化は縄文式土器とはちがい、赤褐色を呈し、文様や型が簡素になり、縄文式土器よりも製作方法が進歩し、高い温度で焼かれ鉢、壺、高杯など器形にとばしい弥生式土器と呼ばれるものと、前述した稲作農耕と金属器（青銅・鉄）、織物などに従事、製作使用した時代である。弥生式土器は、明治十七年（一八八四）東京大学に隣接した本郷向ヶ丘弥生町の貝塚から最初に発見され、縄文式土器とちがうことから、最初の出土地にちなみ以後、弥生式土器と呼ばれるようになったものである。

北九州の遠賀川流域に発生した弥生式文化は、その後、わずか数一〇〇年位の間に本州各地に広まり、各型式の弥



田舎館式土器実測図 東北北部の弥生式土器
伊東信雄より (昭和35年)

生式土器をはじめ、銅鉾と銅剣、銅鐸などの青銅製品と石包丁、蛤刃太型磨製石斧、片刃柱状磨製石斧をはじめ、鉄製工具によって加工された各種の木製品などを伴って沖積平野を中心に奈良県・唐古、静岡県・山木、登呂などの遺跡を残し、北上して行った。

紀元後二〇〇年位には、この弥生式文化はすでに東北地方にも到達し、仙台平野を中心に稲作農耕が行われ、三〇〇年ころには、青森県にも到達し、田舎館遺跡などが栄えていたのである。しかし短期間で日本列島を稲作中心の農耕文化にしてしまった弥生式文化も津軽海峡を越え、北海道にまで到達することはできなかったのである。

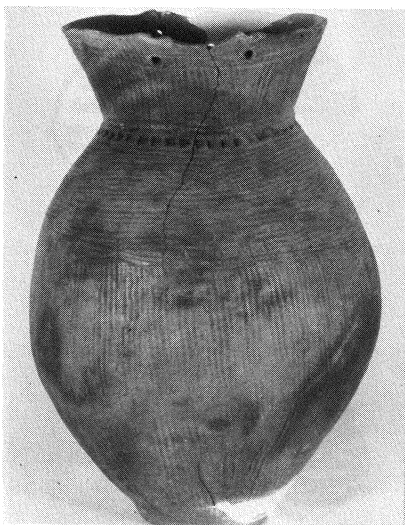
それは北海道の位置する地理的、気象的条件等によるものであるが、北海道における水田耕作の開始が明治時代以降であることがその事実を如実に物語っている。そのため北海道には狩猟、漁撈を中心とする縄文文化が比較적으로残っており、そこへ弥生式文化の土器製作の技術、金属器、石器などが伝播し、その影響を受けた縄文文化の伝統

の強い特有の文化「続縄文式文化」が発生したのである。

この文化期に属する土器にはじめて注目したのは山内清男博士であった。

博士は昭和八年、縄文文化の伝統をもつ土器として室蘭市本輪西貝塚上層の土器と青森県田舎館遺跡の土器をあげ、昭和十四年に、これらの土器群に対し、縄文文化の伝統はあるが本州の弥生式土器に対する北海道の土器として「続縄文式」という名称を与え、縄文式と区別したのである。

その後、続縄文式土器の研究は名取武光助教授、千代肇



恵山式土器〔白老町教育委員会蔵〕
アヨロ遺跡出土（昭和47年）

学芸員などによって道南地方の恵山貝塚、尾白内貝塚などの発掘調査によって推し進められたし、道央、道東地方に広く分布する後期北海道式薄手土器として後北式土器が河野広道博士などによって調査研究されるようになり、今日にいたっているのである。

続縄文時代は、現在大まかに三期に細分されている。

前期は道南地方に中心があり、主として海岸線近くに遺跡が立地し、亀田郡尻岸内町恵山貝塚を標式遺跡とする恵山期、中期は内陸部に広く分布し、たくさん土壙墓を伴う江別市坊主山遺跡を標準遺跡とする江別期、そして後期は、構内遺跡を標式遺跡とする北大期である。

恵山期の内容としては、遺跡は海岸線近くの丘陵部や平野部などに、小貝塚や少量の積石を伴う墳墓群などを伴って立地し、縄縄文とよばれる束状の縄文と三角、山形、波形、平行沈線文、刻目文を主体に施文した鉢、甕、壺、台付鉢型土器など弥生式土器の影響を受けた容器を中心に魚型石器、靴型石器（基部のついたナイフ）片刃柱状磨製石斧などの石器類、あきらかに金属器で加工されたと思われる銚、ヤス、縫針、スプーン状などの骨魚器をはじめ、弥生文化からの渡来品である太型菅玉などの装身具類が発見されることがある。

苫小牧地方では、この期の遺跡として白老町アヨロ遺跡が有名であるほか、市内からも緑ヶ丘A遺跡をはじめ、タブコブ、金森、植村、ニナルカ遺跡などから多数の遺物が発見出土している。

江別期は、昭和初年ころ、河野広道博士により、後北式土器北見型、江別型と大別され、さらに時間的に古い方からA、B、C、D、E式と五型式に細分されていた土器文化である。遺跡の分布は先にのべた通りであるが、現在までのところ、墳墓遺跡がほとんどで、住居址、貝塚などの遺構は非常に少ない。

しかし特殊な遺跡としては、小樽市手宮洞窟や余市町フゴツペ洞窟遺跡などがあり、古代文字状の彫刻が発見されて今日まで学界の注目するところであつたが、最近のフゴツペ洞窟遺跡の調査の結果によれば、「これらの遺跡は祭祀的色彩の強いもので、古代文字状の壁画も、これらの関連において描かれたものと思われる」と報告している。

河野博士の細分によれば、各型式の後北式土器にはそれぞれの特徴があり、前半は甕、深鉢が多く、片口も存在する。文様は粘土の細い紐を貼り付けた微隆起線文と刻目文があり、胴部下半には恵山式土器同様の縞縄文が施されている。後半では、隆起線文が、前半の直線的であつたものが、メガネ状や網目状となり、アイヌ文様の起源を思わせるような構成となる。

しかし終末期には微隆起線文が消え、縞縄文、無文、刺突文などのみが施文され、器形も、壺、吊耳のついた鉢型土器などになつてしまう。

また墳墓群に副葬される土器の中には、二次的に赤色や白色の化粧土を塗つたものの、底部に穿孔のあるものなどがあるほか、靴型石器、磨製石斧、二等辺三角鏃、管玉、ガラス玉などが伴っている。

市内から発見されている江別期の代表的遺跡としては平田、植村遺跡などがあげられるほか、タブコブ、緑ヶ丘A遺跡などから恵山式土器などともに断片的に発見されている。

なお最近では後北A、B、C式などという名称を江別Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ式として使用している研究者が多いようである。

後期の北大期も、河野広道博士によつて後北式土器の終末土器を北大式土器と命名されたことによつてその名がある。



東北に南下した
後北CⅡ式土器の分布
『奥羽史談』55号より

分布は先にも述べたとおりであるが、器形は深鉢形が多く、器面には斜行ないし斜位押捺縄文が多く施文されている。北大式土器の特徴的な文様としては口縁部外側から細い刺突具によつて列点状に施した突瘤文を施した土器である。また口縁部を中心に縦に巾五ミリ程で微隆起線文を施しているものも少なくない。

この土器は東北地方の土師器の影響を受け、次期の擦文式土器の母体となるものであるが、終末期のものは、たびたび土師器と共に発見される場合もあるし、古式の擦文式土器とを比較した場合、その区別ははなはだ困難である。

この期の遺構としては隅丸方形の竪穴住居址が一般的であるが、楕円形を呈する土壙墓も知られている。また道具類としては、すでに石器の使用は少なくなり、代わつて本州から移入された鎌、斧、刀子などの鉄製品が多くなってくる。

当地方では、千歳市のウサクマイB遺跡などから多く出土しているようであるが、市内からはタブコフ、植村、平田、糸井B遺跡などから断片的に発見確認されている。

以上続縄文時代の概略を述べたが、弥生式文化の影響を受け、北海道で発生し、独自の発展をとげたこれらの土器文化は、恵山式土器では東北地方青森県の南部まで、江別式土器では宮城県仙台台平野まで、北大式土器であれば再び東北地方北部までも分布伝播している。これらの事実は、当時の北方文化の歴史の上で弥生から古墳へと、また部落国家から中央集権国家へ、さらに大和朝廷による東北（蝦夷）経営の問題など、大きな課題が山積し、興味あるところである。

〈主要参考文献〉

山内清男 『日本遠古の文化』 「ドルメン」昭和八年

千代 肇 『弥生式文化の北方伝播とそれをめぐる課題』 「考古学研究ノート」昭和三十七年 考古学研究会

大場利夫 千代 肇 『周辺地域の情勢―北海道』 「日本の考古学Ⅲ」昭和四十一年 河出書房新社

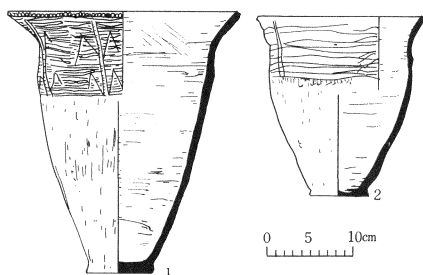
佐藤一夫 『恵山文化』 「考古学手帳18」昭和三十八年

第五節 擦文時代

紀元前三世紀の終りころ、部落国家を形成した弥生時代も終り、やがて国家権力によって巨大な高塚古墳である仁徳陵や応神陵などの前方後円墳が全国各地に構築される古墳時代を経て歴史時代に入る。文献上では「日本書記」斉明記に見られる阿倍比羅夫のエゾ征伐や、アイヌが記録にあらわれ文献資料に具体的に登場してくるまでの時代で、依然として粘土で作った容器を使用していた時代を、その容器に施された施文方法から、北海道独自の年代区分として擦文式土器文化、擦文時代と呼称している。

擦文式土器とは、擦文ということ自体、土師器の体部に施された刷毛目調整痕を指すとおり、土器の施文方法に由来しているが、擦文のみならず、刻線文を有する刻目文土器、無文のものなどを総称して擦文式土器と呼んでいる。

その成立については紀元前七世紀ころ強力な権力を持った大和朝廷の北進とともに、本州の北部で使用されていた土師器と同じものが函館市湯ノ川、千歳市ウサクマイ、由仁町由良などの遺跡にコロニイ型で存在し、これらの土師器と続縄文時代末期の北大式土器と接触し、前述した刻文、無文や擦痕文で特色づけられる「擦文式土器」が発生し



1. 千歳市千歳神社裏 2. 古宇郡神恵内村観内洞窟

初期の刻文土器 (昭和47年)
『北海道における末期古墳の問題点』

たと一般的に考えられる。

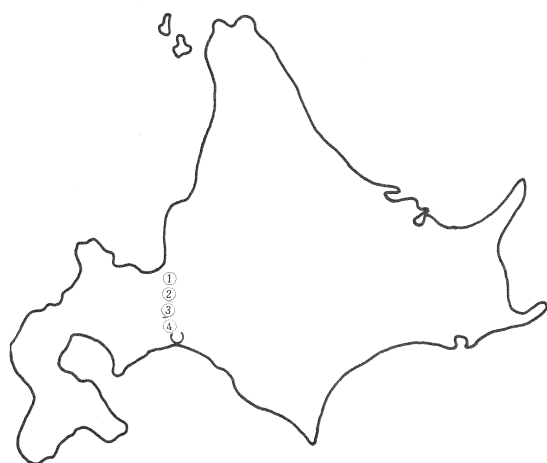
擦文文化にはいくつかの特色があげられている。

その第一は、東北地方の古墳文化の関連である。北海道には本州各地に存在するような高塚の古墳はないが、それに類似し、東北地方の終末古墳に非常に似た「北海道式古墳」というものが存在し、昭和初年ころより後藤寿一、河野広道博士などによって注目され、最近では、石付喜三男助教授などによって研究されている。

北海道式古墳とは明らかに東北地方の古墳の影響を受けたもので高さ三〇〜八〇センチメートル、直径三〜六メートルの楕円ないし円形の墳丘を持ち、周囲には巾六〇〜一〇〇センチメートル、深さ一〇〜三〇センチメートルの周溝が存在し、地平線下の内部は長さ一・五〜二・五メートル、巾五〇〜八〇センチメートルの長方形の墓壇を持つ墳墓である。これらは、江別市町村農場、同じく江別兵村、恵庭町茂漁など、石狩低地帯に集中的に分布している。

墓壇内の副葬品としては土師器、毛抜型太刀、直刀、蕨手刀、刀子、袋柄鉄斧、鉄鎌、環状装身具、勾玉や管玉など東北地方北部に見られる古墳群と同じなのである。この北海道式古墳については、平田遺跡や植村遺跡を調査された河野広道博士が両遺跡の遺物より苫小牧地方にも必ず存在すると、その著『苫小牧地方古代史』において述べられている。

第二に擦文式土器を伴う竪穴住居址である。従来までの縄文、続縄文時代の竪穴住居址であれば、隅丸方形ないし



第5図 古墳様墳墓 墓所在地 (○印)

- ① 江別町阿村農場
- ② 江別町字兵村
- ③ 恵庭村字茂漁
- ④ 千歳町字長都
- ⑤ 苫小牧市字植苗

北海道式古墳分布図 (昭和36年)

『苫小牧地方古代史』

方型プランで、中央部に炉があり、四本の主柱を中心に附属の柱穴が発見されるのが普通であったが、この時代から炉が消失し、変って粘土で作った煙道やカマドなどをもつ竪穴住居へと変化する。また、この時代の竪穴住居址には火災にあったと思われるものが多く、次のアイヌ時代との関連を考慮させる資料も存在するものと思われるのである。

第三は織物の存在で機織技術のあったことである。擦文時代の竪穴住居址内から粘土で作った紡錘車とよばれる糸つむぎ車が多数発見されるし、実際に平織の布が天塩豊富遺跡において採集されているのである。

第四は穀類栽培技術の開始である。すでに縄文時代末から石器の使用量は減少し、擦文時代には、ほとんど見ることが出来ないまでになってしまう。これはすでに石器に変わり大量の鉄製品が普及していたことを物語るもので、恵庭市柏木川遺跡で発見された擦文式土器を伴う土壙墓では鉄製の鍬と鎌、刀子などが発見されているほか斧、手斧、刀、鏃などがあつた。また、一部では原始的な製鉄が行われていたらしくタブコブ遺跡などでは土製のふいご口なども発見されている。

さらに実物としては前記の天塩豊富遺跡ではアワ、ソバ、緑豆などの栽培植物の炭化物が多量に発見されているほか、十勝・根室地方の擦文時代竪穴住居から

モロコシ、ヒエなどが発見されている。

以上、擦文時代の概略について述べたが、その終末は何時ごろであるか、今のところ一定していない。考古学的根拠としては奥尻島青苗貝塚出土の擦文式土器の終末期のものと、内耳土鍋が出土していることから、和人の渡来が多くなり、内耳鉄鍋の盛行する時期、中世粗陶や磁器の多くなる鎌倉時代末ないし室町時代ころと推定されているのである。

苫小牧市内からは擦文時代の大きな遺跡は発見されておらずタブコブ、植村、大曲、北炭山林、大島、植苗橋下、斉藤、大槻、高丘、糸井Ⅱ、明野、泉の沢遺跡などから本時代の資料が断片的に発見されている。

また、当市内からは発見されていないが、オホーツク海を中心に道東地方から太平洋沿岸地帯ではエリモ岬付近まで、道北日本海沿岸では天売、焼尻島付近まで分布する海洋性のオホーツク文化がある。大陸の文化を吸収したオホーツク文化は海獣狩猟と漁撈を中心に生活をしており擦文時代に本道に定住し、モヨロ貝塚などを形成するとともに擦文文化人ともかなり密接な交流があったようである。

〈主要参考文献〉

桜井清彦 『古墳文化の地域的特色12―北海道―』 「日本の考古学Ⅳ」昭和四十一年 河出書房新社

石附喜三男 『北海道の原史文化』 「新版考古学講座」昭和四十五年 雄山閣

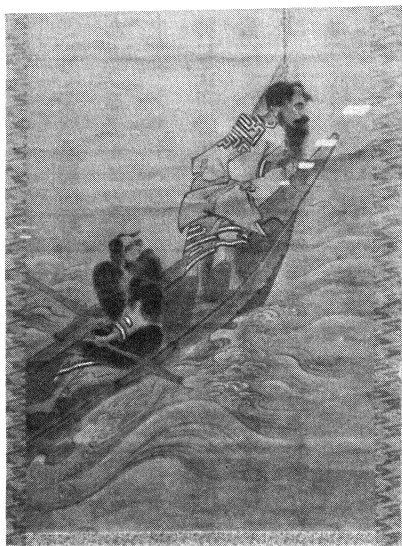
『擦文式土器の初現的形態に関する研究』 「札幌大学紀要」昭和四十三年 札幌大学教養部

第六節 アイヌ時代

北海道を中心に南樺太（サハリン）千島列島（クルリ）などに分布していたアイヌが、人類学的にまた民族学的に何時ごろ形成されたかは今のところ決定的な意見はない。

アイヌとは彼等自身の言葉で人間という意味であるが、アイヌに対する研究は、日本人が蝦夷地に移住するとともにその特異な風俗、習慣、容貌などから開始されている。しかしその研究のはじめは、日本書記に登場する阿倍比羅夫のエゾ征伐のエゾをアイヌか、どうかということを別にしても、今から六〇〇年前十四世紀の中ごろに書かれた「諏訪大明神縁起絵詞」では、アイヌには三派があり、そのうち二派は外国に連なり言葉も通じないが、道南地方にいた一派は言葉も通じるし、形は夜叉の如く、禽獣魚肉を食とし、五穀を知らずなど、その容姿、戦闘の様子、妖術、毒矢のことなどが記録されている。これが現在知られているアイヌに関する最古の記録であり、この内容に通じるものとして茨城県那珂町上宮寺に伝わる鎌倉時代末の作といわれる「聖徳太子絵伝」には「諏訪大明神縁起絵詞」に表現されたようなアイヌが絵として残されている。その後、康正二年（一四五七）コシャマインの乱や、寛文四年（一六六九）シヤクシヤインの乱などを契機に、日本人が蝦夷地に対する関心が高まるとともに、その記録の量は多くなる。特に江戸時代になると北辺防備の上から徳川幕府は松前藩から蝦夷地をとりあげ直轄地としてしまう。そのような政策にそってたくさん日本人が蝦夷地を訪れ、その記録が今日貴重な研究史料となつて残されているのである。それらは、大内余庵の『東蝦夷夜話』や村上島之允の「蝦夷嶋奇観」や松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調紀行」など一連の資料がそれである。

さらに明治時代に入ると日本人種起源論との関心からアイヌの研究は大いに進むのである。特にモース、ミルン、



アイヌ人漁撈の図（昭和49年）
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

ブラキストン、シーボルト、バチエラーなどの外国人や坪井正五郎、小金井良精両博士によってコロボックル説やアイヌ説などが、中央の学者によって行われるとともに、関場不二彦や河野常吉など道内の学者によっても研究されるのである。さらに第二次大戦以降最近までは、人類学的研究ばかりでなく、言語学、民族学、考古学などの各分野から行われ、その起源と文化の問題に研究者は意欲を燃やしているのである。次にその起源の問題であるが、アイヌの物質文化の面から追求するならば、当然前時代の擦文文化につながるし、さら

にアイヌ文様などから続縄文時代へとさかのぼることができる。

また、最近の人類学の研究成果では、従来の①コーカソイド説〔白色人種系、ヨーロッパ系〕（北海道大学、児玉作左衛門博士）②オーストライド説〔オーストラリア原住民など南方系〕（ソ連、アルチーフ）③モンゴロイド説〔黄色人種、アジア系〕（主要な日本人学者など）に分かれていたが、一〇年位の研究ではモンゴロイド説が有力であるし、金田一京助、服部四郎博士などによって言語学上からも研を進められ、アイヌ語はウラルアルタイ語の仲間に入るものであるとしている。

苫小牧地方に和人が住む以前にアイヌ人が住んでいたことは、市内各所に残されているアイヌ語地名やタブコブ、植村遺跡などから発見されるアイヌ墳墓の存在からも伺い知ることができるのである。

それでは何時から当地方にアイヌ人が定住するようになったのであろうか。先にも述べたように擦文時代の終り二

ろより石器や土器を使用せず鉄器を利器とし、漆器などの木製品や和人からの物資を使用し、原始的な農耕を行いながらもその本質はあくまでも狩猟、漁労を中心とする採集経済のアイヌ文化は、今から八〇〇年位前、平安時代末から鎌倉初期ころに開始されたものと思われる。

苫小牧地方でも昭和二十九年発見された植村遺跡のアイヌ墳墓では太刀、小刀、骨鉋などの副葬品とともに二枚の渡来銭が含まれており、一枚は北栄の嘉祐通宝（一〇五六―一二〇六三）、一枚は明の洪武通宝（一二三六八）で、このことから貨幣の流通、伝世などを考えても、植村遺跡のアイヌ墳墓が形成されたのは、今から約六〇〇年前、室町幕府の成立したころと思われる。さらに四十二年、沼ノ端の勇弘川出土のアイヌ丸木舟を¹⁴C年代測定をしたところ、今から七七〇年前という数値が得られている。

このように鎌倉時代ないし、室町時代ころに成立したアイヌ文化は、原始的な農耕と狩猟、漁撈を中心とする経済基盤の中で、部落（コタン）を単位として生活していた。しかし、その後の日本人の増加に伴い、特に松前藩による場所制度は蝦夷地全域を居住区としていたアイヌに、自分たちの生活圏が脅かされるものとなり、その結果が先のコシマインの乱やシャクシャインの乱となってあらわれたのである。

しかし、その結果アイヌ人は優勢な日本人に圧倒され、彼等の生活は日本人の支配下のもと、屈辱的な虐げられた生活へとなっていくのである。その間、徳川幕府による撫育策や明治新政府による旧土人保護法などのアイヌ人に対する保護策は講じられるが何ら効果はなく、日本人の中へ、混血として溶けこんでしまうのである。

苫小牧市内からはアイヌ時代の遺跡としてタブコフ、植村、大槻、緑ヶ丘A、高丘C、沼ノ端アイヌ丸木舟出土地点、柏原アイヌ丸木舟出土地点、さらに錦岡、矢代町などの旧墓地からアイヌ関係の資料が発見されている。

〈主要参考文献〉

苫小牧市史 上巻

『アイヌ民族誌』昭和四十四年 アイヌ文化保存対策協議会編 第一法規

桜井清彦 『アイヌ秘史』昭和四十二年 角川書店

植原和郎他 『シンポジウム アイヌ—その起源と文化形式』昭和四十七年 北海道大学図書刊行会

第二章 遺跡及び遺物

第一節 研究のあゆみ

苫小牧地方における考古学的調査研究活動の歴史は他の地方に比べ新しいものと思われる。比較的活動の活発であった室蘭と日高の中間にありながら、樽前火山の火山灰と勇払原野という不毛の湿地帯がほとんどを占める地理的環境と、そのためから起る研究者の不足が大きな原因になったと思われる。

しかしながら、当地方に先史時代の遺跡や調査研究活動がまっただなかつたわけではない。

我国に西洋式の考古学調査法がモースによって伝えられた大森貝塚の発掘調査以来、関東地方を中心に研究の波は広がっていったが、それは明治十一年のモースやミルンの来道や、二十一年の坪井正五郎博士、小金井良精博士など、当時学界をリードする諸先学の北海道に対する関心の深さに他ならなかつたのである。

大正時代に入り、日本考古学の方角も明治時代の人種論から次第に縄文式土器そのものへの研究へと変わりつつあった。道内においても河野常吉による『北海道志』の編さん、史跡名勝記念物調査報告などが出版され、道内研究者による研究も徐々に進みつつあった。また、昭和六年には『先史の日本』を表したN・G・マンロー博士が平取に永住するとともに喜田貞吉博士が白老を訪問しているのである。

昭和八年には雑誌『ドルメン』が北海特集号を出し、その五年後には『人類学先史学講座』が出版されるとともに

北海道においても、昭和十四年から北海道大学の『北方文化研究報告』が刊行され、児玉作左エ門博士、大場利夫博士、名取武光助教授等を中心に地方研究者とともに組織的な発掘調査が行われるようになり、今日の成果を見るに至ったのである。

このような中央や道内学界の流れの中で、苫小牧はどのようなようであったであろうか、ここではほとんどの学史がそうであるように、各時代の流れを大きく、四つの時期に分けて述べて見る。

現在筆者の知る限りでは苫小牧東尋常高等小学校郷土部の手による大正七ころからの一連の資料『郷土研究叢書』が当地方の考古資料を扱った文献としては最も古いものと思われる。それらは、当時の郷土研究部の中心メンバーであった酒井仁之進によるものと考えられる『苫小牧郷土誌』『考古序論』『土俗考』であり、『美々貝塚の調査』などである。

『苫小牧郷土誌』では、市内に存在する史跡、天然記念物等について述べているが、考古学的遺跡については記述がなく、次の『考古序論』をまたなければならぬ。

『考古序論』は大正末年から昭和初年ころの学説を理解し故河野広道博士、名取武光北大助教授など当時道内では新進気鋭の研究者を訪れ、考古学の基本的資料である土器、石器の用途解説について指導助言を受け、考古資料を如何に教育の場におろすかという事を真剣に検討している。そのため、すでに知られているタブコブ、御前水、美々坂遺跡など、植苗、美沢方面の丘陵部から出土する土器、石器について詳細に述べているとともに、『土俗考』として主要遺物の図版集も製作したり、実際に美々貝塚などの現地を訪れ、その調査結果を『美々貝塚の調査』としてまとめている。その内容はただ単に遺跡を発掘調査し、その出土遺物を報告するばかりではなく、現在さげばれている埋蔵文化財の保護の問題にも触れていることである。

これら酒井仁之進訓導を中心とする苦小牧東尋常高等小学校郷土部の研究成果は、昭和十五年皇紀二千六百年記念として出版された『苦小牧町史』に当時、同学校校長であり、町史編さんの責任者であった田中正太郎とのコンビで、町史前節を飾る「先史時代」として今日に残されているのである。

町史は、第一章地質時代、第二章縄紋土器民族、一、時代史の地質学的考古学的概観、二、縄紋土器民族、三、土器、石器の考古学的考察と二章三節よりなり、当時の学界の風潮をとり入れるとともに、苦小牧地方の遺跡についても若干の見解を与えている。しかし、本論は当時の学説を概説することに終始し、当地方の先史時代を具体的に解明するまでに至っていないかった。その後の昭和二十三年、酒井によつて書かれ、未発表のままにおわった『苦小牧の先史時代文化』においても同じ結果であった。

以上、ここまでの大正から昭和二十年、苦小牧東尋常高等小学校郷土部の活動を中心とする時期を、第一期の「萌芽期」としてとらえたい。

しかし『考古序論』や『美々貝塚の調査』以前にも考古学的記述はあるのである。すなわち慶応三年、松浦武四郎による『東蝦夷日誌』がそれである。武四郎はこの中で、覚生の地名を考察し、覚生とはアイヌ語の槍、オプに由来するもので、かつてこの覚生川の中より槍が出土したとし、彼の考古学に対する造詣（ぞうぎ）の深さを示している。この記載が当地方に関する限り、一番古い考古関係の文献と思われるわけである。

昭和二十年、敗戦とともに我国の歴史観が大きく変わり、考古学という学問も再び世人の注目するところとなった。それは二十一年から始まった網走モロコ貝塚や静岡県登呂、函館サイベ沢遺跡など終戦後の初期における一連の大発掘の時期である。

また、この期には、従来まで存在しなかったであろうとされていた縄文文化以前の文化が、北関東地方の一角、群馬県岩



河野広道博士による発掘風景—タフコフ遺跡
(昭和28年)〔市立苫小牧図書館蔵〕

宿遺跡から相沢忠洋によつて発見されたことである。さらに二十八年には文化財保護法が施行され考古資料に対する法的根拠が与えられ、埋蔵文化財として規制されるようになったのである。旧石器の発見は岩宿以来全国にその波は広まり、北海道においても、エリモ岬からマンモスの臼歯が発見され、樽岸遺跡が発見されるに及び一時期を画すのである。

苫小牧地方においても、この時期の後半から、専門家による学術的な調査研究がなされるようになるのである。

すなわち昭和二十八年十月、美沢、平田遺跡が発見され、その調査担当者として当時北海道学芸大学教授であつた故河野広道博士が市教委によつて招かれ、調査を実施したのである。その結果は昭和三十年三月『苫小牧地方古代史』として刊行され、さらに博士が来苫し、講演した内容が『北海道先住民民族資料展覧会記録』に記載されるのである。これらの中で博士は植村遺跡の縄文式土器の出土地点、平田遺跡の後北式土器などの出土状態と曲リマキリを取りあげ、縄文式土器の出土の地点については、アイヌの物送り場の色彩が強く、後北式や金属器などの出土などは、それ以前に石狩江別や道央中央部で発見調査されていた北海道式古墳と関係があり、さらには、日本書紀にあらわれる胆振鉏との関連を結びつけていた。特に美沢、植苗地区からは、わらび手刀を伴う北海道式古墳発見の可能性を強く論じられている。さらにこのころになると大島、坊主山、植苗中学校裏遺跡の発見などと遺跡発見の機会も多くなり、それに伴つて研究発表の数も多くなってきた。また、苫小牧市においても、文化財保護条例が施行され、他市に先がけて埋蔵文化財にも調査研究と保護の手が差しのべられるので

あるし、遺跡発見の陰には植苗中学校教諭であった多田犬一の尽力が大なることであることを忘れることができない。

ここまでの昭和二十一年から三十年までを第二期、苫小牧における研究のあゆみの形成期として理解したいと思う。

なお、三十年三月には第一回目として小野慶郎前苫小牧市立図書館長によって発表されている『苫小牧市文化財調査資料』などがあり、それまでの市内各所から発見出土した土器や石器の写真や目録がのせられている。

昭和も三十年代に入ると道内外の考古学調査は多彩を極め、各地で貴重な発掘や発見が行われた。苫小牧地方では三十一年、隣町厚真町において「厚真村古代史」が村と同村の郷土研究会によって出版されるほか、三十二年に角野、大曲、大槻遺跡などが多田犬一によって発見され、三十三年には市立図書館より郷土資料目録の第三集が刊行されている。三十四年になると北海道学芸大学地学教室を卒業した金森定敏教諭によって『苫小牧平野の私たち』が発表され、当地方の地史が平易に解説された。三十五年になると地元研究者の集まりである苫小牧郷土文化研究会が設立され、市立図書館内に附属郷土博物館が設置された。

遺跡の発見としては植苗橋下、中野、柳館遺跡などがあげられるが、この期の注目すべき点としては、河野広道博士によって植村遺跡が調査されたこと、当時、静内高校郷土史研究部顧問であった藤本英夫教諭によって柳館遺跡の一部が発掘調査されたことである。それらの成果は、市教委より、また、苫小牧郷土文化研究会の機関誌である『郷土の研究』などに発表されている。

さらに三十八年十月からはタフコブ遺跡の発掘調査が北海道大学、大場利夫博士によって四次にわたって行われていることである。第一次のタフコブ遺跡の調査には当時門別町富川中学校に勤務していた扇谷昌康教諭も参加協力している。その調査報告書は概要として市教委よりガリ版ないしタイプ印刷として刊行されているし、大場博士により『日本考古学年報』誌上に発表されている。

昭和三十年代における苦小牧地方の考古学活動の最大の成果は市教委による行政的な発掘調査もさることながら、在野研究者の増大と発表の成果である。従来までであれば考古学研究者でないにしろ大学の教授、学校の先生などがほとんどであったが、この時期より苦小牧工業高校郷土研究部員による調査研究や遺跡の踏査である。主なものをあげれば『苦小牧付近の遺跡』田中政義「先史文化2」『苦工高にある土器について』稲葉勝男「郷土の科学30」『苦小牧地方に分布する遺跡』小田憲作「チャシコツ8」などである。また、柳館、タブコブ遺跡などの発掘調査などに参加しその発掘記や回想なども多い。

さらに三十五年に創立した郷土文化研究会も、考古部会（部長、多田犬一）を中心に各遺跡の発掘調査に参加するほか、機関誌上にその成果を発表している。また、当時苦小牧西高校に在職中であつた畑宮清一郎教諭は、郷土史ばかりではなく考古学に積極的で、自ら『北海道考古学研究の手引』を作り、夜間部生徒の教材に遺物、遺跡をとり入れているほか、郷土史研究部員を引率し、遺跡の踏査につとめている。同教諭のその集約は四十年、月刊「とまこまい」誌上に発表された『苦小牧史』である。

以上が三十年代の主な活動、実績内容であるが、この時代は、当地方考古学の確立期と思われる。すなわち、前半は河野広道博士による調査研究の時期であり、三十八年七月、博士の逝去後は大場利夫博士を中心とする研究活動の時期で、それに伴い地域住民、若い高校生などによって支えられていたことである。特に苦小郷研部員の遺跡発見の成果は白老、虎枝浜遺跡や千歳、ウサクマイ遺跡の発掘調査となり、学界に一大センセーションを巻き起こすのである。昭和四十年代に入り、その最初を飾るものは何といつても沼ノ端アイヌ丸木舟の発掘である。四十一年、筆者は市立苦小牧図書館付属郷土博物室に学芸員として奉職する機会を得て五月着任した。

七月になり、以前より沼ノ端の勇弘川河岸に埋没するアイヌ丸木舟発掘計画が、大場利夫博士の指導のもと実施さ



苦小牧関係の古文書 文献類〔市立苦小牧図書館蔵〕

れることになった。その結果、当初予想もしていなかった五隻のアイヌ丸木舟と推進具類が発見され、道内外の研究者に多大の感動を与えたのである。また、同年八月には、同じく大場博士指導のもと市立清水小学校前に位置する緑ヶ丘遺跡を発掘調査し、続縄文期の墳墓群及び恵山式土器の良好な資料を得ることができた。

また、市教委では、この四十一年より市内各所に散在する遺跡を毎年一カ所ずつ発掘調査すべく年次計画を樹て実施しようとしたのである。

それは四十二年大島、四十三年高丘、四十四年植村、四十五年柳館遺跡として筆者と四十三年、緑小教諭として日高より来苦した扇谷昌康教諭を中心に郷土文化研究会員、苦小牧工業高校郷土研究部をはじめとする市内高校郷土研究部員の参加協力によって行われた。

その結果、大島遺跡では縄文早期、絡条体圧痕文を主体とする土器グループと、それに伴う石器群、高丘遺跡では縄文前期、円筒下層式土器と後期終末の土器文化、植村遺跡では中期円筒上層及び晩期タンネットーリ式文化期の墳墓群や、アイヌ期の住居址をはじめ鉄製品、アイヌ玉、寛永通宝などを発見、以前同遺跡より発見されているアイヌ墳墓の実体から、当地方のアイヌ文化の発生期と終末の様相がある程度把握できたのである。さらに柳館遺跡では、静内中野式尖底土器を、当地としては初めての尖底土器の発見となったばかりでなく、石器製作地点、縄文前期、中野式ないし円筒下層式の時期と思われる住居址の一部を発掘調査した。

その成果は各々の単行概要報告書として、市教委より刊行されているばかりではなく、『北海道の文化』『郷土の研究』『日本考古学協会年報』等に詳細に報告されている。また、市内高校生による調査研究も活発であり、市内、周辺町村へのパトロールをはじめ、苦小牧工業高校の『チャシコツ』苦小牧西高校の『サルンクル』などの部誌を通じて個々の調査、研究の成果を発表している。特に苦小牧工業高校の糸井、ウトナイ地区の成果、苦小牧西高校のアイヌ墓地や神社の研究は高く評価され、全道高文連大会におけるコンクールにおいても入賞しているようである。

四十四年より、具体化した苦小牧東部工業地帯の建設計画は、埋蔵文化財の面にも大きな影響を与えずにはおかなかった。

現在の港湾建設は海浜部を中心に置かれたため直接の影響はなく、わずかに港湾浚渫中に、中央水路部の海底より御殿山式土器が一点発見されたのみであったが、東部地区は、柏原、静川の両丘陵地帯に工場群を予定しているためいやおうなしにその対策がクローズアップされた。また、四十四年には広尾郡忠類村よりナウマン象の臼歯が発見され、翌年の本調査では世界に例のないナウマン象の全身骨格が発見されてセンセーションを巻き起こした。

そのため四十六年度より東部地区の遺跡を中心にその実態調査に乗り出し、新しく五カ年計画を設定し、綱木遺跡の発掘を実施したのである。その結果、縄文時代晩期の墳墓群が確認され亀ヶ岡式土器やタンネット―L式土器などの好資料を収集することができた。

四十七年に入ると、五月に植苗、緑星の里、永光学園内の敷地から苦小牧市としては初めての本格的な貝塚遺跡が発見され、緊急調査として実施された。

その結果、ヤマトシジミ、アサリを主体とする貝塚から一九種の貝類、石小刀、石鏃、石臼、石冠などの石器、新型式と思われる土器群、イヌ、シカ、キツネ、トド、オットセイなどの陸、海獣類の骨、鳥、魚などの骨などとともに

刺器、銚先、針などの骨角器類など多量の資料が得られ、当地方の先史時代研究に大きな成果をもたらしたのである。また、同年八月に、柳館遺跡の一部に残されていた小貝塚も調査され、ある程度の成果を収めることができた。

このように綱木、柳館遺跡貝塚部分の調査、東部地区の実態調査も四十七年四月に設立された苫小牧自然保護協会考古部会（部長、扇谷昌康）の手によって、十月、弁天地区から厚真町境界付近まで、掘削機による遺跡の分布調査が実施され、それをもとに四十八年八月から国、道、第三セクターの苫小牧東部開発株式会社の出資による苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査の開始となつて三カ年計画で実施する運びになり、今日に至っているのである。

しかし今日の苫小牧市内、現苫小牧港の整備に伴い、人口は増加し、市街地は膨張し、埋蔵文化財包含地のある丘陵部はどんどん宅地として造成されつつあるし、千歳空港の拡張、北海道高速道路の千歳―苫小牧間の着工、北海道新幹線、都市計画に伴う道路工事と苫小牧東部工業地帯以外でも、遺跡、遺物すなわち埋蔵文化財を脅かす問題が山積している。

これらの問題をいかに解決し、保護し、保存するかということが、次の五十年代に課せられた大きな課題ではないであろうか。

以上、四十一年より、現時点までを苫小牧市における考古学研究の発展期としてとらえたいと思う。

〈主要参考文献〉

藤本英夫・『アイヌ研究史』 昭和四十三年 みやま書房

桜井清彦・『北海道考古学の発達』 「日本考古学の発達二」 昭和四十七年 講談社

『苫小牧郷土誌』 大正七年以降 苫小牧東尋常高等小学校郷土部編

『郷土資料―考古序論』 昭和十年ころ 苫小牧東尋常高等小学校郷土部編

『土俗考』 昭和十年ころ 苦小牧東尋常高等小学校郷土部編

『美々貝塚の研究』 昭和十年ころ 苦小牧東尋常高等小学校郷土編

『苦小牧町史 先史時代』 昭和十五年 苦小牧町

酒井仁之進 『苦小牧の先史時代文化について』 昭和二十三年 未刊原稿

松浦武四郎 『東蝦夷日誌』

河野広道 『苦小牧地方古代史』 昭和二十九年 苦小牧市教育委員会

金森定敏 『苦小牧平野のおいたち』 「郷土の科学」 昭和三十四年

小野慶郎 『苦小牧郷土史』 「郷土の研究」 昭和三十九年 苦小牧郷土文化研究会

畑宮清一郎 『苦小牧史』 昭和四十年 月刊とまこまい第Ⅰ号〜第Ⅴ号

佐藤一夫 『苦小牧大島遺跡発掘調査概要』 昭和四十二年 苦小牧市教育委員会

佐藤一夫 『苦小牧市高丘遺跡発掘調査報告書』 昭和四十四年 苦小牧市教育委員会

佐藤一夫 『苦小牧市美沢植村遺跡調査報告』 「郷土の研究」 昭和四十六年 苦小牧郷土文化研究会

第二節 遺跡の分布

苦小牧市の行政区画内からは、現在のところ約六〇カ所の遺跡が発見されているが、その大まかな分布は市の西部に当る樽前から高丘・坊主山にいたる地区、市の中央部緑ヶ丘公園から明野・勇払川までの地区、市の北部で美々川を中心とする植苗、美沢地区、市の東部で柏原、静川地区などの火山灰台地の上部や緩斜面などに多く分布している。これらの遺跡はほとんどが遺物包含地と呼ばれるものであるが、住居址、集落址、墳墓、貝塚、石器製作址、舟溜な



タブコブ遺跡遠景（昭和49年）〔佐藤一夫蔵〕

どの各種の遺構があるほか、その時代も縄文時代早期から続縄文、擦文期をへてアイヌ時代までとなっている。

遺跡には当然のごとく遺物が出土するわけであるが、当地方は、縄文時代の早期ははじめころに樽前火山が爆発し、大きい噴火で四回、大小あわせると六〇回以上の活動を記録している。そのため噴火によって降下した火山礫ないし火山灰が厚く堆積し遺跡をおおっている。人間が生活できた時期は、この大きな四回の噴火の間に当る活動のない時期で現在のように植物が繁茂し、黒色腐植土の生成された時期でもある。

そのため、苫小牧地方の遺跡は、各火山灰層の間の三枚の黒色腐植土層中より先史時代の遺物である石器、土器、骨角器、鉄器等の発見されることを理解してもらいたい。

次に各遺跡の概略について述べるのであるが、これらの中には、すでに開発などのために埋滅、消滅してしまった遺跡も少なくないと思われるし、また、今後の大規模開発や市政の発展、調査技術の進展によってその発見数を増加させる可能性も充分あると思われる。

①タブコブA 国道三六号線植苗橋の左にタブコブとよばれる小丘がある。

ここは古く千歳街道を開くときに遺跡の一部が破壊され若干の資料が発見され『苫小牧町史』などにも遺跡の存在が知られ、遺物が写真入りで紹介されている。当地方としては一番最初に注目された遺跡である。このタブコブ周辺には数カ所の時代の異なる地点が知られているが、ここではタブコブAとして丘陵部北西斜面に位置する縄文時代前期から擦文期までにわたる遺物包含層の地点として置く。主な遺物としては縄文前期・静内中野式土器、中期・円筒上

層式・北筒式・余市式土器、後期・入江式土器、晩期・亀ヶ岡式土器・タンネトール式土器、続縄文期・恵山式・後北式土器、土師器、擦文式土器など、苫小牧地方から発見、出土する土器群のほとんどが発見されているし、石器では石鏃、石槍、石小刀、石錐、搔器、石斧、石皿、砥石、敲石などが発見されている。特殊な資料としては土製有孔円盤、小型土鈴、鋸歯状打器、装身具としての勾玉、平玉などがあげられる。

なお、当地点は、昭和四十年、北海道大学、大場利夫博士によって発掘調査が実施されている。また、発掘後の報告書内で、博士は縄文晩期の土器で、口縁部内外に撚糸圧痕のある土器群、いわゆるタンネトール式土器をタブコブ式土器として新型式を提唱している。

②タブコブB 通称タブコブ遺跡の南斜面で、数カ所の凹地が確認されていたため、昭和三十八年十月、大場利夫博士によって発掘調査を実施したところ、上部からは蝦夷太刀、煙管、盆、碗、鹿角製矢柄一三本、マレック、刀子、マキリなどを副葬した伸展葬のアイヌ人骨一体と、下部からは土器、石斧、石鏃、自然石などを副葬した東頭位座位屈葬の縄文中期・円筒上層式土器文化期の墳墓一基が確認されている。

③タブコブC タブコブ遺跡の標高一五メートルほどの東南に面する緩斜面に位置する竪穴住居址地点で、昭和三十九年十月の発掘調査においては傾斜地を切つて壁面と床面を作り、さらに壁面に煙道を設けた擦文期の竪穴が一カ所確認され、擦文式土器、土師器を中心に若干の後北式土器片、自然石を採集している。

④タブコブD タブコブ遺跡の南端で、現在国道三六号線と同じ高さにある地点で、昭和三十九年六月、土地所有者が、当地点を整地し、住宅を建築しようとした際、大量の続縄文期の土器や石器が発見され、その後、市教委で調査したところ続縄文期・恵山期で多量のベニガラを散布した墓拡内から、汐見式系の完形土器四個、石斧、磨石、搔器などを副葬した墳墓が確認、発見された。

⑤金森 国道三六号線よりパンケナイ川沿いに発達している半島状台地の中央に位置する遺跡で、土地所有者の金森が家建て、住宅用道路を作るため、整地したところ、壊された西向きの斜面より縄文晩期の土器片数点と、恵山式ないし、後北式土器の深鉢型土器の大型破片一点が発見されている。

⑥植苗中学校裏 昭和三十年十二月ごろ、元植苗小中学校裏の山裾より土を取っていたところ、台地面上より落ちてきたと思われる土器片を発見、多田犬一同校教諭などによって調査された結果、胎土に多量の植物繊維を含み横走する擦糸圧痕文を口縁部に施した土器片少量と、器面の表裏に凹みを持った大型の石臼一点を発見している。これらの土器は植苗貝塚出土のグループと類似し、縄文時代前期のものと思われる。

なお、当地点より遺物が出土することは戦前より同校生徒が知っており時々届け出られていたようである。

⑦植村A 美々川の支流、ペンケイ川の東側にある半島状台地の先端部に位置する遺跡で、タブコブ遺跡同様、各時期の遺物を包含しているようである。発見の動機は、昭和初年ごろ、この地に入植した植村伊之助が炭窯を作るため同遺跡の南側緩斜面を掘ったところ、多量の金属器や土器、石器などと住居址らしきものを発見したらしい。

その後、資料の一部が多田犬一教諭の知るところとなり、市教委より故河野広道博士に調査依頼が出され、昭和二十九年十月、一部発掘調査を実施している。さらに昭和四十四年八月、筆者等により発掘調査が行われている。

その結果から当遺跡は、縄文時代中期からアイヌ期までの遺跡で、前期・円筒下層式、中期・北筒式、晩期・日ノ浜式、続縄文・恵山式 後北式土器・北大式、土師器・須恵器、擦文式土器、石器では石鏃、石槍、石小刀、石錐、石篋、各種搔器、石斧、凹石、砥石、敲石、磨石などが発見される遺物包含地であるとともに中期、晩期の墳墓群やアイヌ期の住居址などが主体である。

特殊な遺物としては、橄欖岩製の切子玉、金属器では古銭（寛永通宝）銅鏃、鉄鏃、マレック、鉞、刀子、発火器

などや鎧の小札、鉄鍋破片などの鉄製品が多い。また、ここからは小型の短頸の壺と青海波を施した大型甕^{かめ}の須恵器二点や瀬戸物が発見されている。

⑧植村B 植村A地点の台地上部中央より、東に頭位を持つアイヌ人骨一体が発見され、A遺跡同様、故河野博士によって調査されている。

多田犬一教諭の報告によれば、伸展葬で、小刀、山刀、膳、碗、矢柄、マレックなどともに二枚の渡来銭、嘉祐通宝、洪武通宝が発見され、これによって、墳墓のおおよその年代が推定できるしA、B地点との対比によって、当地方のアイヌ文化の様相を把握できる重要な遺跡である。

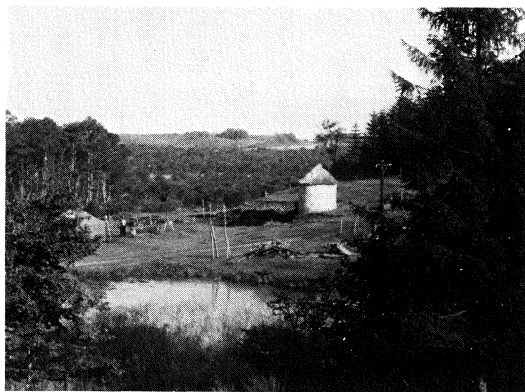
また、付近には多数の凹地があるし、次に述べる平田遺跡との間には、空掘状の溝があり周囲も湿地と木に囲まれ地理的環境も良好なので、全体がアイヌのチャシ^{（砦）}ではないかと考えられる。

⑨平田 昭和二十八年十月、土地所有者の平田が住宅裏に物置小屋を建てるため丘陵部の一部を掘ったところ、続縄文期の後北式土器が発見され、故河野博士に調査を依頼し発掘した結果、墳墓と思われるピットから後北式土器、完形品三点をはじめ破片が多数発見されたのである。特に注目されたのは全道初の出土という曲リマキリ^{（コンケマキリ）}である。

その他、長短軸欠入の石錘、磨製石斧、石小刀、石鏃、鉄製刀子などのほか、若干の擦文式土器、須恵器も発見されている。

なお、遺跡の位置は、植村遺跡と同一の丘陵部で、植村遺跡より約一キロメートルほど東に入った台地の北側斜面にある。

⑩大曲 国道三六号線の美々テスト道路のスタート地点の左側の崖付近で、昭和三十一年十月、それまで大きく力



大島遺跡遠景（昭和42年）〔市立苫小牧図書館蔵〕

ーブしていた国道を直線にするため工事したところ、沢山の遺物が発見されたものである。

大曲遺跡の位置する台地は、美々川に面し、タブコブ同様、湿地帯に大きく岬状に突き出ており、東側に良く発達した緩斜面があり、遺物は主としてこの斜面より、集中的に発見されたようである。遺構としてはアイヌ期の墳墓があつたらしく、鉄鍋、大刀二振、矢柄一七本、人間の臼歯が一点発見されている。

しかし、当遺跡の主体は遺物包含地で、縄文時代中期・余市式土器、晩期・上ノ国式・タンネトーL式、続縄文期、恵山式・後北式、擦文式土器などであり、恵山式土器は復元できるものもあつた。石器では石斧、石槍、石小刀、敲石、石錘、石皿などで特殊なものとしては、気泡の多い硬い火山岩を使用した矢柄研磨器がある。

⑪北炭山林 大曲遺跡より沢をはさんで北にある台地の東側で、昭和二十三年ごろ、林間道路を工事する際に遺物が発見され、地元植苗中学校に遺物が届けられていたものである。

遺物は縄文早期、絡縄体圧痕文のタンネトーE式をはじめ中期・円筒上層式・北筒式、晩期・上ノ国式、擦文、土師器などの土器、碧玉製の石斧、石皿、敲石、石槍状の石器などが出土している。

また、付近には竪穴住居があるようである。

⑫大島 大島遺跡は、タブコブ、植村などとともに植苗、美沢地区では最大級の遺跡で位置は千歳市との境、美々川の右岸、道々千歳〜早来線の北二〇〇メートル、標高五〜六メートルの台地緩斜面にあり、斜面はその

ま美々川の湿地へと連なっている。

発見の端緒は昭和初年ころ、土地所有者の大島五郎松が住宅附属小屋を設けようと、台地の一端を削ったところ、住居址の一部と見られる柱穴をはじめ、黒土層の上下から縄文早期タンネトーE式（ほぼ完形）をはじめ、前期・中野式、中期、後期、晩期、続縄文期・恵山式・後北式、土師器、擦文式土器などが発見された。これらの一部、擦文式土器は、町史編さん時には、すでに識者たちに知れ写真図版の一部に使用されている。

その後、昭和四十二年、大島が牛舎を建てるとのことから、筆者によってその一部が発掘調査され、縄文早期タンネトーE式をはじめ、縄文後晩期の土器を中心に多大の資料を得ることができた。

当遺跡の主体は、遺物包含地ではあるが、下部に墳墓があり、石斧を副葬したり、長短軸欠入の石錘を三〇個積みあげたもの、石搔、土製耳輪、装身具などを採集することができたのである。

⑬植苗橋下 昭和三十五年九月、タブコフ遺跡前にある植苗橋を架け替えたところ川底の土砂中より多量の遺物が発見され、多田犬一教諭より注目され遺物を回収した地点である。

遺物は縄文中期・円筒上層式土器を中心に北筒式土器、余市式土器、縄文後期の突瘤文土器、続縄文期の恵山式、後北式、擦文式、土師器などで、石器では、石斧をはじめ、各種の搔器類が伴っていた。

また、付近の川底より、ヤマトシジミを主体とする自然貝層もあったとの事であるが実際は不明である。タブコフ遺跡と密接な関係にある遺跡と思われるが、何分にも川底にあるため、層序、その他は不明である。

⑭斉藤 昭和二十年ごろ、土地所有者が牛舎横にサイロを作るため、敷地の一部を掘ったところ、土中より二点の土器片を発見し、大切に保管していたが、多田犬一教諭の知るところとなり昭和三十年、教諭を通じ、市教委に寄贈されたものである。二点の遺物の内一点は、口縁部内壁に撚糸の圧痕を施した、いわゆるタンネトーL式土器で、他

の一点は擦文式土器の破片である。

しかし、寄贈された時は、すでに発見者も物故し、遺物についてのくわしい事は、不明であったとのことである。なお遺跡は、植苗駅より南西約一キロメートルほどのウトナイ湿原に続く標高五〜六メートルの低位面に位置している。

⑮猿子 遺跡は美々川の支流であるウエンナイ川の上流で、かなり奥まった舌状の入組んだ台地の東斜面に位置し、昭和三十二年六月、炭焼き夫たちが原木を運搬するため林道を設けた際に遺物が発見されたものである。遺物は縄文中期・余市式土器をはじめ、縄文後、晩期、続縄文期の土器片が出土しているが、その主体は爪型文を中心とする上ノ国式土器である。

石器は少なく、わずかに両面加工の搔器と剝片のみである。なお昭和四十七年七月に実施された苫小牧自然保護協会の美々川流域調査の際、考古部会の扇谷昌康部長、多田犬一副部長により、現地調査が行われ、余市式土器の破片を採集している。

⑯角野 昭和三十二年三月、国道三六号線の舗装工事の際、御前水のガソリンスタンド付近から二片の余市式土器が発見されているが、詳細については不明である。

⑰久米井 美々川をはさんで、元植苗中学校遺跡の対岸で、現苫小牧ファームに入る道路の崖から遺物が発見されている。

遺物は、縄文前期、植苗貝塚出土の擦系沈線文土器に類似したものと中期の余市式土器三点、晩期の土器片一点と石鏃が出土している。

⑱大槻 タブコブ遺跡の位置するすぐ北の台地にあり、国道に接している当遺跡は昭和三十二年十一月、国道三六

号線の改修土盛工事のため、丘陵の一部を削ったところ、約五アールほどの面積から三カ所の地点にわたって遺物が発見されている。

一地点からは樽前C層上の黒土層から内耳鉄鍋と銅製のつる、第二地点からは、ほとんど復元できる擦文式土器一個体分、第三地点からは、樽前C層下の黒土層中より、縄文中期の円筒上層式土器、晩期の上ノ国式タンネットーL式や続縄文期の恵山式などが磨製石斧などとともに発見された。

さらに当地点からは、確実な炉はなかったが一五センチメートルほどの灰の層の堆積や柱穴などが確認されている。

⑲第一美々橋 道々千歳〜鶴川線の第一美々橋付近の南向き台地から遺物が二カ所ほど出るところが確認されているといわれているが、現在は実物はなく詳細については不明であるが、多田犬一教諭の記録によると全部破片で余市式土器と北筒式土器、縄文晩期の亀ヶ岡式土器であったとのことである。

現在は土砂採集のため、丘陵部は削られ、遺物包含地もおそらく、消滅してしまったものと思われる。

⑳美々坂 千歳市との境界附近で国道三六号線工事の際、削り取られた樽前D層上の黒土層より、二片の北筒式土器と一片の余市式土器が発見されている。発見年月日、出土状況等は不明であるが、この土器の写真がすでに苦小牧町史に載っているところからすると、タブコブ、大島遺跡同様、かなり古くから発見されていたものかも知れない。また、土器の裏面には朱墨で渡辺と記されているが今となつては、何のことか不明である。

㉑御前水 道々千歳〜鶴川線、美沢の御前水石碑の東側台地から、昭和四十二年十月ごろ、厚真郷土文化研究会、亀井喜久太郎会長によって土砂採集現場から、余市式、北筒式土器の破片と石斧、敲石が採集されて、市教委に通知された。



植苗貝塚遠景
(昭和49年)〔苫小牧市青少年センター蔵〕

筆者等が現地を訪れたところ、広範囲にわたって火山灰の採掘が行われ、攪乱された黒色土層中から若干の遺物を回収することができた。現在は消滅して存在しない。

②ウトナイ オタルマップ川の南、ウトナイの西方台地上に位置する遺跡で、昭和四十四年四月、苫小牧工業高校郷土研究部員がバトロール中に発見したもので、付近は宅地造成のため、火山灰地が整地され一部遺物も露出していた。苫工郷研の調査報告によれば、土器は縄文前期・静内中野式・円筒下層式、中期の円筒上層式土器などで、石器としては、石斧、搔器、敲石、台石、石鏃、石錐などが出土したことである。

②岡田 当遺跡は、美々川の左岸、国道三六号線沿いの植苗中学校遺跡の北にある台地の末端部で土地所有者が、畑を耕作中、時々土器や石器が発見されていたとのことである。

遺物は縄文中期・円筒上層式土器と晩期の土器片と思われるものであるが、このほか、土地所有者より対馬豊三教育委員長を経由して、市青少年センターに寄贈された石小刀一点がある。しかし遺跡の規模、層位、遺構等については不明である。

②植苗貝塚 昭和四十七年五月、植苗、緑星の里、永光学園内の敷地で道路工事を行っていたところ、丘陵の南西斜面より、大量の貝殻が発見された旨、市教委に連絡があった。市教委では、さっそく、現地踏査を行ない、貝塚であることを確認、市教委によって緊急調査を実施することになったのである。遺跡の位置する台地は、苫小牧ファームから南に発達した台地の中腹で台地の先端部は湿地をはさんでウトナイ沼に面している。

五月十三日からの調査では、樽前C層下の黒土層にはさまれた貝塚が厚さ約

一メートル、巾一〇メートルほどでレンズ状に台地崖に沿って下に落ちており、ヤマトシジミ、アサリなどを主体とする貝層から、ハマグリ、ウネナシトマガイなど一九種ほど、シカ、イヌ、キツネなどの哺乳類、トド、オットセイなどの海獣類、各種の鳥骨、魚骨などと共に刺器、銚先、縫針などの骨角器類、石鏃、石小刀、搔器、石錘、石冠、石臼などの石器類、さらに撚糸条線文を中心とする土器群とともに円筒下層式土器、縄文中期の余市式土器などが発見された。

なお、当貝塚からは二カ所の貝殻堆積地点が発見され、一個所は覆小屋を設け、野外観察ができるようにしている。また当遺跡出土のウネナシトマガイを学習院大学でC¹⁴年代測定を行ったところ、BP五、六四〇±一〇〇年という絶対年代が得られ縄文時代前期の貝塚であることが判明した。

②三井 ここは国道三六号線より西方約四キロメートル、樽前山麓に入った、当時では湾の中に突き出た丘で、竪穴の跡が二つあった。

何れも林間道路を作ってから発見されたもので土器は前北式土器が数カ所で収集されたのみで他はほとんど壊されていた。と多田犬一教諭の記録にあり、三井観光ゴルフ場内に遺跡の存在を述べているが、現在では遺物、その他とも詳細はわからない。

②六亀谷 静川台地の安平川に面する西側斜面で、昭和三十二年八月、台地周囲に築堤と道路を設けるため、南西丘陵部の斜面を削った所、恵山式の完形土器が発見され、市教委に届け出られた。

その後、小野慶郎前市立図書館長や多田犬一教諭によって調査され、内陸部に通じる道路の切通し西側より、縄文時代中期の円筒上層式、縄文後期、続縄文、恵山期、土師器（盃、完形品）撚文式土器の破片などが採集された。なお、当遺跡は、東部開発予定地内に含まれ、将来は消滅するはずである。



亀谷遺跡遠景（昭和47年）〔佐藤一夫蔵〕



柳館遺跡発掘風景（昭和47年）〔佐藤一夫蔵〕

②⑦柳館 静川台地の最南端苦小牧市と厚真町との境界付近に位置している。昭和三十六年八月ごろ、付近の小中学生が遺跡周辺に点在する旧日本軍トーチカや戦車壕が作られた際、掘られたり削られたりした土砂や、風雪によって削られた裂溝中の黒土層より土器や石器を発見し、静川小学校を通じ市教委に届け出られたのが発端である。

その後、小野慶郎前市立図書館長や楠野四夫市立図書館長などによって現地調査が行われ、遺跡であることが確認され、十月には当時、静内高校教諭であった藤本英夫（現、北海道教育庁振興部文化課主任文化財保護主事）に委嘱し、苦小牧工業高校郷土研究部員の協力のもと約二三平方メートルを発掘調査している。

その後、昭和四十四年、筆者によって一部調査され、住居址の一部を確認していたが四十八年に至り、遺跡の一部が土砂採取のため破壊され、その部分から大量の貝が発見されたのである。当時、著者等は綱木遺跡の発掘中で、調査終了後、ただちに現地を訪れ、その重要性におどろいたのである。

しかし、発掘する機会もなく昭和四十六年六月、植苗貝塚の緊急調査が行われ、その関連を調べるため現地を訪れたところ、貝塚部分は破壊され台地の下に落ちた遺物を回収するのみであった。

しかし、八月に再度、残存部分の調査を実施したところ、一部混貝土層が残っており鹿角、獣骨、数点の骨角器を採集することができた。また、四十七年十月には、この年設立された苦小牧自然保護協会考古部会（部長扇谷昌康）によつて、当遺跡の分布調査が行われ、従来考えられていた遺跡よりも、はるかに大きい遺跡であることが確認され、次年からの東部工業地帯埋蔵文化財分布調査の大きな基礎資料になったのである。

柳館遺跡の遺物は、縄文前期、静内中野式土器から円筒下層式が中心の住居址群で、遺跡内には石錘、石冠などを作ったと思われる石器製造址、ヤマトシジミを主体にアサリ、ウネナシトマガイなどによって構成された貝塚があり、多量の鹿の骨、魚骨、鳥骨をはじめ、縫針、エイの毒針を使った刺器などの骨角器類など、石器では、石鏃、石槍

石小刀、石錐、各種搔器、石斧、石のみ、石錘、石冠、石皿、凹石、砥石、敲石、礫器など非常に多くの石器と破碎された礫片が発見出土している。

⑳ 綱木 遺路は静川台地の南西、旧市営バス弁天中央停留所の真北に当る台地緩斜面に位置する。昭和四十三年六月、土地所有者の綱木広治が客土用の黒土を取るため、所有地の一部を削った所、大量の土器や石器が発見され、市立図書館に届け出られたのがはじめである。

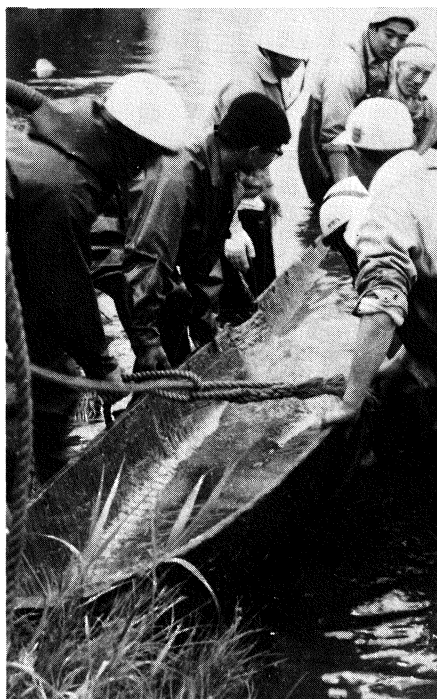
その後、筆者や扇谷昌康教諭によって一部発掘調査され、縄文晩期の亀ヶ岡式土器、上ノ国式土器を中心とする墳墓群が発見された。

遺物は石鏃、石錐、石槍、搔器、石斧、石錘、石棒などであるが、遺跡が墳墓であるため、遺物の中に特殊な舟型土器、玉髓製の石槍、独鋸石状の石棒など祭祀的色彩の強いものがある。また、当遺跡付近は柳館遺跡同様、前面に戦車壕があるとともに遺跡全面は弁天開拓の際、道路に敷くための火山灰が取られ、当地方としては、めずらしく表面採集のできる遺跡である。

㉑ 沼ノ端 昭和四十一年十一月、沼ノ端アイヌ丸木舟出土地点の地質調査のため来苦した北大、石川俊夫博士の現地調査の際、稔橋上流一〇〇メートルほどの左岸より筆者等によって遺物が発見されたもので、樽前C層上下の黒褐色土層より縄文晩期の土器片数点が採集されている。

その後、地質調査所によりこの付近が調査され、当地点の遺物について竹田輝雄道教委文化財保護主事教諭が報告を行っている。なお、遺跡は勇払川の河川改修により、川は切替えられ、包含地点も整地されている。

㉒ ニナルカ 当地点から遺物が出土することは、かなり早くから知られているようで、多田犬一教諭の報告にも記載されているが、筆者等の知ったのは、昭和四十四年六月、静川小学校児童が、同校グラウンド横の崖より数点の



沼の端アイヌ丸木舟出土状況
(昭和41年)〔市立苫小牧図書館蔵〕

式土器に伴って、チョッパー状の礫器が一点知られている。

なお、昭和四十八年度東部工業地帯埋蔵文化財分布調査の鍬入れ式は、当地点において行われたのである。

③中沢 「十年ほど前、中沢宅で家屋改築のため、裏の丘陵部を切り崩したところ、緑泥岩製と思われる石斧二個が発見された。出土した地層から考えて縄文時代のものらしい。筆者の知るかぎりでは、その他の遺物は発見されていない。」と畑宮清一郎道教委指導主事の記録にあるが、筆者はまだ遺物も地点も今のところ確認していない遺跡である。

③沼ノ端アイヌ丸木舟 昭和四十一年七月、北大、大場利夫博士指導のもと市教委によって発掘調査されたアイヌ丸木舟五隻及び推進具の出土地点で、位置は旧道々苫小牧→上厚真線にかかる稔橋の下流右岸である。

当地点にアイヌ丸木舟が埋没していたことは地元民をはじめ、地質研究者の間では、かなり以前より知れ渡ってい

土器片を発見し市立図書館に届けられたのが発端である。すなわち道々、苫小牧→上厚真線の静川橋より東にある静川小学校は大正四年九月に開校され、昭和三年五月にグラウンドがつくられている。

おそらくこの際に多量の遺物が発見されたものと思われる。遺物は、樽前C火山灰を中心に上下の黒土層中より出土し、上層は沈線文を主体とする恵山式土器、下層は突起文、貼付文による北筒式土器である。なお、北筒

たそうであるが、川の流れの関係で、たえず見え隠れしていたらしい。しかし四十一年に入り、筆者が苫小牧市に勤務するようになった際、アイヌ丸木舟三隻がかなり明瞭に河底に見えるようになったため、それを発掘引揚げることになり、前記、大場博士の指導助言のもと発掘調査が実施される運びになったのである。その結果、丸木舟三隻、板綴舟二隻、棹、櫂など推進具の発見となり、考古学界、民俗学界などに一大センセーションを起こしたのである。

それは、今まで文献のみで知られていたイタオマチツブ（板綴舟）や全長九メートル、巾一メートルという大型丸木舟の発見、推進具や舟舷に施されていた家紋（記号）やアイヌ文の彫刻、さらに火山灰の層位学的研究から三百年前という絶対年代を得られたこと。さらに古文献や古絵図に見られた千歳越え、勇払越えなどといった内陸水路の存在が実証されたことであった。

しかし、現在はC¹⁴年代測定法によって七七〇年前という絶対年代が得られ、道指定文化財として苫小牧市青少年センター博物館展示室に保存公開されているが、出土地点は勇払川の河川改修によって埋立てられ、かつてのおもかげは見ることができない。

③柏原アイヌ丸木舟 昭和四十四年九月、佐藤貞柏原部落会長が行方不明になった放牧馬を探すため、市宮柏原放牧場内を歩いていたところ、安平川の支流で、今は干上がってしまった蛇行部分から一隻の丸木舟を発見、市教委に届け出られた。

九月二十七、二十八日両日、市教委によって発掘調査が実施されたところ、全長七・五メートルほどのアイヌの丸木舟が確認された。丸木舟は舟底を失い、自然にこの地に埋没したものが河川の改修により水位が下がったため湿原地表にあらわれたものと思われる。

現在苫小牧市青少年センターに保管されているが、舟先と舟尾が朽ち二枚の板になっている。また、丸木舟出土地



柏原アイヌ丸木舟出土状況
(昭和44年)〔苫小牧市青少年センター蔵〕

点からは、何らの伴出品もなかった。

③④勇弘 現在、青少年センター郷土博物館所蔵の資料の中に勇弘出土として約二〇〇片ほどの土器の小破片がある。発見者、地点、その他の詳細は不明であるが、沈線文や撚糸条線文を主体とする縄文後期ないし晩期のものである。

③⑤柏原1 昭和四十八年七月から十一月にかけて実施された苫小牧東部工業地帯の埋蔵文化財分布調査において発見されたもので、遺跡は柏原台地の南西端で湿地の中へ半島状に突き出ている台地の斜面に位置している。遺跡表面はすでに火山灰採集のため削平されているが、包含層は良く残り、樽前C層上部の黒土層から縄文後期の見晴町式、タンネトーL式などのほか、石器では剝片、礫などが確認されている。

なお、以下に述べる各遺跡群も柏原1遺跡同様昭和四十八年度の東部工業地帯内埋蔵文化財分布調査によって確認されたもので、同遺物は、調査班が保管所有している。

③⑥柏原2 柏原1遺跡の南隣に位置する遺跡で、遺物は主に舌状台地の両側に広がりを見せている。また、地表も同様火山灰が採取されているが、包含層は良好な状態で保存され、縄文晩期の上ノ国式、タンネトーL式、釧路・緑ヶ丘式系の土器片などが五〇余点が発見されている。

なお、1・2遺跡の標高は一〇～一三メートルほどで、湿地は標高六メートルほどである。

③⑦柏原3 柏原台地の南西で、柏原1・2遺跡より湿地をはさんで東側にある細長のびた一支丘の先端部に位置

する。発見された遺物は、縄文晩期・タンネトール式土器が主体であるがその他、擦文式土器と思われるものの破片が一点と、砥石が一点あった。

なお、遺物は樽前C火山灰層をはさむ層厚約二〇センチメートルと三〇センチメートルほどの黒色土層中から発見されている。

③⑧ 柏原 4 道々苫小牧より上厚真線の柏原入口付近に面する台地南端に位置する遺跡で、分布調査中掘削機によって発見されたものである。

遺物は現在のところ石鏃一点のみであるが、試掘構内から土坑が発見されているため、墳墓が存在するかも知れない。また、時期は何分にも石鏃一点のみの出土であるため不明である。

③⑨ 柏原 5 柏原台地の南東端で、台地が安平川に沿って北側にカーブする部分に位置している。当遺跡も掘削機によって発見されたものであるが、遺物の分布する範囲が広く、東部地区でも第一級の遺跡と思われる。

現在までに発見されている遺物は、土器では縄文早期・擦系圧痕文土器、中後期の余市式・見晴町式、晩期・タンネトール式、続縄文期・恵山式土器など約三〇〇点、石器では、石鏃、石槍、石小刀、搔器、石錐などで、他に沢山の剥片や礫が出土している。

しかし、掘削機によって掘削しているため、各々の土器との共伴関係は不明である。

④⑩ 柏原 6 柏原 4 遺跡より北へ七〇メートルほど入った台地上面の平坦部に位置している遺跡で、現在のところ人工遺物は確認されていないが、敲石として使用されたと思われる礫が発見されているところから一応遺跡として登録しておいているものである。

④⑪ 柏原 7 当遺跡は柏原 5 遺跡の北東、内陸へ入る道路のある沢をはさんで二〇〇メートルほどの所に位置する地

点で、6遺跡同様、定型化した遺物はないが、原石になると思われる赤色チャート礫が発見されていることと、5遺跡の延長とも考えられるので、一応遺跡としているものである。

④2 静川 1 静川台地の南、柳館遺跡の北六〇〇メートルほどの地点に位置する西向きの舌状台地上にある遺跡で小支丘として発達している丘陵部の一番内陸にあたる。付近は標高二〇メートルほどの緩斜面で、火山灰が露出し、一部では黒土層も見えるところである。

遺物は磨製石斧の破片一点のみであるが、精査しだいではかなりの資料が得られるものと思う。時期については不明である。

④3 静川 2 (薦森) 道々上厚真―苦小牧線に面する北向き丘陵上に位置し、ニナルカ遺跡より上厚真側に約一キロメートルの地点である。

遺跡は縄文中期・円筒上層式・北筒式及び後・晩期に編年されられると思われる土器片が若干発見されている。しかし、当地点は火山灰採集のため、ほとんど破壊され、遺跡の主体部は消滅したものとと思われる。

④4 静川 3 (弁天) 静川台地の南、綱木遺跡と柳館遺跡のほぼ中間で、第三排水溝が南へ曲がる北に発達した細長い半島状丘陵部の先端に位置する。丘陵部上面は柏におおわれているが、一部で火山灰層が露出している部分があるし、旧日本軍のトーチカがある。遺物は縄文晩期の所産と思われる土器の小破片ばかりである。

なお、当地点は柳館遺跡の発掘の際、扇谷昌康教諭によって発見された弁天遺跡と同一の地点と思われる。

④5 静川 4 静川 3 遺跡と柳館遺跡の中間にある丘陵部の先端で、現在の所、土器、石器などは確認されていないが柳館遺跡などから多量に発見される河原礫と同様のものが破碎されて多量に発見されているため、柏原 6・7 遺跡同様遺跡として登録しているものである。

以上、東部地区の遺跡について述べたが、今後の調査如何によつては、柏原地区などで更に多くの遺跡が発見されるものと思われる。

④⑥明野Ⅰ（企業局取水口） 昭和四十四年四月二日、北大演習林横の勇弘川左岸の平坦部において、北海道企業局が工業用水取水口建築現場で、地下約七メートル下から一片の土器が発見され、市立図書館に届け出られた。出土層位は明らかにされなかったが、地下七メートルは海成のシルト層で、その上部はピートがあり、さらに三枚の火山灰層とピート層が交互に堆積している。

なお、土器片は縄文前期・中野式系土器と思われる。

④⑦明野Ⅱ 昭和四十六年十一月七日、当時和光中学校二年生であつた鈴木卓直君によつて発見された遺跡で、明野遺跡の西側の台地斜面に位置している。

遺物は円筒上層式土器と思われるものが六点、柳葉型の石鏃一点、石核、敲石、剥片などであるが表面採集のため出土層位、その他詳細は不明である。

④⑧高丘A 市の中心地より北にあたる背後地一帯の丘陵部を市民は高丘と呼び憩いの場として親しんでいるが、この一帯も遺跡の多い地域である。しかし、当地区は都市開発のため、各所で整地や火山灰の採取が行われている。

当遺跡は昭和三十九年七月十九日に発見され、一部市教委によつて試掘が行われたが遺物の発見はなかったところで、中野跨線橋より北にぶつかった台地の西約一〇〇メートルの地点で、遺物包含地があつたようである。

④⑨高丘B（戦車壕） 昭和三十九年八月三十日、中野跨線橋の突き当りの台地より土砂採取のための切りくずし工事中、偶然遺物が発見され、市教委に届け出られた。さっそく、市立図書館職員などによつて現地調査がなされ、

かろうじて若干の遺物を採集することができたのである。

遺物は縄文中期の北筒式土器をはじめ、晩期の亀ヶ岡、タンネートーL式土器、続縄文の恵山式土器や黒曜石の破片礫などであったが、十分な調査不能のまま消滅してしまったと思われた。しかし、昭和四十三年六月に至り、同地を市土木部の資材置場とするため整地したところ、骨片を含んだ灰層をはじめ多数の遺物が発見され、七月末日より市教委によって筆者等の担当で緊急調査がなされることになったのである。

その結果樽前C火山灰層上下の黒色土層から縄文前期・中野式・円筒下層式土器を中心に後期・御殿山式土器のグループ、晩期・上ノ国式土器、擦文式土器などが発見されたのである。石器では石鏃、石錐、石槍、石小刀、擦り切り磨製石斧の残片や磨製石斧、石錘、敲石など、縄文前期と後期ないし晩期初頭の遺物が多量に出土したのである。

また、遺構としては住居址、墳墓など明らかなものは発見されなかったが、発掘区内から数カ所の灰のブロックが確認され、それらの中には焼骨片、石鏃などが含まれていた。

⑤⑩高丘C 昭和三十九年九月三日、市内旭町の東中学校校庭のテニスコートを整備するため、高丘地区より土砂を運んだところ、その中に、刀身一本と鏢、鏢押しなど各一点づつが発見された。

さっそく現地高丘地区を調べたが、都市計画による住宅用地造成工事のため半壊され、出土地点その他は不明となつてしまった。

⑤⑪高丘D 昭和四十七年ころ、当時東高校生徒であった小野寺秀和君によつて発見された遺跡で、位置は高丘B遺跡の北五〇〇メートルほどの丘陵中腹部で、遺物としては縄文中期・円筒上層式土器片などと石冠、剝片などが若干出土している程度で、出土層位、その他詳細は不明である。

⑤⑫緑ヶ丘A 昭和四十一年六月、当時市立苦小牧清水小学校校長であった近江謙三が、同校正門前の緑ヶ丘公園東

端の崖より、土器、石器などが出土し、同校生徒によって乱掘されている旨の連絡が市立図書館にされた。その後、七月に入り沼ノ端アイヌ丸木舟発掘のため来苫した大場利夫博士に相談し、八月二十、二十一日に発掘調査すべき手続きをとった。

発掘調査の結果、続縄文式土器を主体とする墳墓遺跡で九個のベニガラを伴う墓壇と多量の恵山式土器、石鏃、搔器、石斧、石皿、石包丁状石器、砥石、石槍、石錐、敲石、装身具として石製垂貝、土製管玉などと共に、江戸時代前期と思われる墓壇が一基発見され、その中からは漆器の椀、ガラス小玉二七八点などを発見採取することができた。

その後、さらに学校を通じ、遺物を回収したところ、靴型石器、石鏃などが集められた。現在は一部包含層が残されていると思われるが、都市計画により、石垣がめぐらされ、保護整備されている。なお、同地点から鈴木卓直君よりアイヌ期のものと思われる鉄製鎌二個体が採集されている。

⑤③緑ヶ丘B 昭和四十六年五月、鈴木卓直君が緑ヶ丘A遺跡と緑ヶ丘の苫小牧放送局との緩斜面から土器や石器を発見し、市青少年センターに寄贈された。土器は縄文中期・円筒上層式の良好な資料であり、伴出した石器として石鏃、搔器、石皿、磨石、石棒などであった。

そのほか若干の余市式土器、縄文晩期のタンネットL式土器なども出土している。

⑤④中野(苫小牧港) 昭和三十六年九月、苫小牧港建設工事中、ブルドーザー運転手によって一個のほぼ完形の土器が発見され、市教委に届け出られた。運転手の話によれば、苫小牧港のほぼ中央部、旧海岸線付近の海底を浚渫中の土砂中より発見したとのことであった。

遺物は鉄分により赤色化した三又文の施された縄文後期・御殿山式の注口土器である。

⑤⑤苫工校庭 昭和三十三年秋、北海道苫小牧工業高等学校敷地内で井戸を掘った際に偶然発見されたもので、その

後周囲を調査したが、詳細については不明である。遺物は縄文後期の土器で深鉢型土器の底部のみの発見である。

⑤⑥西町 昭和四十四年二月二十日、市内西町の一市民より住宅敷地内を掘っていたところ、このようなものが出たと届けられたもので、層位、その他の共伴関係は不明であるが、縄文前期・静内中野式系土器と思われる破片一点を市立図書館郷土博物館に届けている。そのため、正確な位置も不明である。

⑤⑦坊主山 昭和二十九年十一月、高丘、通称坊主山登山口の右側、山麓の南斜面から平地にかけて遺物が発見された。発見の動機は、付近が畑に利用されていたため、その中より遺物を発見し、付近の人の知るところとなり多数の人びとの盗掘により遺跡は破壊されて埋滅寸前の状態であったが、市教委によって遺物回収が行われ、余市式系土器二個を復元するほどの破片を回収した。

その他、縄文晩期の土器片、石鏃二点、石斧、敲石などを採集したが、出土層位、遺構その他は不明である。

⑤⑧有珠川 昭和二十四年ころ、有珠川上流の左岸、台地の崖下から発見されたといわれるもので、縄文後期の土器片二点と、後北式土器の大型破片四点のみの出土である。

しかし正確な出土地点、層位等についての詳細は不明である。

⑤⑨糸井A 昭和四十四年ころ、苫小牧工業高校郷土研究部員によって発見された遺跡で、その後四十一、四十二年表面採集や部分的な調査が行われている。遺跡は小糸魚川の右岸で、西にのびた舌状台地上に位置し、A、B二点の遺物包含地が知られている。現在、はまなすゴルフ場の敷地となっているが、包含層は残っているようである。

遺物は、縄文時代早期・絡糸体圧痕文土器のタンネットーE式をはじめ、前期・中野式、中期・余市式、晩期・タンネットーL式・続縄文期、後北式土器などが出土しているほか、石器では、石斧、石錘、石冠、敲石、石皿、石槍、石鏃、石小刀、搔器、靴型石器などが出土している。

また、注目される遺物としては、タンネトーE式に伴ったと思われる彫器三点があげられる。

⑥0 糸井B 昭和四十六年五月二十七日、当時市立和光中学校二年生であった鈴木卓直君によつて発見された遺跡で、地点は、苦小牧市の西方国鉄糸井駅の北方五・五キロメートルの地点、有珠川と小糸魚川の中間に当る丘陵の西緩斜面である。

付近は宅地造成のため、一部丘陵部が削られ、平坦化した際に遺物が出土したもので、縄文早期・絡条体圧痕文土器一点、前期・中野式土器、後期・涌元式、御殿山式、晩期・タンネトーL式、続縄文・後北式、擦文式、土師器など縄文早期から擦文期まで、かなり長期間にわたる遺跡である。

石器では敲石、石鏃、搔器、石錐などであるが、鈴木君によつて採集された資料の中にほぼ完全な一個の擦文式土器があり、底部は穿孔されていた。このため遺物包含地であると共に一部には擦文期の墳墓が存在するものと思われる。

しかし市街地の発展に伴い付近に住宅が密集し、児童、生徒による盗掘がはげしく、良好な包含層は望めないようである。

⑥1 泉沢 昭和四十八年、糸井地区をパトロール中、筆者よつて発見されたもので、糸井B遺跡の北、市清掃センタ―向いの整地された丘陵緩斜面である。

遺物は擦文式土器の破片のみであるが、今後の調査によつては、良好な包含層が得られるかも知れない。

⑥2 高専 昭和四十六年八月、鈴木卓直君によつて発見された遺跡で、地点は市内錦岡、苦小牧工業高等専門学校の裏、小糸魚川と錦多峰川にはさまれた丘陵部の西側、平野部に面した台地の末端に位置しているところである。

遺物は現在までのところ、無柄石鏃一本のみで、詳細は不明である。

⑥3 大沢 昭和四十六年九月十二日、当地域をパトロール中の鈴木卓直君によって発見された遺跡で、錦岡市街地から北へ二キロメートル大沢沼の西岸、丘陵部に位置する。発見された遺物は有柄石槍、石鏃、磨製石斧、軽石製の矢柄研磨器などで、土器片は円筒上層式に相当すると思われるものが一点出土している。

なお、出土層位は第二黒色土層と思われる。

〈主要参考文献〉

- 『苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査報告書第一次』 昭和三十八年 苫小牧市教育委員会
『苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査報告書第二次』 昭和三十九年六月 苫小牧市教育委員会
『苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査報告書第三次』 昭和三十九年十月 苫小牧市教育委員会
『苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査概要第四次』 昭和四十年 苫小牧市教育委員会
多田犬一 『苫小牧市に於ける遺跡について』 未発表原稿
河野広道 『苫小牧地方古代史』 昭和二十九年 苫小牧市教育委員会
『北海道苫小牧市植苗美沢遺跡第三号植村遺跡発掘調査報告書』 昭和三十五年 苫小牧市教育委員会
多田犬一 『苫小牧Ⅱ号（植村）遺跡発掘報告』 「郷土の研究2」 昭和四十二年 苫小牧郷土文化研究会
佐藤一夫 『苫小牧市美沢植村遺跡発掘調査報告』 「郷土の研究3」 昭和四十六年 苫小牧郷土文化研究会
佐藤一夫 『苫小牧大島遺跡発掘調査概要報告書』 昭和四十二年 苫小牧市教育委員会
扇谷昌康 『美々・勇弘川の遺跡』 昭和四十八年 苫小牧自然保護協会
『苫小牧町史―先史時代』 昭和十五年 苫小牧町
『T P 概要報告(ウトナイ)』 「チャシコツ12」 昭和四十四年 苫小牧工業高校郷土研究部
赤松守雄 中田幹雄 佐藤一夫 『苫小牧地方における貝類について』 「北海道の文化28」 昭和四十八年 北海道文化財保護協会

『苫小牧付近の貝塚について』 昭和四十七年 苫小牧工業高校郷土研究部

楠野四夫 『苫小牧市静川遺跡発掘報告』 「郷土の研究1」 昭和三十九年 苫小牧郷土文化研究会

佐藤一夫 『苫小牧市静川柳館遺跡発掘調査略報』 「苫小牧市青少年センター紀要」 未刊

佐藤一夫 『苫小牧市沼ノ端丸木舟発掘調査概要報告書』 昭和四十一年 苫小牧市教育委員会

小野慶郎 『苫小牧市勇弘川埋没丸木舟発掘記』 「北海道の文化11」 昭和四十二年 北海道文化財保護協会

佐藤一夫 『苫小牧市高丘遺跡発掘調査報告書』 昭和四十四年 苫小牧市教育委員会

佐藤一夫 『苫小牧市高丘緑ヶ丘遺跡発掘調査概要報告書』 昭和四十一年 苫小牧市教育委員会

稲葉勝男 『苫小牧市高丘にある土器について』 「郷土の科学30」 昭和三十五年

『苫小牧市糸井小糸魚川周辺発掘調査報告書』 昭和四十一年 苫小牧工業高校郷土研究部

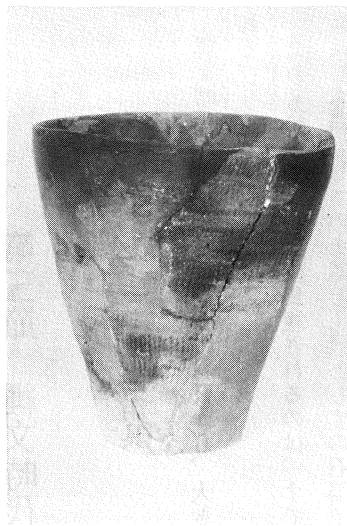
佐藤一夫 『糸井第Ⅱ遺跡』 「機関誌苫小牧市史編さんNo3」 昭和四十六年 苫小牧市史編さん室

第三節 縄文時代の遺跡と遺物

一、生活用具

縄文時代の生活用具は、その材質から、大きく、石器、木器、骨角器、そして主として容器としての土器があげられる。

これらの中で、特に重要視されるのは、すでに述べたように縄文式土器の名で代表されるように、縄目の文様が施された容器としての土器と工具としての石器である。



大島遺跡出土緒糸体圧痕文土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

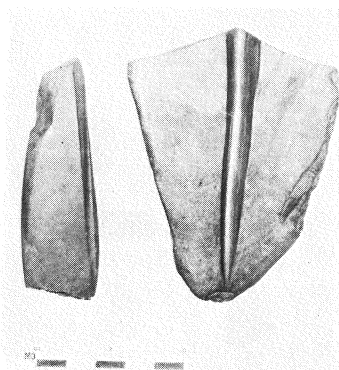
石器については、旧石器時代の始めから、その製作手法には、約二百万年の伝統があるのに対し、土器は、古くても一万年ほどの歴史しかないのである。

次に苫小牧地方の土器文化を中心に各期ごとに土器についてと、さらにその時期の代表的かつ特殊な石器について述べてみよう。

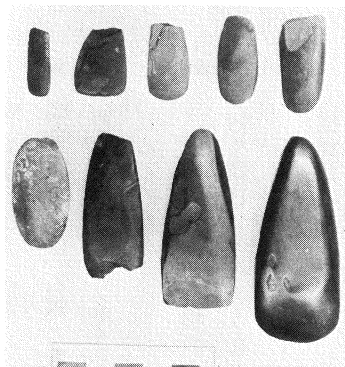
北海道最古の土器文化については、すでに一章三節で述べたとおりであるが、目下のところ苫小牧市内から発見されている一番古い土器群は、長沼町・タンネトー遺跡や静内町・田原遺跡などを標式とするタンネトーⅠ式土器や、田原B式土器の仲間で、撚糸圧痕文ないし緒糸体圧痕文土器とよばれるもので、丸い木の棒や竹などに撚糸をクルクルと巻きそれを土器の表面に押捺するものである。この土器の器形は、ほとんどが平底の深鉢型を呈するもので、市内からは、大島、北炭山林、糸井A、柏原5遺跡などから発見されている。

これらの土器群は、縄文時代早期の終末に位置するもので、広く道東地方から道南地方の一部にも見られるものがあり、伴出する石器としては、磨製石斧、擦切磨製石斧、石のみ、台石、石錘、敲石などの磨製石器、石鏃、尖頭器、石小刀、石錐、搔器、彫器、石篋などの打製石器などがあげられる。

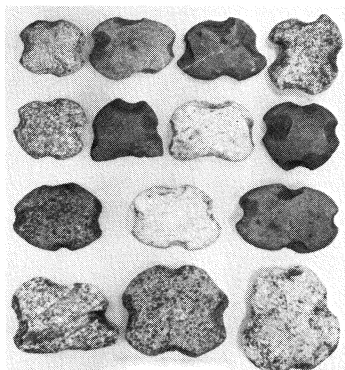
ここで簡単に石器の製作方法と用途について説明しておく、磨製石斧とは、緑泥片岩、蛇紋岩などの河原礫を、石と石とでこすり合わせて、刃部を作り出す斧（おの）で、刃部の型から棒状斧あるいは定角式石斧とよばれ、土掘り、木の加工などに主として使用する利器である。擦切磨製石斧とは、写真左上で分かるように、砂岩製の擦切り具



タフコフ遺跡出土の擦切磨製石斧
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



大島遺跡出土の石のみと磨製石斧
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



大島遺跡出土の石錘
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

石鏃とは、弓矢の先につけるやじりのことで、その型から有柄、無柄、柳葉型、二等辺三角型などと大きく分けられているが、非常に多種多様の形がある。材質はおもに、黒曜石、頁岩、チャート、メノウなどが多い。

網で魚をとる時に使用するものである。

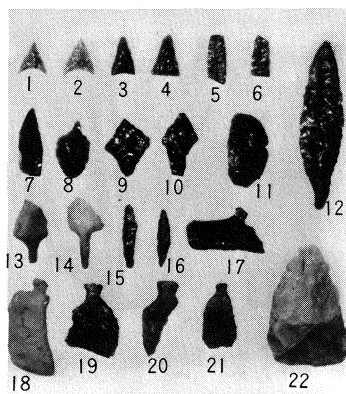
石錘は円型を呈する扁平な河原礫の両端、長軸ないし短軸を、または両方（長短軸）を打ち欠いた石のおもりで、

チヨウナのように使用したものと思われる。

石のみは、磨製石斧の小型のもので、刃部は両刃のものがほとんどである。使用法としては、木の柄をつけ、手斧

で石に溝を掘り、その部分からたち切って石斧を作るもので、この手法は広くシベリヤから沿岸州地方などにもあり

北海道へも伝播したものと思われ、縄文時代の早・前期と続縄文期の恵山期に特に多い手法である。



大島遺跡出土の石器 1～6 石鏃
7・8 彫器 9・10 石小刀 11・22 搔器 12 尖頭器
(石槍) 13～16 石鏃 17～21 石小刀
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

尖頭器とは、槍先のこと、投げ槍、手槍などの先につけるものである。形は、石鏃とおおむね同じであるが、大型の月桂樹葉状尖頭器（ローレルリーフポイント）とか有肩尖頭器、有舌尖頭器などと呼ばれるものもある。

石小刀とは、一種のナイフで縦型と横型があり、刃部の上端には紐を結びつけるような丸い尖起が施されているものである。

石鏃、きりのことで、棒状のもので木の柄などにつけて使用する柔錐状のものである。これで、骨角器や毛皮などに穴を穿つたもの

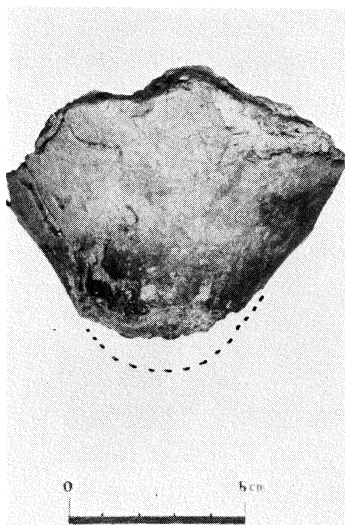
と思われる。

削器、搔器、一般的にはナイフもしくは皮はぎとよばれるものであるが、その型から、縦型、横型など多種多様で特殊なものとしては、ノツチ状のもの、円型状のものなどがある。

石材もバラエティーに富み、おおよそ石器を作る石であれば、何でも使用しているようである。

彫器、グレーバーないし、ピュランとよばれる彫器は、旧石器時代のノミであるが、縄文時代の早期、特に絡糸体圧痕文土器に伴って出土している。これは、骨角器を加工する際に使用するもので、尖頭器状や搔器状の石片の一端を上部から一撃ないし数撃を与え、グレーバーファシットという刃部を作り出したもので、市内からは、大島遺跡や糸井遺跡から各数点出土している。

石鏃、これも石小刀のようにナイフないし皮はぎなどのようにして使用するものであるが、つまみの部分がなく、しかも刃部は鋭角に作り出されたバチ状の石器である。



柳館遺跡出土の中野式土器、尖底部
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

以上のほか、絡条体圧痕文土器に伴うものとして、サイドブレードと呼ばれた植刃状の石器があつたが、最近の研究では植刃ではなく、細身の無柄石鏃の破損であるという見方が強いようである。

前期に入ると、苫小牧地方にもようやく、数型式の土器文化が流入してくる。その最初は、静内町中野に標式遺跡を持つ静内中野式土器である。

この土器は、器形は尖底と平底と二通りあるようであるが、最大の特徴は、器壁が非常に厚く、しかも胎土に多量の植物繊維を含んでいるということである。

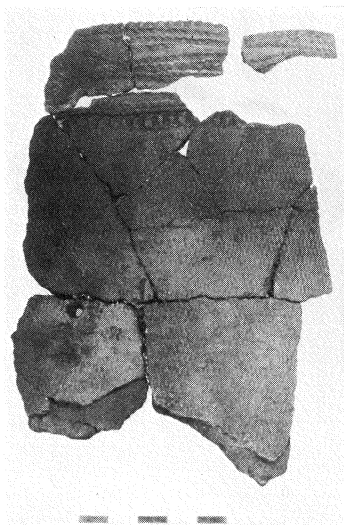
次に網走市大曲遺跡から発見され、一般に綱文式土器とよばれ、土器の表面にロープを巻きつけたような文様で、器形は丸底のボール状を呈する土器である。

これらの静内中野式や綱文式土器は、道東的要素が強いのに対し、道南地方、否、東北地方にその起源を持ち、東北、北海道の中央部まで、その文化圏の中に入れた円筒下層式が、この期を中心である。

円筒下層式土器とは、円筒形で平底、胎土に多量の植物繊維を含み、器面に斜縄文、羽縄文、撚糸文などを施し、時期が進むにしたがい、口縁部は外反し、口唇部は肥大し、文様も多軸縄文や木目状撚糸文などが見られるようになる。

これらの中野式、綱文式や円筒下層式土器に伴出する石器としては、早期の石器と大差はないが新しく石皿、石冠、一辺に磨痕のある打器や打撃痕のある石器が多くなる。

石臼は、大きな扁平な石の中央部が凹んでいるもので、ほ



高丘遺跡出土の円筒下層式土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

が多く出土する。

次にこの時期に相当すると思われる植苗貝塚の土器について述べておこう。

植苗貝塚からは七個の復元出来る土器が発見されたが、その内容は一個は撚糸の圧痕による円筒下層式土器、一個は口縁部に鐔状の凸帯がめぐらされ、斜行縄文の施されたもの、他の五点は深鉢型を呈し、口唇部は平坦で、口縁部に二―三本の撚糸圧痕による沈線文が施され、器面には羽縄文が施してある。また、内壁にも全面、器表状の羽状縄文が施されている。これらの土器群の位置については、今のところ不明であるが、最近、江別市の大麻V遺跡から同種のようなものが発見されているし、静川・柳館遺跡や旧植苗中遺跡、タブコフ遺跡などから類似の資料が報告されている。なお、当貝塚のC¹⁴年は五、六四〇年±一〇〇年である。

以上、前期の土器と石器について述べたが、静内中野式土器は柳館遺跡をはじめ多数の遺跡から、綱文式土器は大島遺跡から、円筒下層式土器は高丘遺跡からまとまった資料が多く発見されている。

とんどが表裏とも凹んでいる。これは石冠とよばれる擦石で植物の茎や根から汁やデンプン質をとったり、土器の中に入る植物繊維をたたいたり、つぶしたりするために使用したものと思われる。

中野式に伴う石冠は、扁平な石の一端を石錘状に打欠き、底辺を使用して、円筒下層式に伴うものは、北海道式石冠とよばれ、お供えもち状のものが多い。

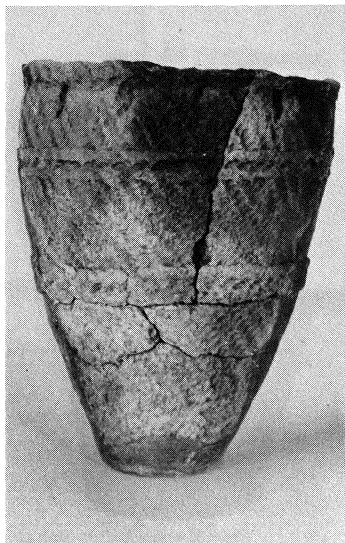
この外にも同じような用途に使用されたと思う擦石や敲石

中期になると、苫小牧地方は道南地方と同様、東北地方的色彩の強い円筒上層式文化の仲間には包括されてしまう。すなわち、前期の円筒下層式土器がさらに発展し、口縁部には四個の弁状突起を持つ大型の深鉢型土器が圧倒的に多くなり、文様も羽状縄文を主体に粘土紐による隆起線文や撚糸原体による馬蹄形圧痕文などが口縁部に施される。このような円筒上層式土器文化が勇払平野を被っているところ、道東地方を中心に、胎土に繊維を含み、三角型を呈する肥大した口縁部、四個の山形突起と口唇部肥厚帯の下に外から施された突瘤文を持つ、北筒式土器の断片を盛行していた。この北筒式土器は、道東地方から石狩低地帯にまでその分布をひろげ、苫小牧市内にもそたように持っている。円筒上層式が一般的に遺物が包含地から出土するのに対し、植村遺跡の墳墓内に埋葬されてい殊な遺構から北筒式土器は発見されるようである。

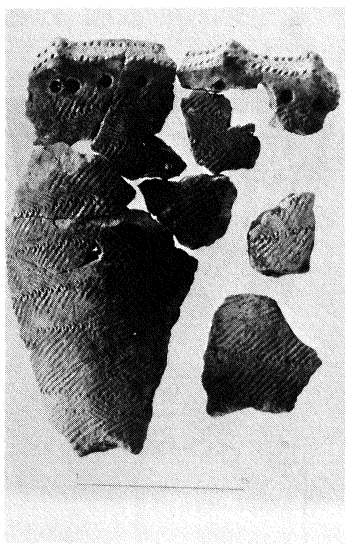
円筒上層式や北筒式土器が、その分布範囲をせまめはめるころ、石狩・苫小牧低地帯から南部にかけて貼付帯を持った土器群が盛行し始める。この土器は一般に余市式土器ないし、大谷地式土器とよばれるもので、深鉢円筒型の



植苗貝塚出土の円筒下層式土器
と植苗式（仮称）土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



坊主山遺跡出土の余市式土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



植村遺跡の墳墓内に副葬されていた北筒式土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

器形に口縁部に平行に幅のひろい貼付帯が施されるもので、坊主山出土のもののように、貼付帯に縄文の圧痕を施したもののや十字状に貼付けたものなどがある。

苫小牧市内から発見されている遺跡で、円筒上層式土器を出土する遺跡は、タブコブ、緑ヶ丘B、植苗橋下遺跡を中心に大島遺跡や高丘遺跡など、北筒式土器は、タブコブ、大曲、大島、御前水、植村、植苗橋下遺跡など断片的に。さらに余市式土器では、タブコブ、植村、大曲、大島、坊主山、綱木、美々坂、久米井、美々橋、高丘など遺物の量も多くなると同時に遺跡の数、規模なども多くなるようである。

後期になると、縄文式土器文化の中に大きな一つの変化があらわれてくる。

すなわち、従来までの土器は、その機能を容器としてのみのものであり、煮沸用か、あるいは貯蔵用かの二種類のみであった。また、その製作手法としては、ほとんどが粘土の紐を巻きあげて行く巻きあげ法か、粘土の輪を何段も積み上げて行く輪積法であったが、後期になると、縄文文化の中に祭祀的要素や原始的な階級制の発生を示すよう



植苗橋下遺跡出土の円筒上層式土器拓影〔苫小牧市青少年センター蔵〕

な遺物（石剣や石棒）があらわれるようになり、土器においても、形に注口土器や香炉型土器が出現し器形の上に変化がでてくるばかりではなく、小型化の傾向にある。さらに従来の煮沸、貯蔵用に加え祭祠的色彩の強いものや、一般的な容器として使用するものでも、精製と粗製土器とにわかれ、特に文様の変化や彩色したものなどもあらわれる。これはまた、この時代に特に多くなる墳墓遺跡ともかわりが強くなるようである。

縄文後期の土器形式については、先学諸氏によつて種々と型式設定されているが、ここでは、石狩―苫小牧低地帯を主とする土器を中心に述べてみる。

後期初頭に位置するものとしては、まず、余市式土器の貼付帯が消失し、変わつて沈線文と新しく発生した磨消手法による土器がある。これは、入江式、涌元式などとよばれているもので、器形は朝顔形に近い深鉢形が多く、口縁は水平、波状、山形を呈し、底部は平底である。器面全体に斜行縄文を施し、その上から沈線により、直線文、曲線文、入組文、渦巻文などを施している。

苫小牧市内からは断片的ではあるが、タフコフ、植村、大島遺跡などから出土している。

次に編年されるものは、二―三本の沈線文を主体に蛇行文、渦巻文などを縄文した器面や器壁をみがいた上に施す土器群で、東北地方の大湯式土器に対比され、胆振西部の入江貝塚や室蘭の鷺別貝塚などを標式とする土器形式であり、この期の土器に対比される遺物としては非常に少ないが、他型式の土器とともにタフコフ、糸井Bなどから発見されている。

第三期に位置するものとして、野幌式、手稲式などとよばれている土器のグループがある。これは口縁と平行する多数の沈線とその沈線を区切る短い縦の沈線文と雲形文様の沈線文を特徴とするもので、器形では朝顔型にひらいた



苦小牧工業港内出土の御殿山式注口土器
〔苦小牧市青少年センター蔵〕

口縁部を持つ甕や、台付浅鉢、鉢なども多くなってくる。

この期に相当する遺物を出土の市内の遺跡としては、比較的まとまった資料として大島遺跡、断片的なものとしては、猿子、植村遺跡などから出土している。

第四に位置するものに、長沼町幌内・堂林遺跡を標式とする堂林式土器がある。

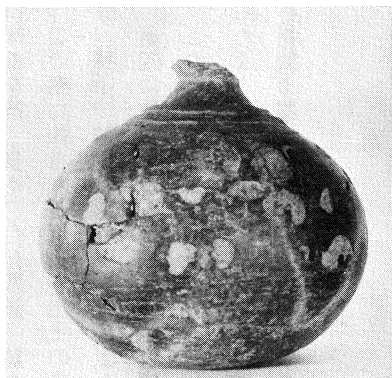
この土器群は、内壁から突き刺した突瘤文と三叉文を中心とするもので、前期の野幌式土器の口縁部に突瘤文を施したようなものと、沈線文が主体で、三叉文や雲形文などを施したものがあがある。これらの土器はあきらかに精製土器と粗製土器とにわかれ、しかもこの時期から急に注口土器が多くなる。

市内から発見されている堂林式土器は、植苗橋下遺跡から比較的まとまって出土している。また、高丘遺跡、大島遺跡などからも突瘤文土器を施文したものが断片的に出土している。

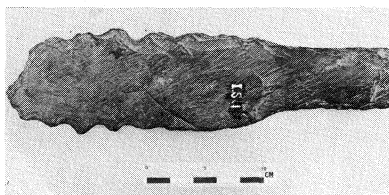
最後に位置する土器群は静内町目名御殿山遺跡を標準遺跡とする御殿山式土器で、この土器群は、磨消手法による三叉文と突瘤文を主体とするものである。器形としては、深鉢と浅鉢が主体で、地文には斜行ないし、羽状縄文を施している。この土器群の末期には、器形はより小型化し、流動的な曲線文や貼瘤文なども施されている。

市内からは、植村、大島、中野（苦小牧工業港内）、猿子、高丘、糸井B遺跡など、比較的多くの遺跡から発見されている。

特に苦小牧工業港内の浚渫工事中に発見された注口土器は、口縁部が一



タブコブ遺跡の墳墓に副葬されていた亀ヶ岡式系土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



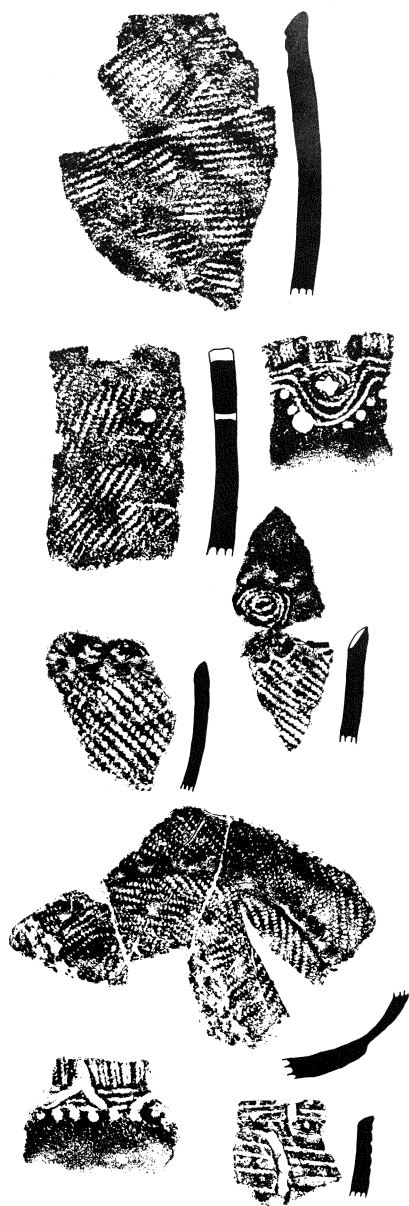
タブコブ遺跡出土の棍棒状石器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

部消失しているものの、地文として、全面に斜縄文を施し、沈線によって三叉文を施文し、短い注口部が取りつけられ、注口部の下には、小さな二個の玉状の作り出しがあり、男性の象徴を模しているようである。

以上、縄文時代後期の土器群について、古い順に述べてきたが、これらの土器群に伴出する石器の組合わせは、早期以来大きな変化はない。しかし、先にも述べたように、当地方からは発見されていないが、静内町御殿山、千歳市キウス遺跡などから発見されている両頭の石棒など非常に特殊な遺物が出土している。

また、時期は不明であるが、タブコブ遺跡からは、扁平な緑泥片岩を上下に歯状の刃部を作り出し柄を施した棍棒状の石器が一点出土している。これは古く大正時代ころに発見されたもので、苫小牧町史にも写真が掲載されているが、類例は赤平市奈江沢遺跡から報告されているが、これなども、一種の石剣、石棒のような用途として使用されたものと思われる。

今から約三、〇〇〇年前に始まる縄文時代晩期は、第一章、第三節、概説の項で述べたごとくであるが、当地方から出土している晩期の土器群としては、タブコブ、植村A、大曲、北炭山林、大島、亀谷、坊主山、戦車塚、猿子、大槻、糸井I、高丘、勇弘、綱木、沼ノ端、糸井B、緑



タブコブ遺跡出土のタブコブ式土器拓影
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

ケ丘B、柏原1、柏原2、柏原3、柏原5、静川3遺跡など非常に多くの遺跡から遺物が出土している。これらの遺跡から出土している土器で、主体を占めるものは、爪型文による上ノ国式土器のグループで、爪型文と刺突文によるたぐさんの組合わせがある。

次に多いのが、口唇部内壁に擦糸圧痕ないし擦糸の条線を施すタンネトール式土器のグループである。

そして、これらの土器群に伴い亀ヶ岡式系の大洞C₁〜A式系統のものが若干伴って発見されている。

タブコブ遺跡では、無文で失を塗った大洞C₁式の細口壺形土器が墳墓から発見されているほか、工字文を施した壺形土器にベニガラを塗ったものや、沈線に同じくベニガラで着色したものが、タンネトール式（タブコブ式）土器とともに出土している。

また、綱木遺跡では、大腿骨文や雲形文を施した大洞C₁式土器とともに、爪型文のグループ、刺突文と沈線文のグループ、斜行縄文のみのグループ、撚糸庄痕文のグループなどに大別できる土器群が出土している。

さらに器形としては深鉢、浅鉢状のものから小判型を呈した底部が多く発見され、舟型を呈する土器も出土している。同じような土器は大島遺跡や糸井A遺跡などからも発見されているほか、この期のものとして、厚真町からは双口土器も出土している。

以上に述べた上ノ国式土器やタンネットL式土器に伴う石器群としては、綱木遺跡から良好な資料が得られている。綱木遺跡の資料にもとづけば、磨製石器としては、まず、磨製石斧があり、打製としては撓形をした打製石斧、敲石、長短軸挟入の石錘、チョッパーなどがあるほか、断面円型の石棒状の石器で両端を鋭利に磨滅させた特殊なものが一点出土している。

剥片石器としては、有柄石鏃、柳葉型石鏃、石錐、両頭石槍、石小刀、各種の搔器など、縄文早期の石器組合わせと大差のないものである。しかし、使用している石材は黒曜石、チャート、頁岩など非常にバラエティーに富んでいるほか、各々の石器の製作技術は早、前期のものに比べ、非常に雑に作っているようである。また特殊な遺物としては大槻遺跡や大沢遺跡から発見されているものに矢柄研磨器がある。これは、普通縄文早期に多いようであるが、石狩・苫小牧低地帯では晩期から多いようである。型は楕円型に整形した硬い火山礫の中央に、一本の溝があるもので、これで弓の矢柄を研磨したものだと思われる、類例は千歳市のママチ遺跡などから発見されている。このほか、道南地方の大洞A式土器に多く伴出する石刀は、今のところ、当地方からは発見されていない。

しかし、今後の調査如何によつては、新しい遺物や遺構が多数発見されるものと思われる。

二、住居と集落

住居とは人の建てた住む家であり、人の住む建物は家と呼ばれ、より厳密には住宅という語がある。

縄文時代の住居は床の位置が地表面から、より低いか同じであるかによって竪穴住居と平地住居とに分けられる。

また、旧石器時代以来、使用されてきている洞穴住居も、縄文時代の早期をはじめ、各時期にわたって使用されている重要な住居である。しかし、縄文時代を通じ、その中心となる住居は竪穴住居で、全国各地の遺跡から多数発見されているほか、苫小牧地方でも断片的に報告されている。

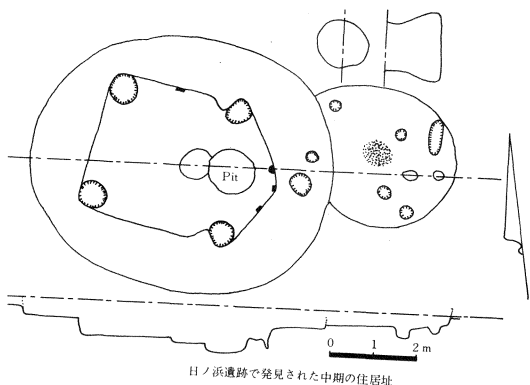
竪穴住居は、地面に五〇センチメートル―一メートルの穴を掘り、その上に屋根をかけた原始的な住居であるが、地面に掘る穴の形より、円形住居、方形住居とに分けられる。

そのため、円形住居であれば、炉を中心に柱が円形に並ぶため円錐形の屋根となり、方形では、長軸にそって柱穴が並ぶため、木材は合掌式に組み合わされ、屋根は切妻となるのである。さらに方形プランの住居の場合、四隅がきちんと角張るものが少なく、多少丸味を帯びているため、古墳時代や擦文時代の方形住居址に比べ、隅丸方形住居とよんでいる。

縄文時代の竪穴住居は地域差、時代差などにより大きな変化があるし、土器型式の分布圏と密接な関係がありそうである。

次に各期の住居址についての概略をのべれば、早期では、白老町虎杖浜遺跡などに見られるように主として円型のプランで、炉は住居内にはもたず、住居址外に炉穴（ファイアピット）として残されている。

前期は柳館遺跡から知られているように早期同様円型のプランであるが、炉は住居址内部に設けられるようになる。



日ノ浜遺跡で発見された中期の住居址『日本の考古学Ⅱ』縄文時代 北海道 吉崎昌一氏より]

る。

柳館遺跡から発見された住居址は二基で、一号住居址は短径四メートル、長径六メートルほどの楕円型を呈するものでローム面を約二〇センチメートルほど掘込み、硬い床面となっていた。完掘をしていないため炉、柱穴の位置など不明であった。二号住居は四分の一ほどの部分発掘であったが、一号住居同様、楕円型プランの西側に直径七〇センチメートルほどの貯蔵穴らしいピットと、住居址内部に柱穴一本を確認することができるとができる。

中期になると、タフコフ遺跡や門別町富川中沢遺跡から知られるようにプランは円型が主体であるようであるが、楕円に近いようなものも多い。また、道南地方では竪穴内部に五角型を呈する、一段低い掘込みを持った住居址が多く、広く新潟県地方にまで類例を見ることができると持った住居が存在するものと思われる。また、関東地方ではプラン全面に石

うであるし、苫小牧より石狩低地帯にこのような住居が存在するものと思われる。また、関東地方ではプラン全面に石を敷いた敷石住居もこの期に多い。

後期ではエリモ遺跡などで、円型プランの住居址が扇谷昌康教諭などによって調査されているが、全道的に少なく、当地方からその例を見ない。しかし、高丘遺跡などの調査によれば、包含地内に数カ所の大きな炉址状の遺構があり平地住居ないし、一時的なキャンプの跡と思われるものが発見されている。

晩期も後期同様、住居址発掘の例は少なくわずかに道内上ノ国遺跡から円型プランの住居址が知られているのみで

ある。目下のところ、苫小牧市からの晩期の住居址の発見例はないが、綱木遺跡など今後発見される可能性は充分あると思われる。

以上各期の住居址の概略を述べてきたが、北海道の場合、圧倒的に円型プランを持つものが多いのである。苫小牧地方もそうであるが、今までの北海道での発掘調査で、遺跡の全面積を調査するというようなことがなかったためと後晩期では墳墓群は非常に多いが住居址は非常に少ないという遺跡の性格のちがいのバラつきなどから、このような結果がでたと思われる。

今後は、巨大な工業開発や道路・空港などの大規模な発掘調査が行われるようになるため、従来のようなただ単なる一住居址の調査でなく、大きな集落跡の発掘調査も行われるようになるであろう。

特に当市の場合、苫小牧東部工業地帯の開発をひかえ、当地区の予備調査をしたところ、静川台地の南端部などに集中している大遺跡などを調査したならば、必ずや、多数の住居址が発見され、古代の村の姿が明らかにされることと思う。

三、狩猟と漁労

縄文時代人の食生活を物語る資料としては貝塚があげられる。

貝塚は、先住民が食べた残滓や使用した道具、容器などを一カ所に捨てた場所で、ゴミ捨場、墓地、祭礼の場としても使用された場所らしく住居の斜面、崖などに形成されているもので、関東地方では環状や馬蹄型状に形成された姥山貝塚や加曽利貝塚などが有名であり、道内では時代は新しいが網走のモヨロ貝塚がある。

そのため、当時の食生活を解明するためには欠かすことのできない重要な遺跡であるとともに、多量の貝殻が推積

されているため、その中に捨てられた骨、角、歯牙などで作った道具類や装身具類が炭酸カルシウムのため良く保存され、住居址や土壙墓などで得られない貴重な自然資料が得られるところである。

縄文時代人が自分達の食糧を狩猟、漁労や草木の実、種などの採集でまかなった生活の状態にあったことは、多くの遺跡から発見される石鏃、槍先、石斧などから知られるし、陸獣、海獣、魚、鳥、貝などを捕獲、採集していたことも貝塚から出土する骨や貝殻、炭化した木の実などから理解することができる。

縄文時代は貝塚が多数形成された時代で、特に道内では噴火湾や道東地方に多いようである。

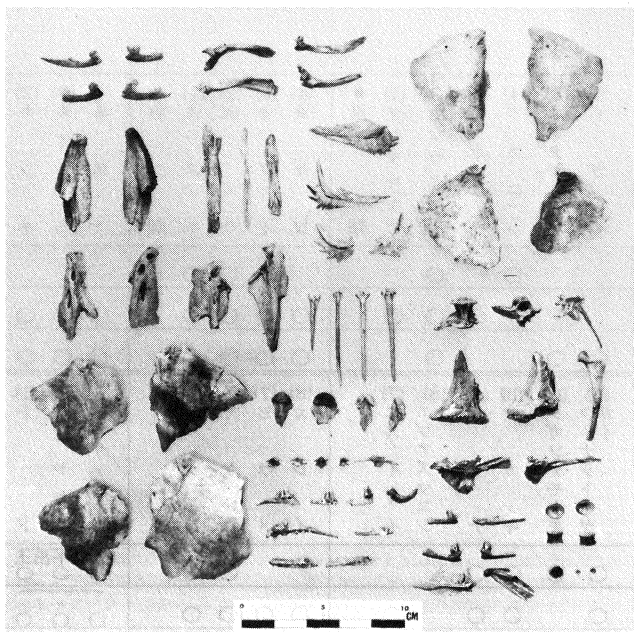
当地方にも、小規模ではあるが、植苗、緑星の里内、植苗貝塚、東部地区の柳館貝塚などが知られ、特に千歳市的美々にある美々貝塚は、道内に存在する貝塚としては一番内陸部に位置するものとして有名である。

ここでは、これら三貝塚の出土品を比較しながら当時の人々の食生活とその獲得の方法について述べて見る。

これらの貝塚からの出土した自然遺物は、発掘面積により多少の違いがあるが、おおよそ縄文時代人の食生活内容を現していると思われる。これら以外にも、まだ特殊なものがあるが、貝塚の形成された地域の海の様子により外洋性、岩礁性、内湾性などの場合によって貝塚に含まれるものは違ってきている。因にC¹⁴年代測定法の結果によれば美々貝塚は三八〇〇±一四〇年、植苗貝塚は五六四〇±一〇〇年という数値が得られているし、柳館貝塚も、これら美々、植苗貝塚の間に入る年代と思われる。

次にこれらの食糧資源の獲得方法であるが、陸獣の捕獲方法としては、弓矢、仕掛弓、投げ槍、手槍、棍棒、わな、落し穴などがあつと思われる。弓矢の使用については、古く石刃鏃の渡来以降であり、各種石鏃の出土と本州各地の泥炭遺跡から出土する木製弓の存在などから充分裏付けられるし、また、鹿、猪等の骨にささった石鏃の出土などからもうなずける。石鏃の有柄、無柄、柳葉型、二等辺三角形状と大きく四通りに区分されるが、矢との基部には往々に

(6)イ ガ イ	(5)エ ゾ タ マ キ ガ イ	(4)ア カ ニ シ	(3)イ ボ ニ シ	(2)ホ ソ ウ ミ ニ ナ	(1)ク ロ タ マ キ ビ 類	●貝類	(4)カ サ ゴ イ ラ キ 類	(3)ウ グ	(2)ボ ズ	(1)ス ズ 類	●魚類	(4)ネ ズ ミ	(3)オ オ カ ミ	(2)キ ツ ネ	(1)シ カ 獣類	●哺乳類	種 類	
		○		○					○	○					○		美々	出土状況
				○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		植苗	
○	○			○			○	○	○	○		○	○	○	○		柳館	
(12)ガ ウ ネ ナ シ ト マ ヤ	(11)タ ガ ソ デ モ ド キ	(10)マ ガ キ	(9)ホ タ テ	(8)キ エ ゾ ア ズ マ ニ シ	(7)エ ゾ イ ガ イ		(8)カ レ イ	(7)ヒ ラ	(6)サ ケ 類	(5)ニ シ ン		(3)ア ザ ラ シ	(2)オ ツ セ イ	(1)ト ド 獣類	(5)イ ヌ		種 類	
○	○	○	○						○			骨若干出土 ○ ○ ○ ○ ○			○		美々	出土状況
○		○	○		○		○	○	○	○		○	○	○			植苗	
○		○		○					○	○		○	○	○			柳館	
(18)オ オ ノ ガ イ	(17)ヤ マ ト シ ジ ミ	(16)ウ チ ム ラ サ キ	(15)コ ダ マ ガ イ	(14)ア サ リ	(13)ハ マ グ リ		(12)ブ リ	(11)ト ビ エ リ	(10)エ イ	(9)フ グ		(4)カ モ 類	(1)ワ （ヒメウ） シ	(2)ウ ス	(1)カ ラ ス 類	鳥類	種 類	
○	○	○		○													美々	出土状況
○	○		○	○	○		○		○			○	○	○	○		植苗	
	○			○			○	○	○	○		○	○	○			柳館	
(23)の ケ セル マ イ マ イ	(22)マ イ マ イ の 仲 間	(21)ヌ マ コ ダ キ ガ イ	(20)エ ゾ イ ソ シ ジ ミ	(19)ウ バ ガ イ				(13)サ メ				(1)ヘ ビ 類	爬虫類	(7)オ オ ハ ク チ ヨ ウ	(6)タ ン チ ヨ ウ	(5)ア ホ ウ ド リ		種 類
				○													美々	出土状況
	○	○			○					○		○		○	○	○	植苗	
	○	○	○	○	○				○							○	柳館	



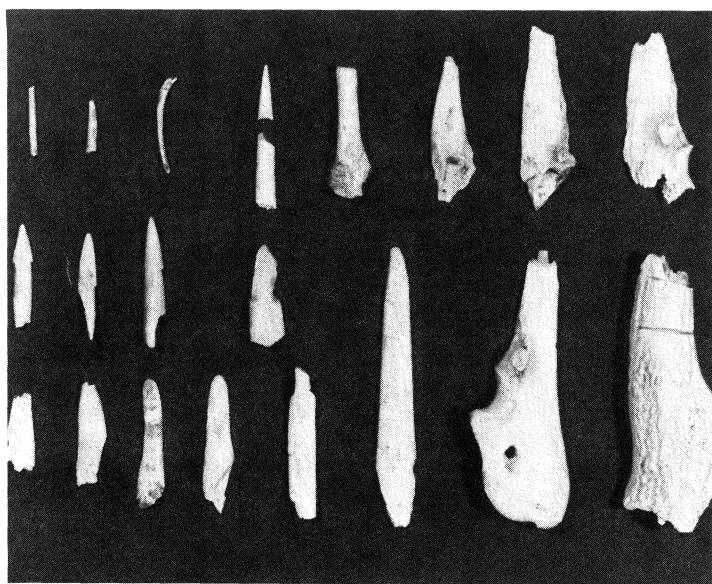
植苗貝塚出土の各種魚骨類
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

して天然アスファルト（ピッチ）が塗られ補強されている。さらに有肩、有舌、柳葉型等の形に区分される石槍は、旧石器時代以来の主要な狩猟方法用具としてその存在も大きかったと思う。特にスピードの早い大型動物に対しては、弓矢よりも投げ槍は効果が強く、わなとか落とし穴などにはまった動物に対しては、棍棒や手槍が効果的であつたと思われる。

また、これらの石製品のほかにも、加工のしやすい骨や角で作った銚や刺器なども大いに使用されたと思う。植苗貝塚から出土した銚先には、内側が溝が掘られアイヌ民族のキテのように、すでにこの時代から毒物が使用されていた事を裏付けるような資料もあるし、柳館貝塚からはエイの毒針を利用した刺器も発見されている。

これらの狩猟具によって捕獲された獲物は先の表で述べたとおりであるが、何といつても一番多かったのはエゾシカで、出土する陸獣の九割を占めている。また、キツネとかオオカミなどは食糧というよりはむしろ、衣服の素材として捕獲されるものと思われる。

陸獣の捕獲でわすれることのできないことは家犬の使用である。すでに縄文時代の初期から犬は飼育され、狩の重



植苗貝塚出土の骨角器類〔苫小牧市青少年センター蔵〕

要な伴侶として貝塚などから手厚く葬られて発見されている。

陸獣のほか、陸産の食糧資源として鳥類があげられる。特に河川湖沼と海岸線にめぐまれた苫小牧地方は、古来より鳥類の飛来、棲息地として今日でも多数の野鳥が四季を通じて見ることができる。

植苗貝塚や柳館貝塚を形成した人々もこれらの鳥類を見のがすはずはなく、重要な食糧資源と骨、羽毛などの利用のために大いに捕獲している。特にアホウドリ、ハクチヨウ、タンチヨウヅルなど肉の多い鳥類がその対象となつて、弓矢、投げ玉、わなどで捕獲したと思われるが、飛来時期や繁殖期などでは数も多いことから一種類の鳥を容易に捕獲出来たものと思われる。鳥類の骨は、中が空洞になっているため、外部に彫刻などがほどこされ縫針のケースとして使用されているほか、大型鳥類の脛骨は刺器や骨鋸として利用されている。鳥類の中で注目されているものとしては種は不明であるが猛禽類のワシの仲間の足の骨が、植苗貝塚で一カ所にまとめられて発見されている。これなども、もちろん食糧となり得ると思われるが、その他、祭祀的な意味あいから意識的に捕獲、埋葬したものと考えられる。

次に漁労であるが、これは狩猟につぐ縄文時代人の重要な労働活動で、内陸奥深くまで海が入り込んでいた苦小牧地方では、とりわけ大きな役割を持っていたと思われる。

縄文時代における漁撈は、大きく三つに分けることができる。すなわち、釣、刺突、網である。

また、河川、湖沼などではこの三つのほかに梁やドウ、ウケなどによる漁法もあったであろうが、それらは今に残されていない。第一の釣は、いうまでもなく釣針を使用して魚を取るもので、この釣針は時代、地域、その対象魚によつて形態を異にしている。今のところ、苦小牧市内の貝塚からは、釣針が発見されておらず、釣よりはむしろ、次に述べる突き刺して魚を獲る方が量的に多かったのではないかと考えられる。

魚を突き刺す道具としては銚とヤスがある。普通獲物に投げつけて突き刺すものを銚とよび、柄をもったまま突き刺すものをヤスとよんでいる。

植苗貝塚では、先端部にかえしがつき、基部は若干広がり、反った感じの小型銚先が三点ほど出土している。これらの銚先の内側は毒をぬりつけるために設けたような細い溝のついたものが出土しているし、時代が下り後、晩期になると、紐を結ぶための突起や孔をもった離頭銚も出現し、近代アイヌのキテへと連なるのである。

刺突具として統一されるヤス類は、柳館貝塚においては大型の鹿角を使用したと思われるものが出土しているほか、植苗貝塚では、鹿の足の骨を割ってナイフ状に加工した比較的大型のもの、先端部がペン先状になり、一方にかたむいている小型のものや断面がO型を呈し、縫針を思わせるような刺器類も発見され、出土したスズキの主鰓蓋骨の中には、明らかにヤスで刺したと思われる痕も付されている。

最後の網漁は釣やヤスが単独の獲物を取るのに比べ規模も大きく、集団で行う漁法である。

縄文時代における網の存在は、土器の底部や胎土の厚い繊維土器の内部に網目や網そのものの一部があることから

充分裏付けられているが、遺跡から多量に出土する石錘からも充分うなずけられる。網を浮かべるフrootとして軽い木や当地方には無尽蔵にある軽石が使用され、おもりに石錘が多量に使用された。

石錘には扁平でおおむね、卵形ないし小判型をした河原礫の長軸方向か短軸方向を打欠いたものがほとんどで、外洋性の貝塚では、比較的大型で重量のあるもの、また内湾性のところでは、小型で軽量なものを使用している。

しかし美沢にある大島遺跡では縄文時代早期末から前期にかけての時期から出土した石錘は、長短軸、四方に欠入がある大型のもので、しかも一カ所に三一個もかたまつて出土し、全体では二〇〇個以上が出土した。また大島遺跡における石錘の平均重量は四五〇グラムであった。

以上漁労について述べたが、貝類の採集は干潮時に女性や子供の仕事として遠浅の海辺で、毎日行われたものと思う。

最後に海獣狩りであるが、その対象とするものはトド、オットセイ、アザラシ、各種の小型鯨類、さらにはマグロ類やサメなどの大型魚類である。

海獣狩りで欠かすことのできない用具は、舟である。丸木舟は、すでに縄文時代早期から存在していたことは、函館市春日町遺跡から発見された石にかかれた原始的な絵画から知ることができるし、後期には千葉県検見川遺跡のように現物が発見されているところもある。また推進具の櫂や棹なども現在と変わらないものが発見されている。

さてオットセイやアザラシ狩りであるが、先に述べた離頭銛やさらに石槍よりも基部の太い石銛などに紐をつけ、獲物に撃ち込んだものと思われる。しかし、地上と違い死んだ獲物は、とどまることなく、流されたり、海底へ沈んでしまうため、動物の胃を乾燥させて浮きに使用したり、刺さった銛に紐をつけることによって銛先が体内で半回転してぬけなくなるもの、さらに尾部が長くなり、反りのついた燕形銛頭なども東北地方から北海道にかけて多く分布

している。これなども離頭銛の一種でさらに改良された型となったものである。

四、衣服と装身具

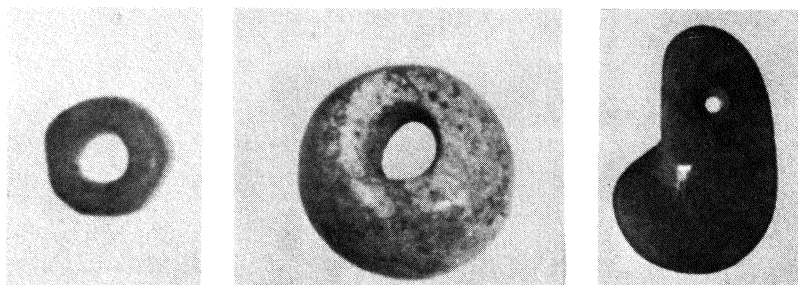
縄文時代人の衣服については、現存するものもなく、わずかに残された土偶、岩偶などによって類推するほか、比較的最近まで原始的な生活を送っていたアイヌ民族などの衣服などを考慮し、民族学的な面から考察するより方法はない。

それらをふまえて考えるに、縄文時代人はアイヌ民族同様、鳥獣魚皮などを最大に利用し、暫時繊維の利用へと発達したものと思われる。

すなわち、苦小牧地方では、植苗、柳館貝塚等から骨製の目のついた縫針が出土していることから、鹿皮や海獣などの皮革を、動物の腱などで綴合せ、貫頭衣もしくは、アヌラック状の衣服を身につけていたと思われる。

しかし、縄文時代も終末ころになると、斜里町、朱円墳墓群からアツシ状の繊維が出土していることなどから、弥生時代以降の土製ないし石製紡錘車を使用し、いざり機を使用する本格的な機織以前に繊維を利用した布が存在していたと思われる。また、被りもの、履物などにしても、獣皮、魚皮などを利用した靴、サンダル状のものが存在したと思われる。衣服に関連して出土してくるものに装身具がある。

装身具の歴史については、すでに、北京原人等にも認められるため、人類発生の段階から存在したものと思われるが、道内では縄文時代の早期からすでに発見確認されている。装身具類を大別すれば、首飾、耳飾、腕輪、腰飾などで、その材質も石、土、角、骨、歯、牙、木などがあり、石の場合は翡翠、琥珀、瑪瑙、蛇紋岩など青味を帯びた石



市内各遺跡出土の玉類 [苫小牧市青少年センター蔵]

材が好んで使用されているようである。装身具がどのような意味で身体に付されたかは別として、頭には、木、骨製の櫛や朱塗りの髪針（ヘアピン）、耳には土製の滑車形耳飾（耳栓）や珠状耳飾など、首には垂具として、翡翠や蛇紋岩などの鯉節型垂飾が丸玉平玉、勾玉などを連ねた首輪などをつけ、手には貝製の腕輪をし、腰には鹿角や土製の腰飾をつけている。しかしこれら全部をつけた人はほとんどなく、どれか一つを装身具として使用していたようである。

苫小牧市内からは、タブコブ遺跡から、中期の円筒上層式土器に伴って、扁平な勾玉状の垂具、植村遺跡からは、橄欖岩製の切子玉が晩期の土器に伴って出土しているほか、大島遺跡からは、後期の土器に伴い、粘板岩製の半月形状の垂具の未完成品、土製の耳飾りの破片が各一点ずつ、出土している。

また、日胆地方で注目される装身具としては、静内町御殿山遺跡の墳墓内から朱塗りの櫛が数枚発見されているほか、滑車型の耳飾りなども発見されている。

五、信仰と墳墓

未開民族における信仰は、自然崇拜や共感呪術などを重視する傾向が強いところから、縄文時代における信仰も、そのようなものであったろうと推測されるし、近世のアイヌ民族もそうであった。

信仰という精神的事象の存在を裏づける遺物や遺跡は土偶、獣面把手のクマやヘビ

のモチーフ、岩偶、土版、岩版、石棒、石剣、石刀などや洞窟壁面、環状石籬（ストーンサークル）、環状土籬や各種の墳墓などが今に残されているが、これらは死と密接な関係にあり、死体の埋葬法という風習とともに時代、地域によってそれぞれ独特なものがある。

ここでは、現在までに知られている道内における埋葬方法と市内から発見されている墳墓について述べて見る。

道内各地からはたくさんの方墳遺跡が発掘調査され、各種の方墳形態が報告されているが、それらは概ね、五つに区分することができる。

(一)配石等を持たない土壙墓 極く一般的なもので、平地に円型ないし楕円型の穴を掘りその中に死体を埋葬するもので、死体の体位で大きく、屈葬と伸展葬にわけられ、さらに体位の向きにより側臥、仰臥、俯臥、坐位屈葬などにわけられる。これらは以下に述べる墳墓形態においても死体の埋葬方法は同じである。貝塚以外では人骨の出土する例が少なく、苦小牧市内からは、今のところ完全な縄文時代人の人骨は発見されていない。

(二)盛土を持つもの 死体を埋葬した後、その部分を特に高く盛土をするもので、虻田町入江貝塚などで知られている。

(三)配石を有するもの 墓壙内に死体を埋葬した後、その墓壙の上面にないし周辺に立石をめぐらすストーン・サークル状のもの、小樽・三笠山、中央に石敷きの墓壇を持つもの函館市、日吉、墓壙の上に積石（ケルン）を設ける静内町御殿山などのほか、立石を中央に設け寝石を放射状に配置した秋田県大湯遺跡に代表されるようなものなど、非常にバラエティーに富んでいる。

(四)環状土籬 これは環状に土手をめぐらし、中に土壙墓や配石をとまなう墓壙を幾つか持つもので、千歳市のキウス遺跡などが有名である。

(五)土壙以外のものとしては、死体に大きな石をのせている包石葬や早来町安平・緑ヶ丘遺跡から報告されている壺棺葬などがある。また、洗骨葬や火葬、風葬や鳥葬などの特殊な葬制も他では知られているが、具体的な資料は今のところない。

以上、道内各地における縄文時代の墳墓について述べてきたが、苫小牧市内の遺跡からはタプコブ、植村、大島、綱木遺跡の四カ所から縄文時代の墳墓が確認されている。次にこれらの遺跡の墳墓について述べてみよう。なおこの四カ所以外にも、出土する遺物などから、墳墓遺跡ではないかという可能性のある遺跡もあるが、ここでは一応、正式な発掘調査によって確認された墳墓についてのみ述べることにしよう。

昭和四十年十月に北海道大学、大場利夫博士によって発掘調査された第四次のタプコブ遺跡から三基の土壙墓が発見されている。

第一号墳墓は長軸を南北に持ち、長径五四センチメートル、短径四八センチメートル、深さ五〇センチメートル以上の土壙墓で、人骨は腐敗し、わずかに管状骨と思われるものの痕跡が認められ、副葬品として円筒上層式ないし、北筒式土器と思われる土器の破片二点が得られたそうである。

第二号墳墓は墓壙のみであったが、第三号墳墓は、東西に長軸を持ち、長径九〇センチメートル、短径八〇センチメートルのほぼ円形を呈する土壙で深さは八〇センチメートルあり、墓壙の南東壁に、頭部(歯のエナメル質など)、骨盤、脊椎その他の人骨が認められたようであるが、副葬品の埋葬はなかったようである。

昭和四十二年八月に調査された大島遺跡では、四基の墳墓が発見されている。

これらは、ほとんどが円形を呈するものである。その中の三号墳墓は直径一五〇センチメートル、深さ二〇センチメートルと底は浅いが、長さ一三センチメートルの緑泥片岩製の完形磨製石斧、石小刀などが副葬品として埋葬されていた。

時期は、二号墳墓に副葬されていた復元可能土器から縄文時代後期末ないし晩期の所産と思われる。

昭和四十四年八月に発掘調査した植村遺跡では縄文前中期の墳墓が二基、晩期の墳墓七基で計九基の墳墓が発見された。

円筒下層式土器や北筒式土器を副葬品として埋葬していた墳墓は、タブコブ遺跡の墳墓群と大差はないが、縄文晩期の所産と思われる墓壙の中に、二―三特殊なものがあつた。その一つは第二号墳墓で、墓壙の入口部は最大径六〇センチメートル、深さは一〇二センチメートルであつたが、墳墓の最大部は胴部にあり、八五センチメートルもの直径がある袋状の土壙であつた。副葬品としては、黒曜石製の槍先一点と剝片、破片などが若干あり、東壁に少量の骨らしきものが認められている。

第三号墳墓は直径一〇一センチメートル、深さ八〇センチメートルで、土壇の上判部二〇センチメートル位のところに巾一〇センチメートル、奥行七―八センチメートルの溝が施されていた。このような溝は第五号墳墓で認められていたが、静内町御殿山遺跡の墳墓にも存在している。副葬品として墓壙上面に晩期の精製土器の破片、さらに敲石、搔器、剝片、削片などがあつた。

最後に昭和四十六年八月に調査した綱木遺跡の墳墓について述べておく。

綱木遺跡からは、多数のピットが発見されているが、確実に墳墓と断定できるものは少ないが、E―9区から発見された墳墓は、一辺一〇〇センチメートルほどを呈する方形のプランの中でさらに、その対角線上に細長いピットがあり磨製石斧、石鏃、槍先（両面加工を施し槍先が前後に作つてある両頭石槍）搔器、台石などが副葬しており、若干のベニガラなども採集することができた。また、当遺跡からは、大きな舟ないしイガイを模したような土器、本州ないし道南地方から移入されたと思う亀ヶ岡の朱うるしや黒うるしを塗った土器、苦小牧地方としては珍しい打製石斧、さらに棒状の河

原石の尖端部に加工を施したもの、石冠状の石製品、さらに玉随製の槍先など特殊な遺物を多く出土している。

〈主要参考文献〉

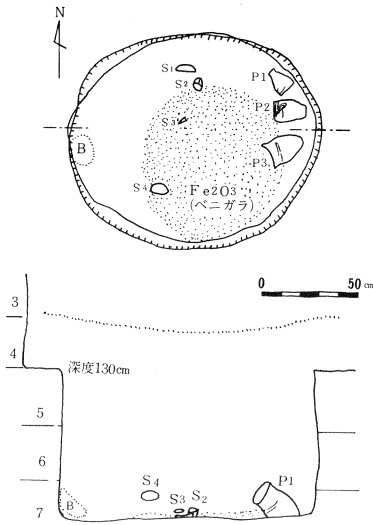
- 『日本の考古学Ⅱ縄文時代』 昭和四十年 河出書房
『長沼町史』 昭和三十九年 長沼町
野村崇 『空知の文化財』 第一集埋蔵文化財編 昭和四十四年 空知支庁
大場利夫外 『上ノ国遺跡』 昭和三十六年 上ノ国村教育委員会
大場利夫 『北海道』 「新版日本考古学講座」 昭和四十四年 雄山閣
重松和男 『北海道の古墳墓について』 「北方文化研究報告6」 昭和四十七年 北海道大学
大場利夫外 『千歳遺跡』 昭和四十三年 千歳市教育委員会
河野広道、藤本英夫 『御殿山墳墓群について』 「考古学雑誌四六―四」 昭和三十六年 日本考古学会
佐藤一夫 『苫小牧市美沢植村遺跡調査報告』 「郷土の研究3」 昭和四十六年 苫小牧郷土文化研究会

第四節 続縄文時代の遺跡と遺物

続縄文文化の成立やその概要については第一章、第三節で述べたとおりであるが、ここでは前、中、後期の三期区別に従って遺跡と遺物について述べる。

前期の恵山期は、縄文文化の強い伝統と東北地方の弥生式土器の影響を受けて成立した恵山式土器を中心とする時期で、この期の主な遺跡としては、貝塚、墳墓などがあげられ、住居址はあまり顕著でない。

道南地方の噴火湾を中心に分布する恵山期の遺跡では、標準遺跡である恵山貝塚がそうであるように海岸部に立地



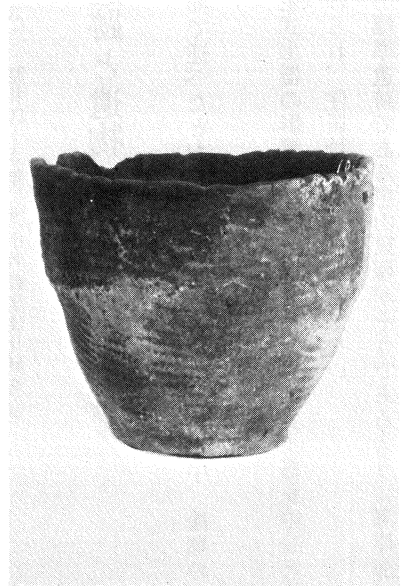
タブコブ遺跡発見の墳墓実測図
(小田憲作による)



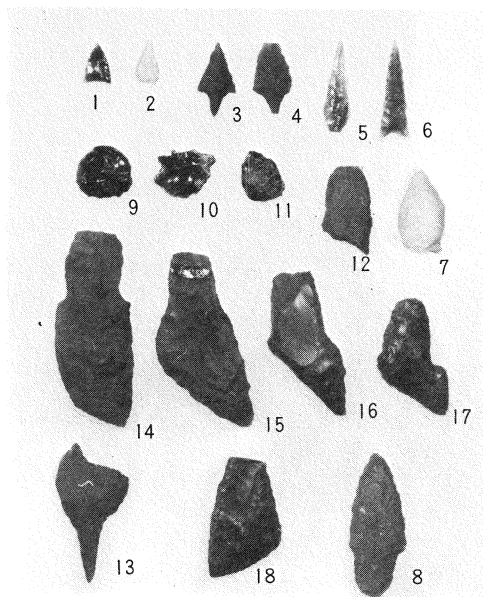
出土状況〔市立苫小牧図書館蔵〕



同墳墓出土の深鉢形土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



同墳墓出土の鉢型土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



恵山式土器に伴う石器 1～6 石鏃 7.8 石槍 9.10. 11 撚器 12.13 石錐 14～18 石小刀
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

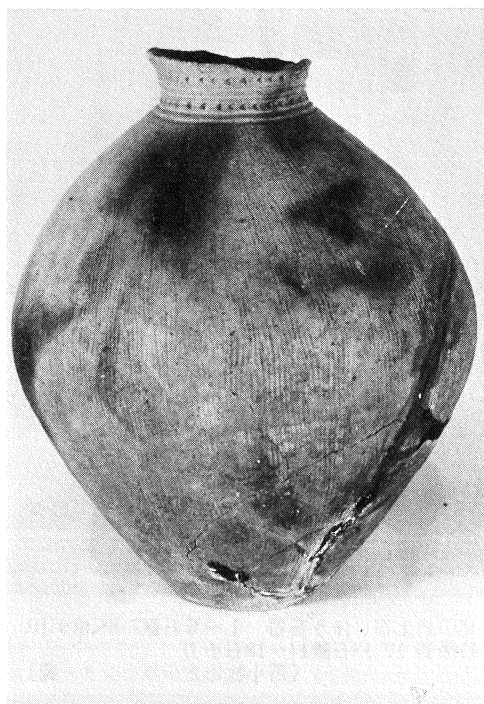


タブコブ遺跡出土の恵山式土器台付鉢 (台部欠)
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

するところから、多くの遺跡では大なり小なりの貝塚が伴って発見されている。そして貝塚の共伴は別としても二・三の例を除いて、遺跡のほとんどが墳墓群を主体とする遺跡であることもこの期の遺跡の特徴と思われる。

恵山期の墳墓のタイプとしては、恵山貝塚で見られるような積石を伴うもの、室蘭市絵鞆遺跡で見られる扁平な板石を伴うもの、鵜川町汐見遺跡のような盛土を持つものと、一般的な土壇墓だけのものがあるよである。

苫小牧市内からはタブコブ、金森、植村A、大曲、亀谷、植苗橋下、猿子、緑ヶ丘A、ニナルカ、柏原5遺跡などから恵山式土器が発見され、正式調査されたタブコブ遺跡と緑ヶ丘A遺跡からそれぞれ墳墓が発見されている。昭和三十八年に調査されたタブコブ遺跡では、恵山式土器の系統を引く汐見式土器が副葬された一基の墳墓が発見され報



細口短頸の恵山式土器出土の遺跡
〔苦小牧市青少年センター蔵〕
クフコブ壺形土器

告されている。図で判るように墳墓は直径一二〇センチメートル、深さ八〇センチメートルほどの円形プランで、底に行くにしたがい若干広がりを見せており、底部にベニガラを散布し、石小刀S-1、石斧S-2、石鏃S-3、磨石S-4とあり、石器類は主に西側へ、完形土器三個は東壁に配置され、完形土器のうち一個P-3の中には蛇紋岩製の玉が一個副葬されていたのである。

また、昭和四十一年発掘調査された清水小学校前の緑ヶ丘A遺跡からは、半島状になった丘陵先端部から九基の墳墓が発見された。これらは主に少量の盛土を持つもので、二基には一部積石も認められた。ほとんどの墳墓の盛土には恵山式土器を壊してそれを散布していたが、墓壇内にベニガラも散布してあった。副葬品として各墳墓から発見された遺物は石鏃一〇、搔器一三、石斧五、石皿二、石鏃状石器一、砥石一、石棺一、石核二、石錐一、敲石九、土製管玉、軽石製のペンダントもしくは浮子と思われるものが一点発見された。また、付近の小学、生によって靴型石器三点表採されている。散布されていた恵山式土器を接合したところ、壺、鉢が主体で、注目されるものとしては図に示す変形工字文を施した台付深鉢型土器があったことである。

このほか、遺物としては写真で見られるような七個の山形突起を持ち口縁部が外反し、胴部全面には縞縄文が施さ



後北A式土器、平田遺跡出土



後北A式土器、植村遺跡出土



後北C式土器、平田遺跡出土



後北B式土器、平田遺跡出土
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

れ、その上に胴上半部に六本と底部に三本、さらに口縁部裏側に二本の沈線を持った台部の欠損した台付深鉢土器（タフコフ遺跡出土）。口唇部に刻目文を施し無文帯を頸部を中心に六本の沈線文で区画した深鉢（大曲遺跡出土）、同じような手法で頸部に列点文を施した広口壺（大曲遺跡出土）や胴部全面に縞縄文を施し、頸部のみに沈線と列点文を施した細口短頸の壺形土器（タフコフ遺跡出土）などがある。

江別期の遺構や苫小牧市内における遺跡の分布については第一章、第四節で述べたとおりであるが、江別式土器は前半の江



厚賀町賀張出土の北大式土器
〔苦小牧市青少年センター蔵〕

別Ⅰ、Ⅱ式では甕、鉢が主体でわずかに片口土器が存在しているし、後半では鉢型土器で吊耳をつけた土器もある。また、副葬用に彩色したものや底部に㊥や㊦などの文様を施したもの、焼成以前に底部に孔をあけた土器などがあり、彩色用の顔料として、赤色の第二酸化鉄のほか水銀朱、石灰岩、白色土、黄色粘土などが用いられている。

昭和二十八年、河野博士によつて調査された平田遺跡では、数個の竪穴状ピットから図に見られるような完形土器が三個出土している。一個は江別Ⅱ式、一個は江別Ⅳ式、他の一個は江別Ⅲ式に相当する土器である。その

他、三十点ほどの破片と須恵器が発見されている。また植村A遺跡からは小型ではあるが、半月型の刻目文を線状に施した江別Ⅰ式に相当する土器が確認されている。

その他、断片的な資料としては、タフコブ、大曲、大島遺跡から、江別Ⅱ、Ⅲ式土器、それに緑ヶ丘A・B、糸井植苗橋下、有珠川遺跡などから江別Ⅲ式の土器が発見確認されている。

こうして見た場合、その地理的条件から当然江別式文化の中に入り、恵山式文化の周辺に当たるとされる苦小牧地方で、緑ヶ丘やニナルカ遺跡など比較的規模の大きい恵山式土器の遺跡が形成されるのに江別式文化期の遺跡は、いわゆる後北C式の分布する遺跡は数的に若干多いとしても、その遺跡の様相は貧弱なものが多いように見受けられる。江別式土器に伴う土器群としては、恵山期の項で述べたような扁平で関のある両面加工のナイフ、靴型石器と呼ば

れるものが代表的で、その他、ピット内からは二等辺三角形をした石鏃が多く出土する。また、小型の円型を呈する搔器も多く出土するが、このころより利器としての石器は、徐々にその使命を終り新しい金属器へと変って行くようである。そのため、材質、型などに斉一性がなくなり、まにあわせの材質によって用をたすといった感じのものが多くなってくる。

最後に北大期の遺構、遺物であるが、苫小牧市内からは目下のところ、他の時期の遺物とともに断片的に北大式土器が発見されているにすぎない。次にその主な出土遺跡を述べるならば、植村遺跡、大曲遺跡、北炭山林遺跡などで発見されている土器片も、口縁部や胴部破片など数点のみである。そのため、遺構についても、具体的な墳墓や住居址については不明で、今後の調査を待たなければならない。

〈主要参考文献〉

- 佐藤一夫 『恵山文化』 「考古学手帳18」 昭和三十八年
- 大場利夫、千代肇 『周辺地域的情勢 北海道』 「日本の考古学Ⅲ」 昭和四十一年 河出書房
- 大場利夫、溝口稠 『室蘭市絵柄遺跡発掘調査概要報告書』 昭和四十六年 室蘭市教育委員会
- 大場利夫、扇谷昌康 『勇払郡鵠川遺跡』 「北方文化研究報告19」 昭和三十九年 北海道大学
- 佐藤一夫 『苫小牧市高丘緑ヶ丘遺跡発掘調査概要報告書』 昭和四十一年 苫小牧市教育委員会
- 沢四郎、富水慶一 『北海道阿寒町の文化財 先史文化編』 昭和三十九年 阿寒町教育委員会

第五節 擦文時代の遺跡と遺物

道東地方の海岸段丘や旭川市神居古潭などでみられる円形の凹地は、擦文時代の竪穴住居の跡で、現在でも何十、何百と残っている地方がある。

苫小牧地方は、樽前山のたび重なる噴火活動があり、このような凹地になった竪穴住居址は残されていないが、土壌の腐植化の少ないエリモ岬や、隣の千歳市などでは、現在でもこのような竪穴が残されているのである。擦文時代の遺跡としては、今述べたような竪穴住居、またそれらが多数集まった竪穴住居址群、墳墓などが代表的な遺跡である。

しかし、苫小牧地方では、今のところ擦文式土器のみを主体とする遺跡は発見されておらず各々の時期の遺物と伴出しながら遺物が発見されているのである。先ず、住居について述べるならば、いわゆる竪穴住居であるが、時期によって若干の相違が見られる。

すなわち、縄文時代や続縄文時代の竪穴住居であれば、一辺四―五メートルの隅丸方形ないし方形のプランを持った住居の中央に石囲みないし灰の堆積だけの炉が設けられている。しかし、擦文式土器の発生が、本州からの土師器の渡来によって成立したごとく、この時代の住居にも古墳文化の竪穴住居の影響が入っているのである。

それは炉にかわって新しく導入されたカマドである。

従来までは、住居の中央に炉を設け、照明と物の煮沸き、暖房用と三つの目的を持っていた炉であるが、古墳時代の中ころに発生したカマドは、擦文時代の北海道にも伝播してきたのである。



図4図-1 第1号住居址平面図及竈位断面図。ただしPとしたものは土器を示す。Pの後に数字を付けたものは柱穴もしくはそれに類似のピット。番号は裏に一致。Sは石を、f、p、は陶土、灰を示す。竈位断面はT a-a線参照。

ウサクマイB遺跡の住居址 (千歳市ウサクマイB遺跡1974)〔千歳市教育委員会〕

また、これらカマドを伴った竪穴住居址からは、甕、壺、高杯、碗、甌などの擦文式土器、土師器、須恵器などの土器類のほか、土製紡錘車、鉄製品、玉類などの装身具などが発見される。次に墳墓であるが、擦文時代の墳墓には大きく二つの系統がある。

一つは昭和初年ころ、恵庭市、江別市、千歳市などで調査研究された北海道式古墳であり、他の一つは従来からの伝統による竪穴式の土壇墓である。

北海道式古墳とは、本州東北部に見られる古

カマドは住居のほとんど南東ないし北壁に粘土でカマドの燃焼室を設け前面には焼き口があり、その中には煮沸用の土器を支えるための土製の支柱（支脚）を設けたり、場合によっては、完形土器の底部を上に向けて使用している場合も少なくない。

さらにカマド上面には、煮沸用の土器を乗せる穴があり、焚口後部には竪穴住居の堀込み部分から屋外にかけて煙道があり、外部へと煙が出るようになっていいる。苫小牧地方では正式なプランそのものは残されていないが、大場利夫博士が調査されタブコブ遺跡と高丘遺跡からカマドが発見されているし、タブコブ遺跡からは土製の支脚と思われるものが二点出土している。

墳時代終末の円墳に似たもので、円形ないし楕円形を呈する直径六〜七メートル、(小さなものは三メートル前後)、マウンドの高さが三〇〜八〇センチメートル、周囲に幅六〇センチメートル〜一メートル、深さ一〇〜三〇センチメートルの周溝を持った古墳で、その中央に、ほぼ南北に遺体を埋葬する内部主体があり、その中に東北地方の終末古墳がそうであったように沢山の副葬品が埋葬されている。

それらの副葬品とは、土師器、擦文式土器、和同開弥、直刀、藏手刀、刀子、袋柄鉄斧、鉄鎌、鍔帯金具、環状装身具、勾玉、ガラス玉などが発見されるし、毛抜形刀、糸切底の土師器、須恵器などが発見される。

また、土塚墓では、千歳市ウサクマイで発見され、藏手刀が副葬されていたものや、恵庭市柏木川遺跡で発見された鉄鍬、刀子、鎌、それに擦文式土器などが発見された墳墓などが有名である。

当地方からは、これら北海道式古墳や、土塚墓の具体的なものは発見されていない。しかし、故河野広道博士が平田遺跡や植村遺跡を調査された際、充分当市にもこれらの墳墓群の存在が可能であるとし、その著、『苫小牧地方古代史』に述べられているのである。

現在まで確認されている擦文時代の遺跡としては、タブコブ、植村A、平田、大曲、北炭山林、大島、亀谷、植苗橋下、斉藤、大槻、高丘、演習林、泉の沢遺跡などがあげられる。

次にこれらの遺跡から発見された代表的な遺物について述べてみる。

タブコブ遺跡では、幾何学的刻線文様を施す刻文土器、口縁部に平行沈線文を有し、いわゆる刷毛目あるいはヘラの整形による擦文(もちろん刻文にもこれらの整形痕はある)土器があり、その他、土師器破片、その中にはロクロを使用し、切断の際糸で切った糸切り痕のある土師器も含まれているし、土製支脚ないし、土製のふいご口と思われるものが二点出土している。



植村遺跡出土の擦文式土器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



植村遺跡出土の須恵器
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

植村遺跡からは図に示すような擦文式土器をはじめ、高杯の台部、内黒の土師器破片などがある。しかし、当遺跡で一番注目されるのは何といっても二点の須恵器である。

一点は、元苫小牧西高等学校教諭で現在、北海道教育庁振興部文化課指導主事になっている畑宮清一郎が西高校郷土史研究部の顧問をしていた際に発見した細口の壺であり、他の一点は河野博士によって発見された表面は縄目で裏面に青海波の施された大型の丸底甕である。この甕の破片は、昭和四十六年に筆者によって調査された際も一部発見され、その後復元されて今日に至っているものである。

この二点の須恵器を考えた場合、どうも、ただ単に液体用の容器として道内に移入されたものではなく、骨壺ないし、何か宗教的な容器として移入されたものではないかと考えられる。

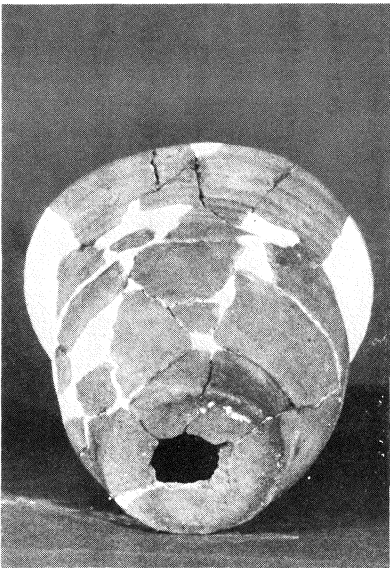
平田遺跡では、表面がヘラで美しく整形され口縁部の消失した深鉢型の土師器と植村遺跡出土の大形甕様の敲目の



亀谷遺跡出土の土師器



大曲遺跡出土の擦文式土器



糸井B 遺跡出土の擦文式土器
(キーリングのあるもの)

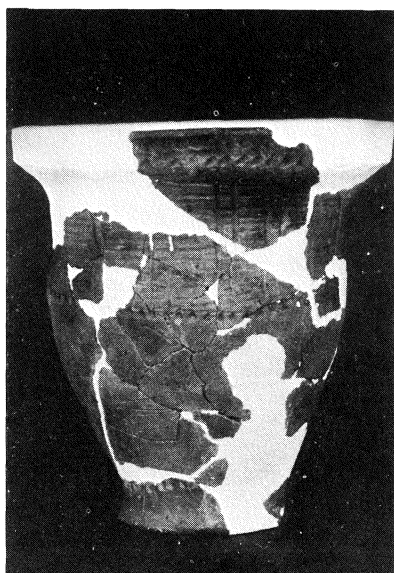


平田遺跡出土の土師器

ある須恵器破片が一点出土している。大曲遺跡からは、写真に示すような、刷毛目痕のある大形の擦文式土器と綾杉状の幾何学文を主体とする擦文式土器の破片が十数点発見されている。

北炭山林遺跡では擦文、土師器の破片各一点、大島では古くに発見された内黒の土師器破片一点、擦文四点が出土している。この擦文式土器の一点は、苫小牧町史に写真が残されているところから、かなり古くから知られていたものと思う。

亀谷遺跡からは完形の糸切り底の杯が一点、その他大槻遺跡からは胴部にバンドをめぐるし粘土をボタン状に貼りつけたもの、高丘遺跡では胴部に彫刻状の文様を施したもの、糸井B遺跡では底部にキーリング（索孔）してある小型の古いタイプの擦文式土器が発見されているし、その他、植苗橋下、斉藤、糸井A遺跡などから土師器の断片的破片と共に擦文式土器が散発的に発見、採集されている。



高丘遺跡出土の擦文式土器
(原始的なもの)



大槻遺跡出土の擦文式土器
〔いずれも苫小牧市青少年センター蔵〕

〈主要参考文献〉

- 石附喜三男 『北海道千歳市ウサタマイ遺跡』昭和四十九年 千歳市教育委員会
佐藤忠雄 『カムイコタン』「民族学研究第26巻第1号」昭和三十六年 日本民族学会
富水慶一 『擦文文化期竪穴住居址考』「北海道考古学2」昭和四十一年 北海道考古学会
石附喜三男 『北海道における末期古墳と問題点』「古代学研究第六四号」昭和四十七年 古代学協会
石附喜三男 『北海道の原史文化』「新版考古学講座5」昭和四十八年 雄山閣
河野広道 『苫小牧地方古代史』昭和二十九年 苫小牧市教育委員会

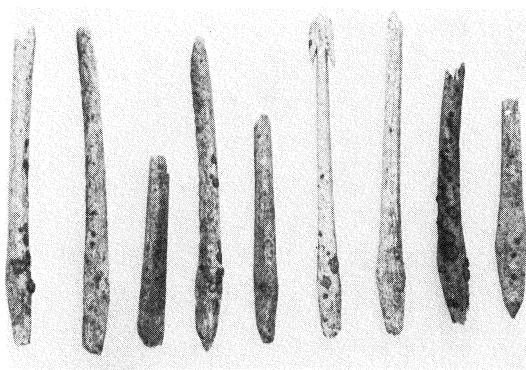
第六節 アイヌ時代の遺跡と遺物

北海道を中心として調査研究する北海道考古学では、アイヌ時代の文化遺産のうち、主として土中から発見出土するものや遺構を対象として、特にアイヌ考古学という分野を設けている。

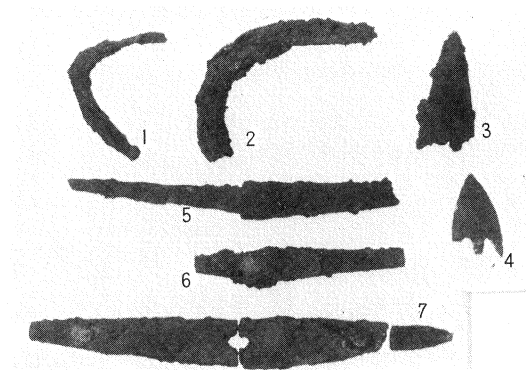
その対象とする遺跡は集落址（コタン址）住居址、墓地、祭祀址（物送り場）、チャシ、舟溜址などであり、その対象とする遺物も石器、木器、金属器、ガラス、瀬戸物など多種多様である。現在、当地方からアイヌ期の遺跡としては矢代町旧墓地、錦岡旧墓地、斉藤、大曲、大槻、タプコプ、植村A・B、緑ヶ丘A、高丘遺跡や沼ノ端、柏原、勇弘などからアイヌ期の丸太舟や舟の破片などが発見されている。

これらの遺跡のほとんどは墳墓で、しかもほとんどが単独で調査されているものが多い。

アイヌの墳墓地は、普通、部落に近い山の中腹あるいは丘陵上などに設けられ、共同墓地の形をとっている。また墓坑は、縦一五〇センチメートル前後、横九〇センチメートル、深さ六〇〜九〇センチメートル前後の楕円型を呈する土坑墓で、死体包に包んだ遺体を墓坑内に埋葬した後、その上に土をかぶせる。埋葬にあたっては男の死者への副



タブコブ遺跡のアイヌ墳墓に副葬された骨鉚
〔苫小牧市青少年センター蔵〕



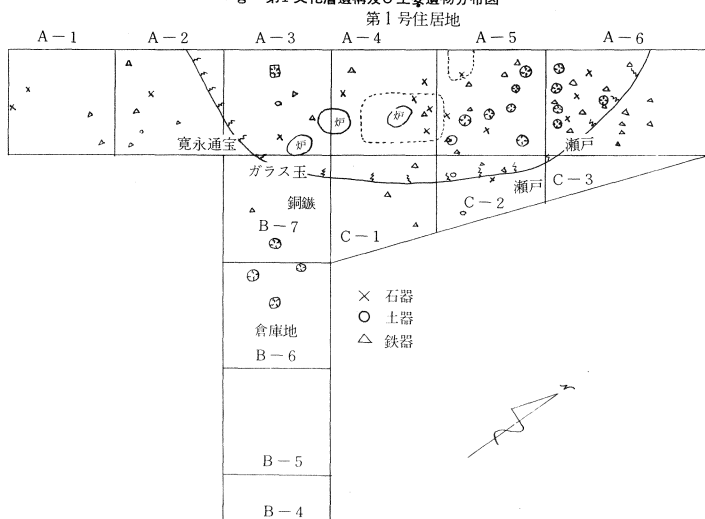
植村遺跡出土の金属器〔苫小牧市青少年センター蔵〕
1～2 マレック 3 鉄鏃 4 銅鏃 5、6 刀子 7 マキリ

葬品としては、火打道具、煙草入、煙管、剃刀、櫛、小刀、碗、衣類、負縄、標等の身装品、弓、矢、竹鏃、釣針、鉚、山刀、胡も等の狩漁具、大刀等などが副葬される（といっても、その全部が副葬されるという意味ではない）。また、女の死者への副葬品としては、衣類、肌着、冠物、縫針、木綿糸、鉄等の裁縫具、火打道具、櫛、煙草入れ、煙管、剃刀、女小刀、包丁、鎌、首飾、耳輪などの装身具、機織り道具、蔦織り具、杓子、篋、小鍋、提子、片口、こめ、ひえ、あわ、負縄等の中からいくつかを副葬するのである。昭和二十九年十月、河野広道博士の指導のもとに発掘調査された植村B遺跡では、縦二六八センチメートル、横八二センチメートル、深さ四二センチメートルの中から小刀一、短刀二、山刀一、鉤

骨製矢柄五、朱塗膳一、碗（内朱外紋付黒地に金の唐草文）一点、嘉祐通宝、洪武通宝の渡来銭各一枚づつが伴った人骨一体が発掘調査されている。

埋葬されていた人骨は東位方向に頭部を向けた伸展葬の成人男性であるが、この墳墓で特に注目されるのが二枚の渡来銭の存在である。嘉祐通宝は北宋銭で紀元一〇五六年の鑄造であり、

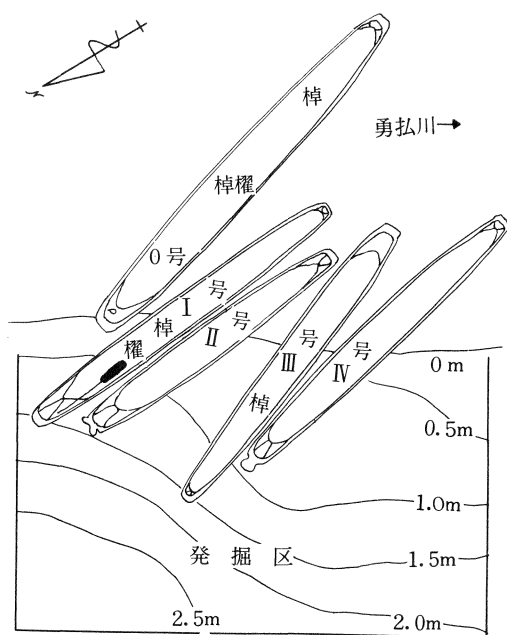
Fig 第I文化層遺構及び主要遺物分布図



植村遺跡の住居址ならびに遺物の出土状況図

『苫小牧市美沢植村遺跡発掘調査報告』

洪武通宝は明の一三六八年の鑄造貨幣である。このことはこの植苗の地に葬られたアイヌ人は少なくとも古銭の渡来伝世を考えても一四〇〇年前後、すなわち室町幕府が確立したところと推定されるわけである。これはまた北海道においてアイヌ文化が歴史の上に登場し、具体的な資料が多くなって来るころでもあるのである。また、昭和三十八年十月、大場利夫博士によって調査された、タフコフB遺跡では、人骨一体分と副葬品として、蝦夷太刀一、山刀一、煙管一、鮭鉤一、膳一、椀一、内耳鉄鍋片一〇、鹿角製矢柄一三、刀子、小刀などがあり、植村B遺跡同様の資料を得ている。この外、矢代町旧墓地では鉈、鎌、砥石、煙管、アイヌ犬の頭骨、錦岡旧墓地では、山刀、高丘C、山刀一、鰐二、齊藤、斧一、山刀一、鰐一、不明品二、大曲、太刀一、山刀二、袋柄の鉄斧、鹿角、骨製矢柄一八点、大槻遺跡では内耳鉄鍋と真鍮製の鉷とが発見されている。この内耳鉄鍋はほとんど完形で鍋の口縁部内側に三カ所の吊耳が付いている。ここで内耳鉄鍋について述べるならば、本州の鎌倉時代ころから炉の上にかけて使用する鍋として出現



沼ノ端アイヌ丸舟出土配置図
(昭和46年) [日本考古学年報20より]

したもので、鍋の内側に二〜四個の紐通し状の耳を設け、底の平らになった鍋である。この鍋が北方地域に流布し、それを模倣して製作したのが、内耳土鍋で北海道最後の土器である。

次に墳墓以外の遺跡としては、昭和二十八年、河野博士や昭和四十四年、筆者によって発掘調査された植村A遺跡がある。この遺跡は前述した植村B遺跡の南側緩斜面に位置するもので、四十四年の調査では火災にあったと思われる住居址の一部、倉庫址なし、熊の檻の跡と思われる四本柱穴跡などの遺構内外から銅鏃、銅片各一、鉄鏃一鉞一、刀子四、銚鉤三、縫針一、発火器一、鉄鍋片二三、鎧用の小札、寛永通宝二、アイヌ玉、瀬戸物など多数の遺物を得

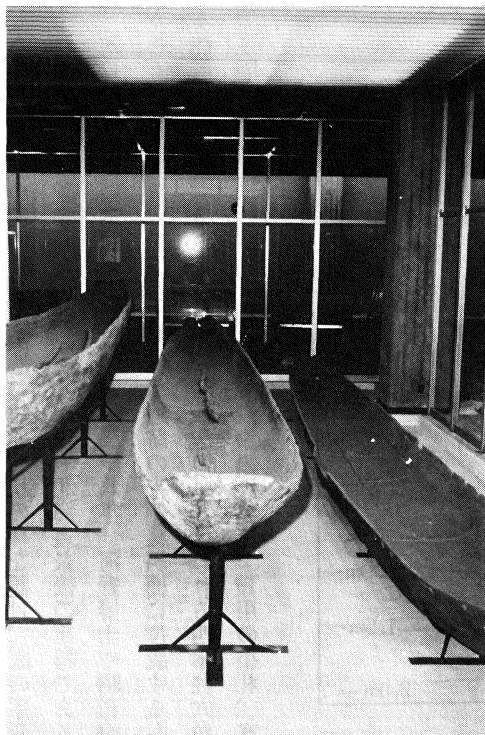
ることができたのである。遺物は樽前B火山灰層(寛文七年、一六六七年の噴火で降下したもの)の上面に位置しており、銅、鉄、瀬戸物、アイヌ玉、寛永通宝など、当時のアイヌ人が和人との交易によって入手したものばかりである。

さらに居住していた年代についても寛永通宝の初鑄が一六三六年で使用されなくなるのは明治初年ころなので、この住居址が製作、営まれたのもおそらく幕末から明治初年ころと思われる。さすれば、現在残されている文献等からも、苫小牧

地方の河川沿岸にアイヌ人が居住していた時代もだいたい明治初年ころまでであろうと思われるのである。

また、近世までのアイヌがそうであるように死者の出た家屋というものは、すべて焼き払われ、新しい家を建てるという風習がある。当遺跡から発見された家屋も、火災にあっている点などもアイヌ家屋としてまちがいのないものである。

最後にアイヌ時代の特徴的な遺構、遺物として、昭和四十二年七月、沼ノ端、稔橋下流より発見、引揚げられたアイヌの丸木舟五隻と出土地点について述べる。



沼ノ端出土アイヌ丸木舟
〔苫小牧市青少年センター蔵〕

これらの丸木舟は、沼ノ端の元北海道開発青年隊苫小牧宿舎の前を流れる勇払川上流の元道々苫小牧―上厚真線稔橋より下流八〇メートルの右岸に半分を水中に、残りを河岸段丘中に埋没していたものが、再び重なる河川の流路の変化により丁度蛇行部分に当たっているため、昭和二十年ころより三隻の丸木舟が見えかくれしていたらしいのである。

昭和四十一年に至り、苫小牧市教育委員会では、この丸木舟を発掘引揚げられるべく、北海道大学北方文化研究施設、考古顧問大場利夫博士に調査を委嘱、発掘引揚げ作業にとりかかったのである。

その結果、約一週間の調査期間中、市教委職員および北海道開発青年隊員等の協力により、当初三隻とされていたアイヌ丸木舟がさらに二隻追加され、五隻の丸木舟が発見されたのである。

これら五隻の丸木舟には、普通チップと呼ばれ河川湖沼で使用されるものと、文献では残されていたが現存しなかった海猟、航海用のイタオマチップ（板綴舟）が二隻含まれていたことである。

さらに関係者を驚かせたことは、これらの丸木舟中ゼロ号艇と呼ばれたチップは、長さ九・〇三メートルもあり、現存するアイヌ丸木舟としては最大のもの、さらに船縁にアイヌ文様を彫刻したもの、また、丸木舟の中から発見された棹や櫂などの推進具類には、アイヌ特有の所有印であるイトツパ（家紋）、シロシ（印）などが施されていたことである。

次に各艇のデーターを示すと次のとおりである。 単位メートル（引揚げ時の寸法による。）

沼ノ端出土アイヌ丸木舟計測表

船名	名称	全長	最大巾	深さ	材質	附属品
〇号艇	チップ	九・〇三	〇・九四	〇・三〇	カツラ	櫂の破片一 棹二本
一号艇	チップ	七・八五	〇・七四	〇・三〇	ヤナギ	櫂（一・九八）一点 棹一本
二号艇	イタオマチップ	六・五〇	〇・七四	〇・三〇	カツラ	
三号艇	チップ	七・四〇	〇・七三	〇・三五	カツラ	棹（三・七二）一点
四号艇	イタオマチップ	七・六六	〇・七二	〇・二七	アオダモ	

（材質は北海道大学名誉教授（現北海道開拓記念館長）犬飼哲夫博士による）

これらのアイヌ丸木舟の発見は、当時全国的な話題をよんだが、丸木舟の埋まっていた地層が寛文七年（一六六九）の樽前山の噴火による樽前B層であることから、今から約三〇〇年前のものであると断定したが、最近、棹の一部を学習院大学木越教室でカーボン測定した結果、今から約七七〇年前という数値が得られた。

なお、現在は北海道指定文化財に指定され、苫小牧市青少年センターに保管され、展示公開されている。

〈主要参考文献〉

桜井清彦 『日本考古学の発達三』 「考古学概況」 昭和四十七年 講談社

佐藤一夫 『アイヌ民族資料展目録』 昭和四十五年 苫小牧市青少年センター

多田大 一 『苫小牧Ⅱ号（植村）遺跡発掘報告』 「郷土の研究Ⅱ」 昭和四十二年 苫小牧郷土文化研究会

『苫小牧市タフコフ遺跡調査報告書』 昭和三十八年 苫小牧市教育委員会

『アイヌ民族誌』 昭和四十四年 アイヌ文化保存対策協議会編 第一法規

佐藤一夫 『苫小牧市美沢植村遺跡調査報告』 「郷土の研究Ⅲ」 昭和四十六年 苫小牧郷土文化研究会

河野広道 『苫小牧地方古代史』 昭和二十九年 苫小牧市教育委員会

佐藤一夫 『苫小牧市沼ノ端丸木舟発掘調査概要報告書』 昭和四十一年 苫小牧市教育委員会

大場利夫、佐藤一夫 『北海道苫小牧市沼ノ端アイヌ丸木舟出土遺跡』 「日本考古学年報19」 昭和四十六年 日本考古学年報